福　岡　市

板付周辺遺跡調査報告書第19集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第567集

1998

福岡市教育委員会

横山浩一殿寄贈

福　岡　市

板付周辺遺跡調査報告書第19集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第567集

1998

福岡市教育委員会

序

福岡市は豊かな自然環境に恵まれ、地理的条件も加わり、古来より海外交流の拠点として栄えてきました。稲作農耕の伝播を示す板付遺跡、古代の迎賓館である鴻臚館、貿易都市、博多など多くの歴史遺産があります。

福岡市教育委員会では、文化財の保存と保護措置に鋭意努めているところであります。しかし、アジアの拠点都市を目指して都市づくりが進んでいる福岡市は変貌著しく、各種の開発事業によって、失われゆく埋蔵文化財も少なくありません。

福岡平野のほぼ中央に位置する板付遺跡は、大正6年　中山平次郎博士によって初めて学界に紹介されました。昭和26年には日本考古学協会によって発掘調査が実施され、以後明治大学、九州大学、福岡県教育委員会、福岡市教育委員会へと発掘調査が引き継がれ、数々の大発見がありました。環濠集落・最古の水田の確認は、板付遺跡が日本最古の農村遺跡の一つであることを確固たるものとしました。昭和51年には、遺跡の中心地が国史跡に指定され、平成7年には指定地内の整備も終了し、弥生時代開始期の史跡として広く市民に親しまれているところであります。

本書は、昭和52・53年度に発掘調査を実施した板付遺跡の成果の一部を報告するものです。調査はいずれも、住宅改築に伴う緊急調査でありますが、調査区は指定地に隣接し、板付遺跡の歴史を解明するには、欠かせない資料を提供しています。

発掘調査から報告書作成まで長時間を要する結果となりましたが、その間、ご指導いただきました先生方をはじめ、地元の皆様、発掘作業員、整理作業員等、多くの方々の協力を得ましたことに深甚の感謝を表するものであります。

本書が埋蔵文化財の保護と理解を深める一助となり併せて研究資料としてご活用いただけることを願うものであります。

平成10年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　町　田　英　俊

例　言

1. 本報告書は、福岡市教育委員会が国庫補助を受けて、昭和52･53年度に実施した福岡市博多区板付遺跡および周辺遺跡の民間宅地造成に伴う緊急調査の報告の一部である。本書に収録したのはF－5C区･F－7a・7b・7c区の報告である。
2. 本報告書に収録した調査区の発掘調査は山崎純男･沢　皇臣･山口譲治･横山邦継が担当した。
3. 本報告書に使用した図の作成･写真の撮影には山崎純男･沢　皇臣･山口譲治･横山邦継･原俊一･前田義人があたり、製図は山崎がこれにあたった。
4. 本報告書の執筆は、各担当者の調査記録をもとに、山崎がこれにあたった。
5. 調査に関わる図面、写真などの記録類と出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵･保管される。
6. 本書の編集は山崎がおこなった。

遺跡調査番号	7837			遺跡略号	ITZ
調査地地籍	福岡市博多区板付2丁目12－10			分布地図番号	24
開発面積	554m²	調査対象面積	554m²	調査面積	554m²
調査期間	1978年(昭和53年)4月　日～1978年8月30日				

遺跡調査番号	7714			遺跡略号	ITZ
調査地地籍	福岡市博多区板付5丁目3－26			分布地図番号	24
開発面積	450m²	調査対象面積	450m²	調査面積	450m²
調査期間	1977年(昭和52年)11月24日～1977年12月25日				

遺跡調査番号	7838			遺跡略号	ITZ
調査地地籍	福岡市博多区板付5丁目3－4			分布地図番号	24
開発面積	327m²	調査対象面積	327m²	調査面積	327m²
調査期間	1978年(昭和53年)5月1日～1978年7月30日				

遺跡調査番号	7844			遺跡略号	ITZ
調査地地籍	福岡市博多区板付5丁目3－26			分布地図番号	24
開発面積	230m²	調査対象面積	230m²	調査面積	230m²
調査期間	1978年(昭和53年)4月1日～1978年8月30日				

本　文　目　次

第１章　はじめに……1
　１．調査に至る経過 ……1
　２．調査体制 ……2
　３．周辺の遺跡と歴史的環境 ……4
第２章　Ｆ－５ｃ区の調査……7
　１．調査区の位置 ……7
　２．遺構と遺物 ……7
　　（１）第１号竪穴と出土遺物 ……7
　　（２）第２号竪穴と出土遺物 ……13
　　（３）第３号竪穴と出土遺物 ……13
　　（４）第４号竪穴と出土遺物 ……16
　　（５）A溝と出土遺物 ……19
　　（６）B溝と出土遺物 ……24
　　（７）Ｆ－５ｃ区出土遺物……27
第３章　Ｆ－７a区の調査 ……29
　１．調査区の位置 ……30
　２．遺構と遺物 ……31
　　（１）第１号袋状竪穴と出土遺物 ……31
　　（２）第２号袋状竪穴と出土遺物 ……33
　　（３）第１号地下式横穴と出土遺物 ……36
　　（４）第２号地下式横穴と出土遺物 ……36
第４章　Ｆ－７b区の調査 ……37
　１．調査区の位置 ……37
　２．遺構と遺物 ……38
　　（１）第１号竪穴と出土遺物 ……38
　　（２）第２号竪穴と出土遺物 ……39
　　（３）第３号竪穴と出土遺物 ……43
　　（４）第１号地下式横穴と出土遺物 ……45
　　（５）不明土坑 ……46
　　（６）第１号土坑墓 ……46
　　（７）掘立柱建物 ……46
第５章　Ｆ－７c区の調査 ……47
　１．調査区の位置 ……47
　２．遺構と遺物 ……47
　　（１）第１号袋状竪穴と出土遺物 ……47

（2）第２号袋状竪穴と出土遺物 ……50
（3）第１号竪穴住居址と出土遺物 ……54
（4）近世井戸 ……54
（5）近世甕棺墓 ……55
第６章　若干のまとめ ……56

挿　図　目　次

Fig. 1　板付遺跡の地形と各調査区 ……3
Fig. 2　板付遺跡の位置と周辺遺跡 ……5
Fig. 3　F−5a,b,c 調査区の位置 ……8
Fig. 4　F−5c 区全体図 ……9
Fig. 5　F−5c 区　第1号竪穴実測図 ……10
Fig. 6　F−5c 区　第1号竪穴出土遺物実測図 ……11
Fig. 7　F−5c 区　第2号竪穴･出土遺物実測図 ……12
Fig. 8　F−5c 区　第3号竪穴実測図 ……13
Fig. 9　F−5c 区　第3号竪穴出土遺物実測図 ……14
Fig. 10　F−5c 区　第4号竪穴実測図 ……17
Fig. 11　F−5c 区　第4号竪穴出土遺物実測図 ……18
Fig. 12　F−5c 区　A溝･B溝断面実測図 ……19
Fig. 13　F−5c 区　A溝出土遺物実測図Ⅰ ……21
Fig. 14　F−5c 区　A溝出土遺物実測図Ⅱ ……22
Fig. 15　F−5c 区　A溝出土遺物実測図Ⅲ ……23
Fig. 16　F−5c 区　B溝出土遺物実測図 ……25
Fig. 17　F−5c 区　出土遺物実測図Ⅰ ……26
Fig. 18　F−5c 区　出土遺物実測図Ⅱ ……27
Fig. 19　F−6a, b, 7a〜d, G−7a, b調査区の位置 ……29
Fig. 20　F−7a区全体図 ……30
Fig. 21　F−7a区　第1号袋状竪穴実測図 ……31
Fig. 22　F−7a区　第1号袋状竪穴出土遺物実測図Ⅰ ……32
Fig. 23　F−7a区　第1号袋状竪穴出土遺物実測図Ⅱ ……33
Fig. 24　F−7a区　第2号袋状竪穴出土遺物実測図Ⅰ ……35
Fig. 25　F−7a区　第2号袋状竪穴出土遺物実測図Ⅱ ……36
Fig. 26　F−7b区全体図 ……37
Fig. 27　F−7b区　第1号竪穴実測図 ……38
Fig. 28　F−7b区　第2号竪穴実測図 ……39

Fig. 29　F−7b区　第2号竪穴出土遺物実測図Ⅰ……41
Fig. 30　F−7b区　第2号竪穴出土遺物実測図Ⅱ……42
Fig. 31　F−7b区　第3号竪穴実測図　……43
Fig. 32　F−7b区　第3号竪穴出土遺物実測図　……44
Fig. 33　F−7b区　第1号地下式横穴・出土遺物実測図　……45
Fig. 34　F−7b区　不明土坑・第1号土坑墓実測図　……46
Fig. 35　F−7c区全体図　……47
Fig. 36　F−7c区　第1号袋状竪穴実測図　……48
Fig. 37　F−7c区　第1号袋状竪穴出土遺物実測図Ⅰ……49
Fig. 38　F−7c区　第1号袋状竪穴出土遺物実測図Ⅱ……50
Fig. 39　F−7c区　第2号袋状竪穴実測図　……51
Fig. 40　F−7c区　第2号袋状竪穴出土遺物実測図　……52
Fig. 41　F−7c区　第1号竪穴住居址・出土遺物実測図　……53
Fig. 42　F−7c区　近世井戸・近世甕棺墓実測図　……55

図　版　目　次

PL.1　①　F−5c区全景
　　②　F−5c区　A溝
　　③　F−5c区　A溝、下駄出土状況
PL.2　①　F−5c区　1号竪穴遺物出土状況
　　②　F−5c区　3号竪穴遺物出土状況
　　③　F−7b区　3号竪穴遺物出土状況
PL.3　①　F−7a区全景
　　②　F−7a区　第1号地下式横穴
　　③　F−7a区　第2号地下式横穴
PL.4　①　F−7a区　第2号袋状竪穴
　　②　F−7a区　第2号袋状竪穴断面
　　③　F−5c区　第1号袋状竪穴
PL.5　①　F−7b区全景(西から)
　　②　F−7b区(南から)
　　③　F−7b区　第1号地下式横穴
PL.6　①　F−5c区　第4号竪穴遺物出土状況
　　②　F−7b区　第2号竪穴遺物出土状況(Ⅰ面)
　　③　F−7b区　第2号竪穴遺物出土状況(Ⅱ面)

PL.7 ① F−7c区全景
② F−7c区　第1号竪穴住居址
PL.8 ① F−7c区　第1号竪穴住居址
② F−7c区　第1号竪穴住居址中央ピット遺物出土状況(扁平片刃石斧)
③ F−7c区　第1号竪穴住居址中央ピット遺物出土状況(鉄器)
④ F−7c区　第1号竪穴住居址柱穴遺物出土状況
PL.9 ① F−7c区　第1、2号袋状竪穴
② F−7c区　第1号袋状竪穴面断面
③ F−7c区　第2号袋状竪穴
PL.10 ① F−7c区　第1、2号袋状竪穴
② F−7c区　第1号袋状竪穴
③ F−7c区　第2号袋状竪穴遺物出土状況

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

福岡平野のほぼ中央部に位置する板付遺跡は、福岡市博多区板付２丁目から５丁目にかけて拡がる大規模な弥生時代を中心とした、先土器時代から現代に至る複合遺跡である。遺跡は古くから知られており、江戸時代の終わり頃　遺跡の中央部に所在していた通津寺境内から広形銅矛５口が発見されたことが、通津寺過去帳に記されている。大正時代には、通津寺の南東に存在した円墳状の高まりが土取りに合い、金海式甕棺とみられる前期末の甕棺群が出土し、数基の甕棺から細形銅剣、細形銅矛各３口が発見され、現在、東京国立博物館に保管されている。この甕棺群が発見された円墳状の高まりは、現在の知見では墳丘墓であった可能性が極めて強い。これら青銅器の発見から、遺跡の重要性は、古くから認識されていた。昭和26年から開始された日本考古学協会・明治大学・九州大学を中心とした発掘調査は、縄文時代から弥生時代への移行過程、換言すれば、弥生時代開始期の諸問題の解明を意図したものであった。その成果は当初の発掘目的を充分に果たすものであった。集落を濠で囲む最古の環濠集落が明らかにされ、炭化米や土器上に残された籾圧痕、石庖丁等の大陸系磨製石器、刻目突帯文土器と板付Ｉ式土器の共伴から、最古の稲作農耕の存在が確認され、最古の農村の姿を具体的にうかびあがらせることとなった。日本の歴史の中で最も大きな変革期を明らかにする重要な成果を得ることとなったのである。

昭和40年代後半にはじまる開発の急増は、板付遺跡周辺においても例外ではなかった。遺跡の中心部をなす環濠集落をのせる台地西側の広大な沖積地に市営・県営住宅団地の建設が進められたのをはじめ、周辺部に宅地造成等の開発が進められた。それら宅地造成に伴う緊急調査は福岡市教育委員が実施してきた。これら緊急調査の成果も重要なものであった。集落西側の沖積地では弥生時代以降の全期間を通して水田関連遺構が確認され、当時では数少ない木製農具をはじめとする木製品が多量に出土し、その内容は、弥生時代の姿を如実に示すものであった。また、遺跡の範囲がさらに拡大することが確認され、遺跡の重要性は増々高まることとなった。

昭和51年６月21日には、日本歴史の解明に欠くことのできない重要な遺跡として、環濠集落を含む遺跡の中心と、隣接した沖積地の水田地帯の合わせて27,796㎡が国の史跡として指定された。

板付遺跡および周辺遺跡は、その重要性から、昭和48年以来、民間の宅地造成や住宅建設に伴う遺跡破壊については、国庫補助金を受けて緊急調査を実施してきている。昭和52年・53年度の調査地区は、史跡指定地区内から、史跡保護のために指定地外への転出に伴う住宅建設が多く、遺跡保存のための措置が、指定地外の遺跡、遺構を破壊するという矛盾した現象を生み出す結果となった。

昭和52年・53年度の調査は15地区を対象として実施した。この中で、Ｇ－７ａ・７ｂ地区ではこれまで弥生時代初頭とされていた板付Ｉ式土器段階の水田址を検出した。さらに下層からは縄文時代晩期終末とされていた刻目突帯文土器単純層が確認され、その下面に同時期の水田を検出した。この発見は、日本における水稲農耕の開始を縄文時代晩期まで遡らせただけでなく、縄文時代、弥生時代という時代区分まで問題にするところとなり、大きく報道された。この他、各調査区は指定地に隣接しているため、確認した遺構は集落構造を解明するためには看過できないものである。

なお、昭和52・53年度調査地区の概報は『福岡市板付遺跡調査概報（板付周辺遺跡調査報告書

（5） 1997～8年度)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集、1979年として発行している。また、F－5a区、F－5b区、F－6b区の3ヶ所については、正式報告書『板付周辺遺跡調査報告書第18集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第539集、1997年を刊行している。本報告書に収録したのはF－5c区、F－7a区、F－7b区、F－7c区の4地区の正式報告である。

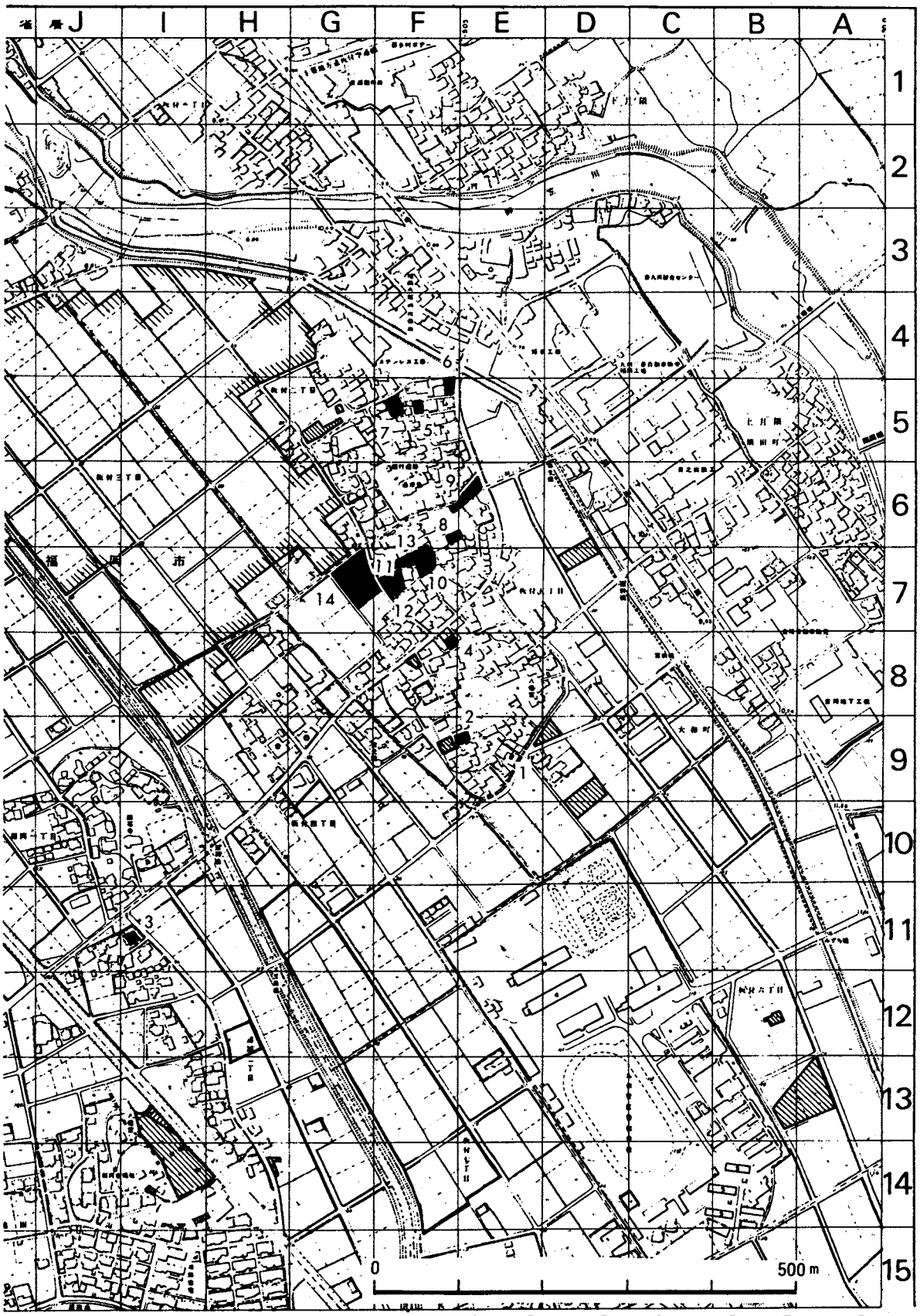
1．F－5c区、板付2丁目12-10外　山浦盛雄氏所有地　554㎡、検出遺構　井戸3基、竪穴3基、溝2条、調査番号7837
2．F－7a区、板付5丁目3-26　中牟田勝昌氏所有地　450㎡、検出遺構　袋状竪穴2基、地下式横穴2基、不明土坑2基、防空壕1基　調査番号7714
3．F－7b区、板付5丁目3-4　中牟田勝昌氏所有地　327㎡、検出遺構　井戸2基、土坑墓1基、掘立柱建物1棟、地下式横穴1基、不明土坑1基、他　調査番号7838
4．F－7c区、板付5丁目3-26　中牟田勝昌氏所有地　検出遺構　袋状竪穴2基、竪穴住居址1基、近世井戸1基、近世甕棺墓5基　不明土坑1基、調査番号7844

2．調査体制

市内における緊急調査の急増により、文化課では、調査体制を完全にとることができない状況下におち入った。そこで、急拠、板付遺跡の調査に従事していた板付遺跡調査事務所の技師と埋蔵文化財係を合同させた調査体制を組み、市内の緊急調査に備えることとなった。昭和52・53年度の市内遺跡の緊急調査のうちの、板付遺跡および周辺遺跡の15ヶ所　有田・小田部遺跡3ヶ所　神松寺御陵古墳・神松寺遺跡を以下の体制で担当することとなった。有田・小田部遺跡、神松寺・神松寺御陵古墳については、すでに報告書と刊行しているので、詳細は下記の報告書によたれたい。

『神松寺遺跡-弥生時代住居址と前方後円墳の調査-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集　1978年
『有田・小田部第6集』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第113集　1985年
『有田・小田部第19集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第377集　1994年
『有田・小田部第23集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第470集　1996年

調査地区　　福岡市博多区板付2丁目～5丁目
調査期日　　1977（昭和52）年5月11日～1979（昭和54）年1月20日
調査主体　　福岡市教育委員会文化部文化課板付遺跡調査事務所（埋蔵文化財係）
調査関係者
　調査指導委員（肩書きは当時）
　　岡崎　　敬　（九州大学文学部教授）
　　横山　浩一　（九州大学文学部教授）
　　森口貞次郎　（九州産業大学教授）
　　三島　　格　（福岡市教育委員会文化財専門員）
　　藤井　　功　（福岡県教育庁文化課課長）
　　下条　信行　（九州大学文学部助手）
　　後藤　　直　（福岡市立歴史資料館）
　福岡市教育委員会



1．E－9a　2．E－9b　3．I－11　4．F－8b　5．F－5a　6．F－5b　7．F－5c
8．F－6a　9．F－6b　10．F－7a　11．F－7b　12．F－7d　13．F－7c　14．G－7a.b
の各調査区

Fig.1　板付遺跡の地形と各調査区

教育長　　戸田成一（当時）　町田英俊（現）
文化部長　　志鶴幸弘（当時）
文化財部長　　平塚克則（現）
文化課長　　清水義彦、井上剛紀（当時）
埋蔵文化財課長　　荒牧輝勝（現）
板付遺跡調査事務所所長　　楢崎　幸利（当時）
埋蔵文化財係長　　三宅安吉（当時）
庶務会計　　安田正義　河鍋好輝（当時）内野保基　　小森　彰　　河野淳美（現）
発掘調査担当
山崎純男　（文化課埋蔵文化財係、現・文化財部大規模事業等担当課長）
沢　皇臣　（文化課板付遺跡調査事務所、現・宮崎県考古学会）
山口譲治　（文化課板付遺跡調査事務所、現・文化財部埋蔵文化財課第二係長）
横山邦雄　（文化課板付遺跡調査事務所、現・文化財部埋蔵文化財センター、主任文化財主事）
調査補助員
原　俊一、前田義人、奈良崎和典、森瀬圭子、小野由美子、村上順子、伊崎俊秋、木下尚子、田口真理、久保智康、山田成洋、市橋重喜、松永幸男、為貞由紀、速見信也、谷　豊信、出利葉浩司

3．周辺の遺跡と歴史的環境

板付遺跡は福岡平野のほぼ中央部に位置する。遺跡は中位段丘Ⅱ面を中心に拡がり、東側を御笠川が、西側に諸岡川、さらに西は那珂丘陵をはさんで那珂川が北流している。福岡平野は奴国の中心と目されていて、板付遺跡周辺部には重要な遺跡が多い。以下、周辺遺跡と歴史環境の概略をみていこう。

福岡平野の歴史の幕開けは後期旧石器時代までさかのぼる。板付遺跡の南西約0.7㎞に位置する諸岡丘陵では、3ヶ所に遺物包含層が確認されている。第1次調査では丘陵斜面で良好な遺物包含層が確認され、ナイフ形石器、台形様石器の共伴する石器文化が明らかになった。また、台地裾の第3次調査では良好ではなかったが細石器文化の包含層が明らかにされた。さらに、第4次調査では台地から延びた北東の低丘陵からナイフ形石器の包含層が確認され、時期の異なった石器文化が近距離で明らかにされている。散発的ではあるが、諸岡周辺の段丘や沖積地からも旧石器が出土している。板付遺跡を乗せる中位段丘Ⅱ面でも点々と石器の出土はある。本報告のＦ－５ｃ区でも台形様石器が出土し、これまでもナイフ形石器、細石器が出土している。那珂の段丘上においても、最近の調査で包含層が確認されつつある。明確な石器が出土していないがナイフ形石器文化期の所産と考えられる。また、井相田遺跡、板付遺跡、那珂君休遺跡等の沖積地の遺跡からも流れ込みの石器が出土している。出土石器には磨滅はあまり認められないので、周辺に有望な遺跡が埋もれている可能性が強い。ナイフ形石器、三稜ポイント等がある。福岡平野における旧石器人は山麓部や段丘面に住みつき活動していたと考えられる。これまで発見された石器は各時期のものが含まれており、さらに遺跡は増加傾向にあり、今後の研究で、編年やそれをもとにした旧石器人の動向が判明する日も近いと考えられる。

縄文時代遺跡も旧石器時代同様に遺跡が判明している訳でなく、これから発見される遺跡が多いと考えられる。調査され、その内容が明らかな遺跡は、板付遺跡の台地西側の弥生時代水田下の低位段

1. 博多遺跡群
2. 福岡城
3. 竪粕遺跡群
4. 箱崎遺跡群
5. 吉塚遺跡群
6. 比恵遺跡群
7. 那珂遺跡群
8. 那珂深ヲサ遺跡、那珂君休遺跡
9. 板付遺跡
10. 諸岡遺跡
11. 雀居遺跡
12. 五十川高木遺跡
13. 井尻遺跡群
14. 日佐遺跡群
15. 須玖唐梨遺跡
16. 須玖永田遺跡
17. 須玖岡本遺跡
18. 須玖四丁目遺跡
19. 赤井手遺跡
20. 三宅廃寺
21. 野多目遺跡
22. 野多目拾渡遺跡
23. 井相田遺跡群
24. 麦野遺跡群
25. 三筑生産遺跡
26. 南八幡遺跡群
27. 雑餉隈遺跡群

Fig.2　板付遺跡の位置と周辺遺跡

丘上に発見された遺跡のみである。この遺跡は現地表下約1.5ｍの低位段丘上に堆積した黒色粘質土層が包含層となっている。遺構は検出されなかったが、土器の出土状況や石器との組み合わせ、遺物に磨滅がみられないことから、包含層はプライマリィな状態と考えられる。出土遺物は押型文土器、撚糸文土器、押型文と撚糸文を併用した土器、無文土器、スクレイパー等がある。縄文時代早期の遺跡である。押型文土器は諸岡遺跡からも数点出土している。最近、板付遺跡近くの沖積地の地下約２ｍから、縄文時代の森林が発見された。周辺からは前期、轟式土器の破片が磨滅して出土しており、周辺に森林が広がり、前期の集落の存在を示唆している。このように、ここ数年、低地の縄文時代遺跡の発見が相次いでいる。近い将来、有望な遺跡が発見され、福岡平野の中央部における縄文時代の文化が解明されると考えられる。とはいえ、次の弥生時代には水田開発が進められ、丘陵部には大規模な集落がつくられる等、農耕社会の開始に伴う諸開発によって丘陵部や沖積地の浅い所に存在した縄文時代遺跡が破壊されたことは充分考えられることであり、弥生時代以降の遺跡から混入状態で発見されるか、沖積地に存在するドングリ類の処理遺跡等であり、丘陵上にあるべき集落は極めて少ない。復原的に見れば、九州の他の地域の縄文遺跡の分布と大差ないと考えられる。ただし、弥生時代の開発によって破壊された縄文遺跡が、予想外に多いことが改めて注意される。今後の調査としては、低地にかくれている縄文時代遺跡の探査と共に、弥生時代以降の遺跡から混入状態で発見される縄文時代遺物に注意を向け、それらを総合した縄文社会の復原が必要である。弥生時代の前史としての縄文時代の解明は今後、重要性を増すことはいうまでもない。

弥生時代になると旧石器、縄文時代の遺跡とは違い、判明している遺跡数は、比較にならない程多い。弥生時代の開始期から終末までの重要な遺跡が分布している。特に本報告の板付遺跡は弥生時代開始期の遺跡としては極めて重要であり、板付遺跡の解明は弥生文化開始の解明に直結しているといっても過言ではない。周辺遺跡は板付の南方にある春日丘陵は奴国の中心地域と目され、須玖岡本遺跡をはじめ、須玖唐梨・坂本遺跡、赤井手・大谷遺跡等から青銅器工房遺跡や埋納遺跡が確認されている。青銅器は質・量共に他の遺跡を圧倒している。御笠川右岸の月隈丘陵では金隈遺跡をはじめとする甕棺墓が分布し、宝満尾遺跡では、昭明鏡、素環頭刀子、ガラス小玉等が発見されている。最近では沖積地においても有力な遺跡が調査されている。福岡空港内にある雀居遺跡からは刻目突帯文土器から前期に至る集落・墓地・あるいは後期の環濠集落が発見されている。前者では多量の木製品が出土し、弥生時代初期の農耕具の実態が明らかになり、墓地からは数少ない前期の人骨が出土するなど注目を集めている。後期の集落からは大型の掘立柱建物が検出され、新たな問題を提起している。溝中からは木製短甲、盾が出土し、後期の緊迫した状況を示してる。なお、月隈丘陵の赤穂ケ浦遺跡からは銅鐸鋳型が出土しており注目される。那珂川。御笠川に挟まれた比恵・那珂の丘陵では、ビル建設に伴う調査が増加し、その重要性が明らかになりつつある。かって区画整理のために丘陵が削平され、中心部が破壊されているにもかかわらず、重要な遺構や遺物が出土している。まさに奴国の中心部の一画を占めることがうなづける。春日丘陵と那珂・比恵丘陵の間に位置する井尻の低丘陵部は調査が少なく実態が明らかでなかったが、最近調査された井尻Ｂ遺跡からは仿製鏡や銅鏃の鋳型が出土し、比恵・那珂から井尻に連なり、さらに春日丘陵にいたる一帯は奴国の中心として再確認されているところである。

第２章　Ｆ－５ｃ区の調査

１．調査区の位置

板付遺跡の中心である環濠をのせる中央台地の北端近くに位置する。史跡指定地の北側中央部に隣接し、環濠北端部から約30ｍ離れた所に位置する。指定地内から移転するための宅地造成地で、面積は554㎡と広くない。調査前は畑地として利用されていた。Ｆ－５a区は東に約15ｍ離れ、Ｆ－５b区はさらに東に約45ｍ離れた所に位置している。

調査区は環濠のめぐる最高位から徐々に下がる緩傾斜面にあたり、標高8.25～9.00ｍを測る。中位段丘Ⅱ面上にあり、約40㎝の耕作土や撹乱層を除去すると、すぐ遺構面に達する。遺構面は削平が著しく鳥栖ローム層が直接顔を出している。調査区の西半部はさらに削平が著しく、調査区中央部で段をもって掘り込まれ、鳥栖ローム層の下にある八女粘土層が遺構面となっている。ちなみに、八女粘土層の下位は硬くしまった砂礫層となっている。この層は板付遺跡における主な湧水源となっており、弥生時代の井戸の掘削は、この砂礫層まだ達しているものが多い。なお、湧水源は鳥栖ローム層と八女粘土層の境にもあるが水質が悪く、雨水時の湧水のみで、保水量は少なかったものと思われる。弥生時代の井戸では、この部分に大きな崩落がみられる。

調査区内で検出した遺構は弥生時代の竪穴４基、小竪穴２基、中世の溝２条で、竪穴のうち３基は井戸である。遺構の分布はFig.4に示した。遺構の分布の概略をみていこう。調査区の北端近くに、中世溝（A溝）が主軸方向をほぼ東西にとって掘削され、両端部はいずれも調査区外にのびている。東側は方向や位置関係からみてＦ－７a区に検出した中世溝と連なるものと考えられる。このA溝に調査区東半部で直交する溝（B溝）が掘削される。A溝とB溝は溝底にわずかに段差がみられるが、切り合い関係なく、同時に掘削されたものであろう。B溝の西側は地下げをしたように掘削・削平されているのでB溝の西の肩部は畦畔状をなしている。弥生時代の遺構である第１号～第３号竪穴はA溝とＢ溝に区画された西側に位置している。第１号竪穴はB溝のすぐ横にあり、第１号竪穴の南西4.５ｍに第２号竪穴、第１号竪穴の西5.5ｍに第３号竪穴が位置している。第２号竪穴と第３号竪穴は約５ｍ離れている。第４号竪穴は中世溝と切り合い関係にあり、A溝とB溝の交点よりやや東の溝底に検出した。小竪穴は調査区の南端近くのB溝東側において確認したが、その性格等は不明である。

２．遺構と遺物

（１）第１号竪穴と出土遺物

第１号竪穴（Fig.５）

電柱の掘り方と重複し、一部が破壊されているがほぼ全形を知ることができる。平面形は東西径138㎝、南北径152㎝の不整楕円形をなす。検出面の観察では、外側の掘り方の中央部に黒色～暗褐色部分が東西径73㎝　南北径63㎝の円形プランに識別され、周囲には八女粘土層のブロックで固められた状態であった。しかし、Ⅱ層以下には円筒状の上層の変化は認められない。掘り方は内側に向かって傾斜し、底面は径35㎝の円形で平担である。壁面は他の井戸に見られるような湧水部の壁の崩落は認められず、断面形は逆台形状をなしている。深さは検出面から213㎝を測る。

埋土の状態は自然流土で、レンズ状をなしている。第１層は黄褐色ロームを混入した暗褐色粘質土

Fig.3　F—5a.b.c調査区の位置

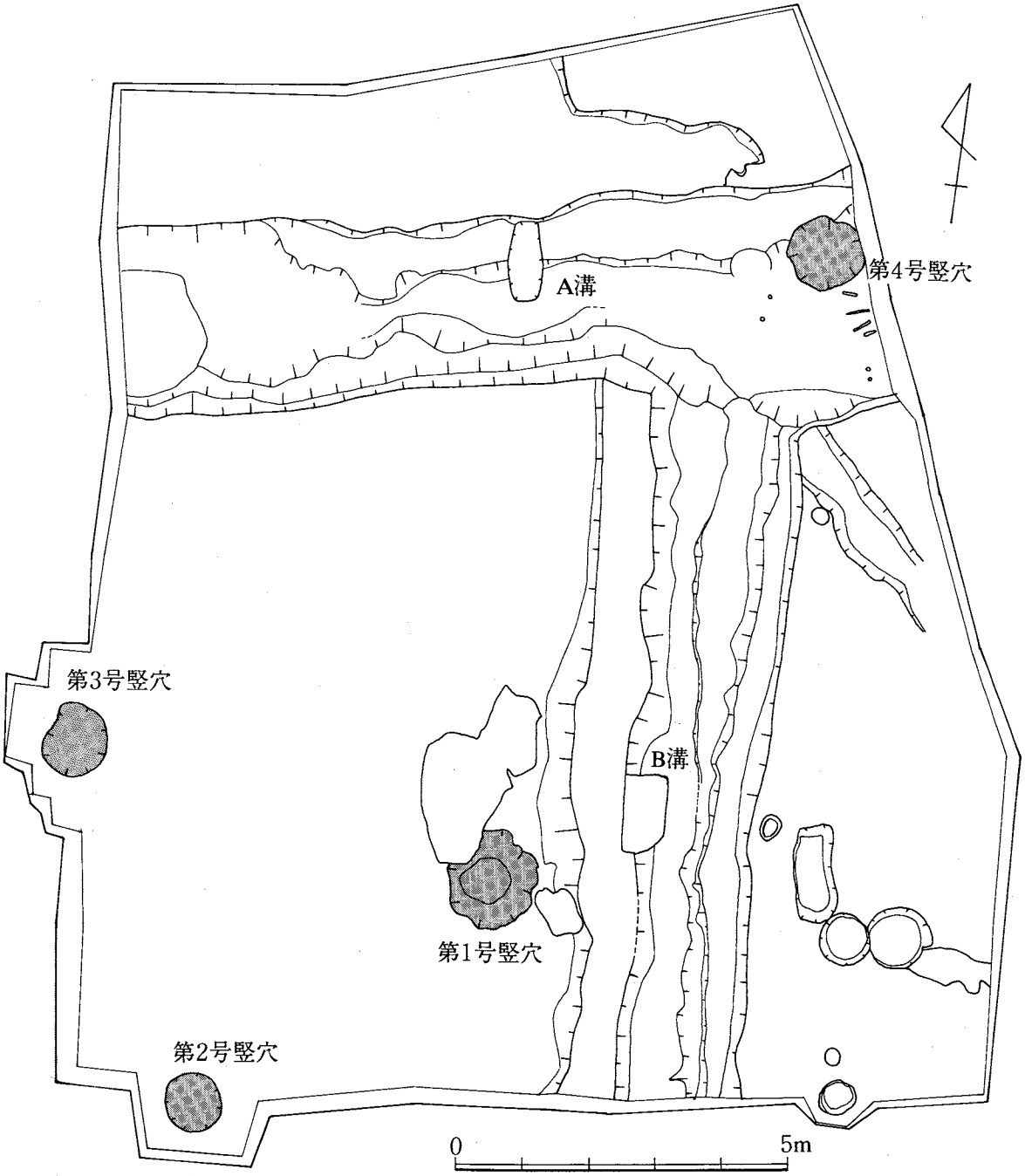


Fig.4　F−5C区全体図

層で、壁にそった部分は八女粘土層のブロックがつめこまれた状態である。厚60～70㎝。第2層　淡灰色粘質土層で、黄褐色粘土層が縞状、レンズ状に混じる。厚20～30㎝。第3層　灰色をおびた黒色砂質粘土層で白色粘土層がレンズ状にはいる。厚さ40㎝前後。木材の枝葉、土器が比較多量に存在する。第4層　黄褐色～黄白色ローム（八女粘土層）の堆積、壁面の崩落に伴うものか。厚5～20㎝。第5層　白色ローム層で下位に黒色粘質土がレンズ状に堆積している。器形の判明する土器片が2個体出土している。厚25～40㎝。第6層　灰色砂層、厚35㎝前後である。基盤層の砂層が崩落し、短期間で埋没した状況を示している。明確な湧水部分は特定できないが、鳥栖ローム、八女粘土層をぶち抜き、砂層まで達しており、遺構中の遺物の出土状況からは井戸であることを証明している。

出土遺物（Fig. 6）

弥生式土器と木材、木葉等の自然遺物がある。弥生土器は破片が多いが、完形を保つのも数点ある。また手づくねのミニチュアー土器も２点あり、井戸祭祀に用いられた土器群であることがわかる。器種は甕、壷、器台、椀等がある。

１～４、８はくの字形口縁をもつ甕形土器の口縁部破片である。１，３は口縁端部がやや肥厚する。内外面共に横ナデ調整を施す。胎土には砂粒が混入される。焼成は良好。色調は１が暗褐色、２が黄褐色、３が暗褐色、４が暗黄褐色、８が外面赤褐色で内面が暗褐色をなす。５，６，９は中期の甕形土器の口縁部である。５，９は逆Ｌ字形口縁、６はＴ字形口縁である。共に内外面は横ナデ調整。９は口縁部に凹線一条がめぐる。胎土には砂粒を混入している。焼成は良好である。色調は５が黄褐色、６が暗褐色、９が黄褐色をなす。７は直口した口縁をもつ。内面に刷毛目調整が施される。胎土には砂粒が混入され、焼成は良好。外面が赤褐色、内面が黄褐色をなす。10はくの字形の口縁をもつ甕形土器、外面にはススが付着している。口縁端部には凹線一条をめぐらしている。内外面は共に刷毛目調整後、横ナデ調整を加える。胎土には石英等の砂粒を混入するが良質。焼成は堅緻、白灰色をなす。11，12は器台の破片、11は口縁端部が角ばる。12は端部は薄いが、胴部は極端に厚くなる。いずれも胎土には砂粒を含み、焼成は良好、共に赤褐色をなす。13～16，19，

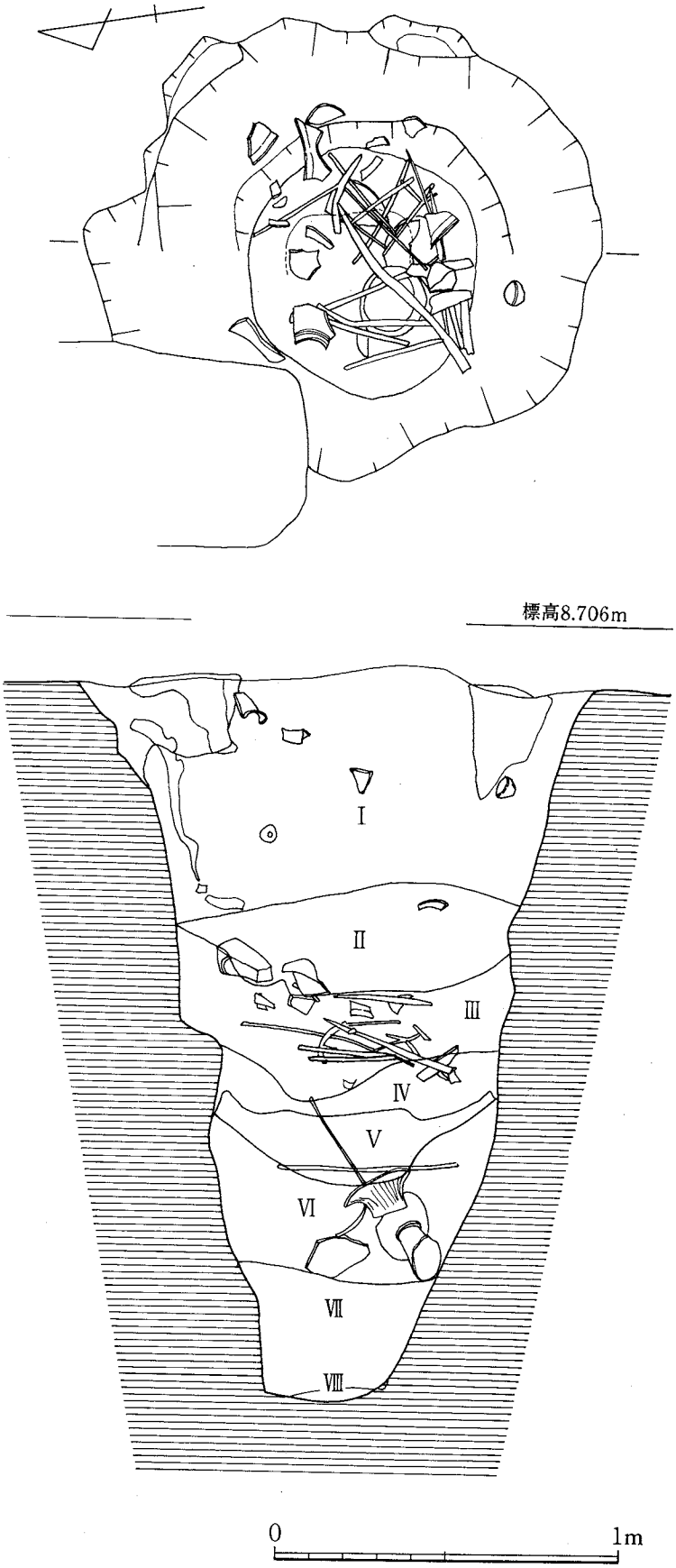


Fig.5　F−5C区　第1号竪穴実測図

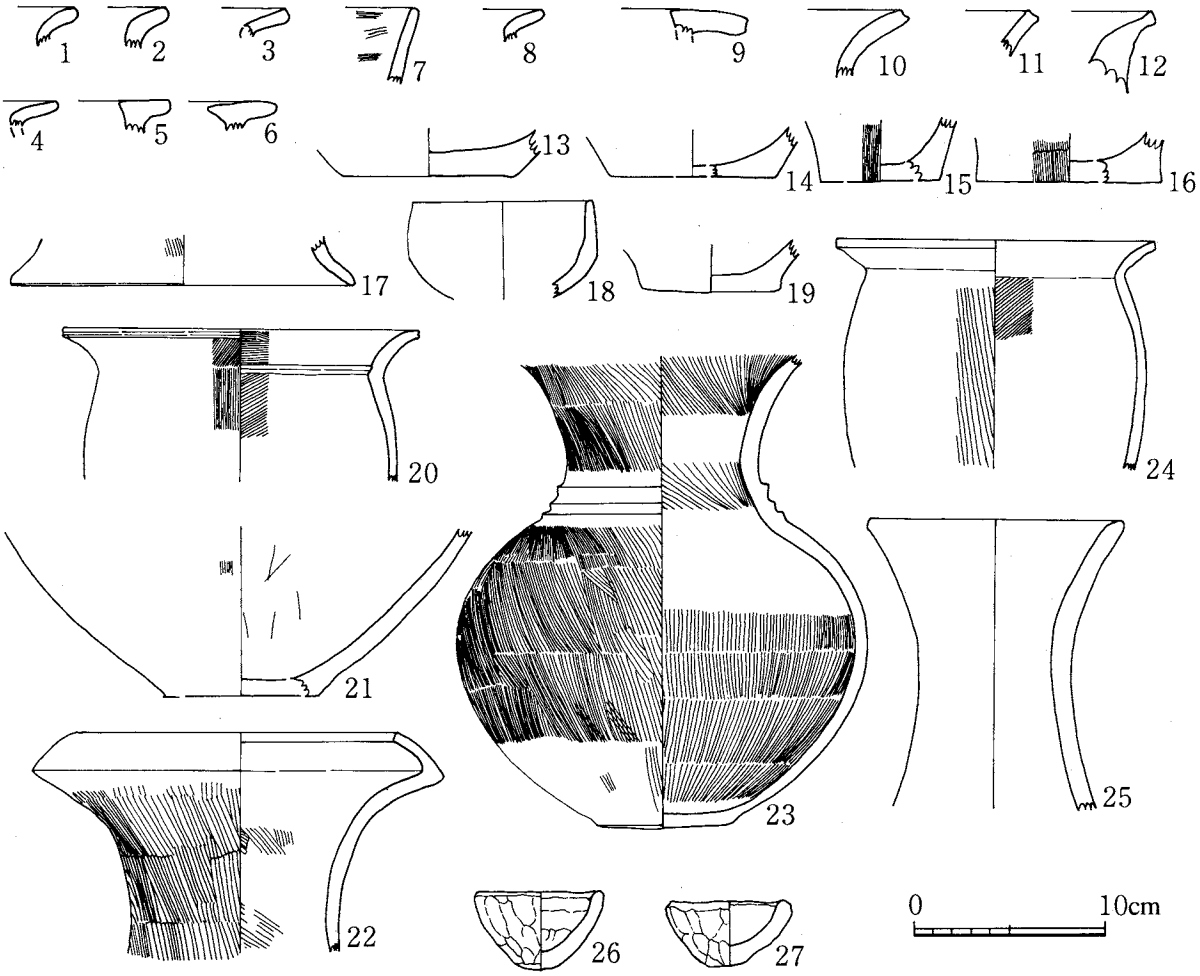


Fig.6　F−5C区　第1号竪穴出土遺物実測図

21は底部破片である。13，14，19，21は壷形土器の底部、15，16は甕形土器の底部である。15，16は外面に縦位の刷毛目調整。14，19は内底部に炭火物の付着がみられる。13，14，19は内外面共に横ナデ調整である。21は器面が荒れていて判然としないが、外面は縦位の刷毛目調整痕が部分的に残る。内面はヘラの横ナデ調整を施すが、内底部は凹凸が著しい。共に胎土には石英、長石、赤色鉱物の砂粒を含む。焼成は良好。色調は13が褐色、14が外面が黄褐色、内面が黒色、15は外面が赤褐色、内面が黒褐色、16は黄褐色、19は外面が褐色、内面が黒色、21は赤褐色をなす。17は脚端部破片、端部は丸くおさめる。外面はやや粗い縦位の刷毛目調整、内面は横位の細い刷毛目調整が部分的に施される。胎土は石英、長石の砂粒を多量に含み粗雑、焼成は良好、色調は黄褐色をなす。全体に雑なつくりである。18は椀形の土器である。復原口径9.6㎝と小型品である。内面は指圧による調整痕が残る。胎土には石英の砂粒を多量に含む。焼成は良好。色調は褐色をなす。20はくの字形の口縁をもつ甕形土器。復原口径18.8㎝。口縁部は湾曲しながら外反する。口縁端部に一条の凹線をめぐらす。外面には縦位～斜位の細い刷毛目調整を施す。内面は頸部に凹線一条がめぐり、口縁部と胴部の境は明瞭である。口縁部は横位、胴部は斜位の粗い刷毛目調整が施される。保存状態は良好でなく外面の胴部下半は表面が剥離している。胎土には石英、長石の砂粒を多量に含む。焼成は良く、外面は黄褐色、内面は赤褐色をなす。22は壷形土器の頸部から口縁が完全に残り、胴部以下を失う。口縁は袋状をなすが、外面には明瞭な稜線がつく。口縁上半部は丸味をもち、口縁端部は平担である。口縁上半部外面から、内面の頸部上半部は横ナデ調整。頸部外面は斜位のやや粗い

刷毛目調整を丁寧に施す。内面の頸部下半は、斜位の粗い刷毛目調整を施した後、部分的にナデ調整が加えられている。胎土にはやや粗い砂粒を多量に含む。焼成は堅緻で、保存状態も良好である。色調は外面が黄褐色、内面は黒褐色～黄褐色、口縁部には黒斑がみられる。口径15.6 cm、稜線部径21.8 cm、頸部径11.0 cmを測る。23は口縁部を欠失するが、ほぼ全形を知ることができる。口縁部の形態は23と同様のものであろう。底部は丸味をもった平底で、胴部は最大径が胴中位にあり球状をなす。胴部と頸部の境には断面三角形の突帯三条がめぐり、頸部は外反しながらたちあがる。頸部径10.0 cm、胴部最大径21.6 cm、底部径7.6 cm、現在高24.9 cmを測る。外面には右下りの斜位の刷毛目調整が頸部から胴部にかけて施されるが、頸部の突帯部分と胴下半部はさらに上から横ナデ調整が加えられ、刷毛目調整痕が消されている。内面も同様に斜位～縦位の刷毛目調整が施されているが、頸部下半部は横ナデ調整が加えられ、刷毛目痕を消している。また、胴上半部には指圧痕が加えられている。胎土には石英、長石のやや粗い砂粒が多量に混入されている。焼成は堅緻で保存状態も良好、色調は白灰色をなす。底部から胴下半にかけて黒斑がみられる。24はくの字形の口縁をもつ甕形土器である。口縁端部は平担で、一条の沈線をめぐらす。頸部には強い横ナデが加えられ、境は明瞭である。口縁部の内外面は横ナデ調整。胴部外面は縦位の粗い刷毛目調整。胴部内面は斜位の刷毛目調整を加えた後、ナデ調整を加えている。外面にはススが付着している。胎土には石英、長石の砂粒を多量に含む。焼成は堅緻であるが、保存状態は良くない。内外面共に黄褐色～褐色をなす。復原口径17.0 cm。25は器台、口縁の一部と下半部を欠失する。全体に保存状態が不良で、器面が荒れている。口径13.6 cm、胎土には石英、長石の粗い砂粒を多量に含み良くない。焼成は堅緻、色調は赤褐色をなす。26，27はほぼ同形同大の手づくね土器で、いずれも完形品である。手づくねであるために器面は凹凸が著しい。底部はわずかに平底状をなし、全体の器形は椀形をなす。26は口径5.7 cm、器高4.1 cm、27は口径6.6 cm　器高3.4 cmを測る。共に胎土には石英、長石の砂粒を多量に含む。焼成は堅緻で、保存状態は良好である。26は黄白色、27は黒色をなす。

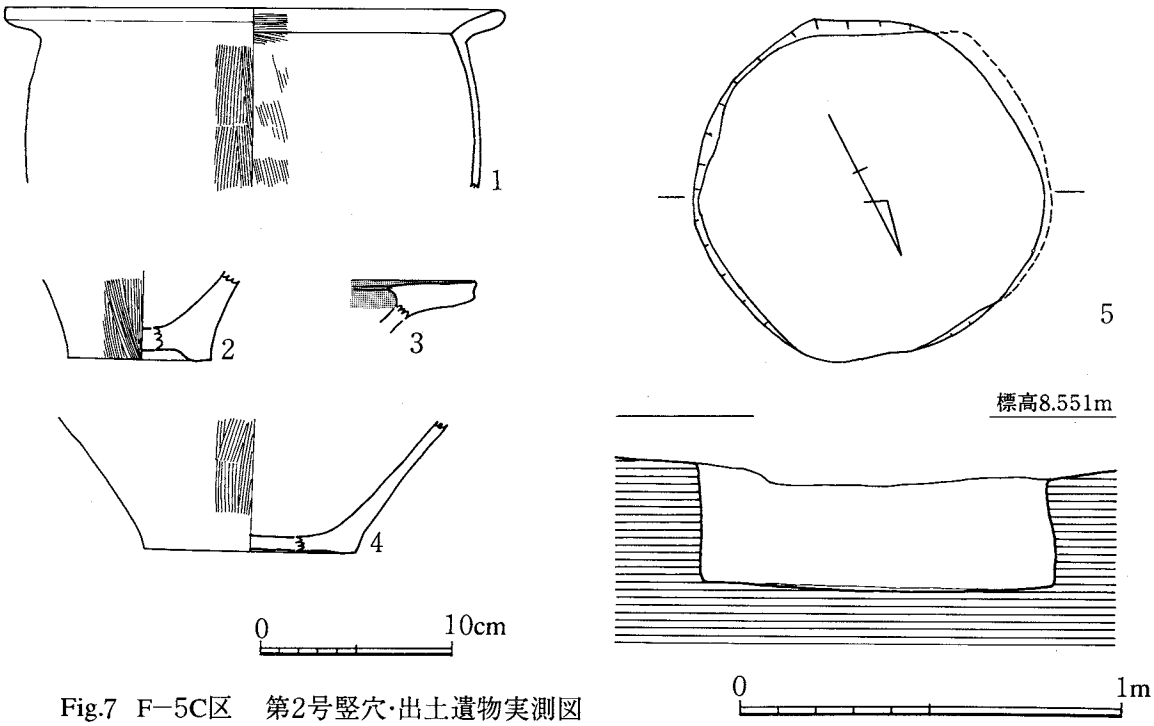


Fig.7　F−5C区　第2号竪穴･出土遺物実測図

（2）第２号竪穴と出土遺物

第２号竪穴（Fig. 7 － 5）

調査区の南西コーナー付近に検出した竪穴である。南北径 0.89 m、東西 0.87 mのほぼ正円に近いプランをなす。壁はほぼ垂直か若干袋状に掘り込まれている。深さは検出面から 30 ～ 33 cmと浅く、床面は平担である。埋土は黒褐色有機質粘土層で、分層できない。中からは弥生式土器が出土しているが、いずれも小破片である。かなり削平されているが袋状竪穴とみることができる。

出土遺物（Fig. 7 － 1 ～ 4）

弥生式土器片が数十片あるが、いずれも胴部破片で、図示できるものは少ない。4点を図示した。破片の中では丹塗り磨研土器が数点存在する。器台や小型の広口壷も含まれている。

1は甕形土器の口縁部である。口縁部は頸部で屈曲し、直線的に外にのびる。口縁端部は肥厚し丸くおさめている。口縁部内外面は横ナデ調整。外面は縦位の刷毛目調整で、ススが付着している。内面は頸部直下が横位、それ以下は斜位～縦位の刷毛目調整。復原口径 26.6 cmを測る。2，4は底部破片である。共に甕形土器の底部とみられる。4はあげ底状をなす。4は大型の甕である。共に外面に縦位～斜位の刷毛目調整を加える。2は底部径 7.4 cm、4は底部径 11.2 cmを測る。1，2，4は共に胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良好。1，4は外面が黒褐色、内面が赤褐色、2は黄褐色をなす。内底部に炭化物が付着している。3は高杯の口縁部破片である。鋤先口縁をなす。口縁端部は凹線状に凹む。内外面共に丹塗り磨研されている。胎土は若干の砂粒を含むが精良である。焼成は堅緻、丹塗りの下は赤黄色をなす。

（3）第３号竪穴と出土遺物

第３号竪穴（Fig. 8）

検出面の平面プランは南北径 115 cm東西径 97 cmの不整楕円形をなす。壁は傾斜が急で、ほぼ垂直に掘り込まれる。底面は南北径 74 cm、東西径 65 cmの楕円形プランで平担である。検出面から底面までは深さ 195

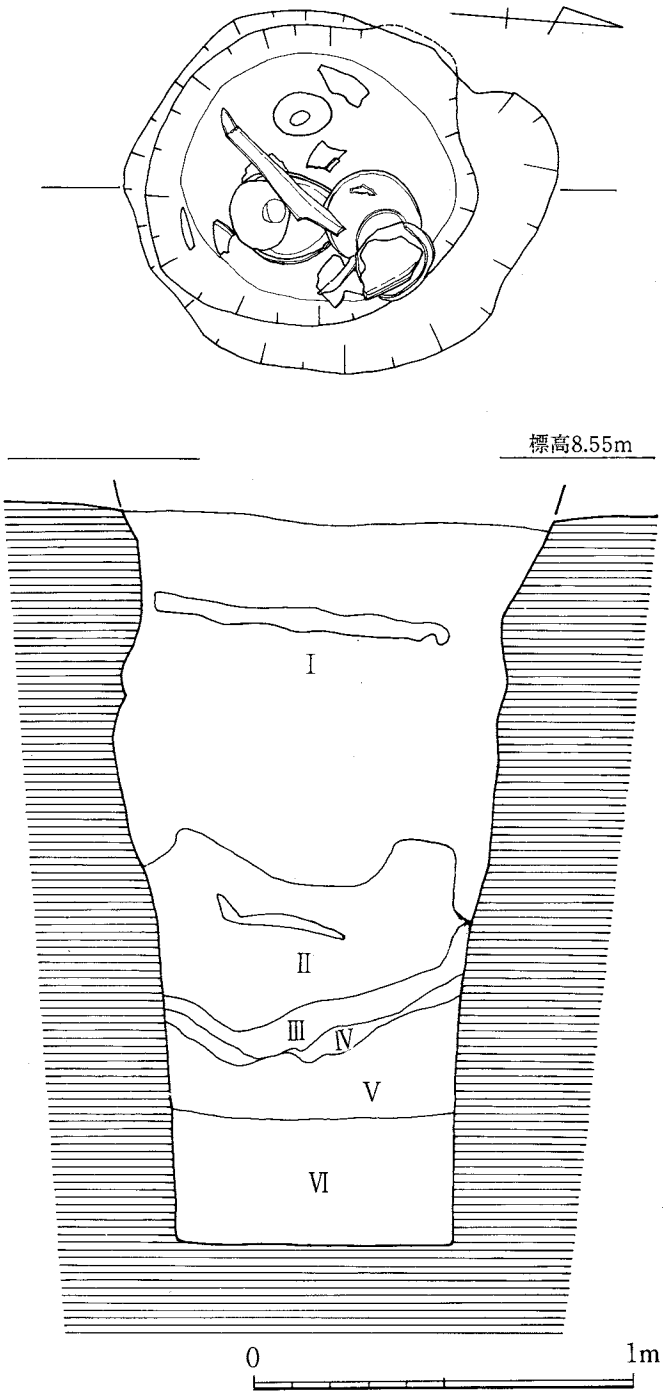


Fig.8　F−5C区　第3号竪穴実測図

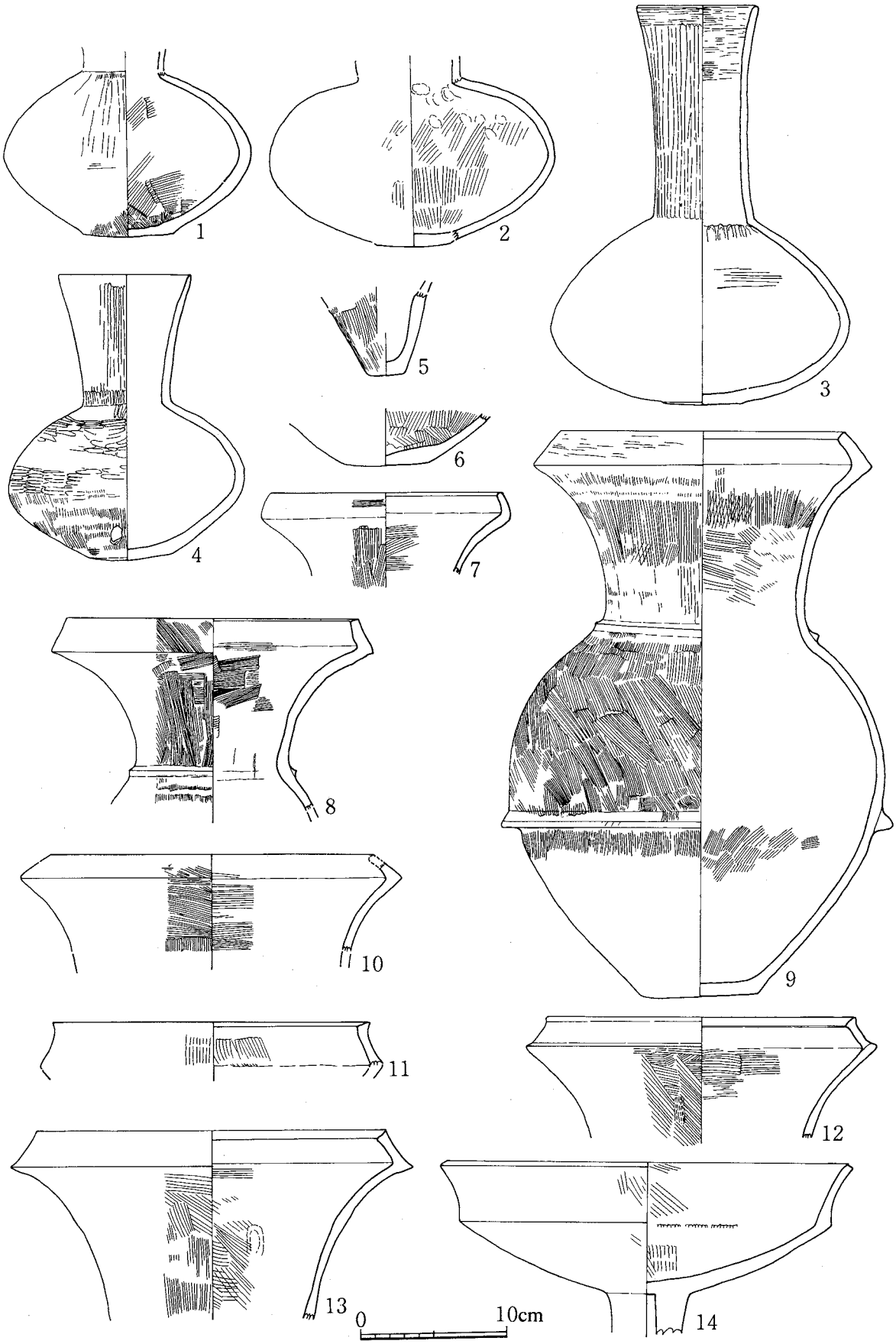


Fig.9　F−5C区　第3号竪穴出土遺物実測図

cmを測る。湧水による壁面の崩落は認められるが顕著ではない。

埋土は自然の流土の堆積で層はレンズ状をなす。第1層は竪穴の上半部に厚く堆積する。厚120～150cm。黒褐色粘質土層に黄白色ロームが混じる。上位の25cmに厚さ5cm前後の八女粘土層が敷き固められた状態で存在する。下位に木材片を含む。第2層　黒色粘質土層　厚5～10cm。ワラ状の植物茎が壁に沿って存在する。第3層　白色ロームを混じった黒褐色粘質土層　厚5～7cmと薄い層位であるが、ワラ状の植物茎が敷いたように全面にひろがっている。第4層　白色～黄白色ローム土層　厚15～30cm。壁の崩落土と考えられる。土器はすべてこの層から出土している。第5層は水平に堆積した土層である。黄灰色微砂層で厚35cm、基盤層と良く似た層で短期間で堆積したと考えられる。湧水部の壁の崩落は顕著でないが、第4層出土の祭祀用と考えられる土器等からして井戸と考えることができる。

出土遺物（Fig. 9）

出土遺物は土器と木材がある。木材はいずれも未加工である。土器は長頭壷、壷、高杯がみられる。保存状態は良好で、全形がわかるものもある。

1～4は長頭壷である。1，2は口頸部を欠失する。2は胴部が半分残っている。1はやや丸味をもった平底（径6.3cm）に算盤形の胴部がつく。胴部最大径は中位にあり17.2cmを測る。現存高は11.5cm。胴部外面は胴上半は縦位、胴中位が横位、胴下半は斜位のヘラ研磨調整。内面は斜位の刷毛目調整。2は底部を欠くが、形状は1と同様と考えられる。胴部最大径は胴中位にあり、19.8cmを測る。1に比べてやや丸味をもつ。胴部内外面の調整は1と同様である。胴上半部内面には指圧痕が顕著に残る。3は口縁部の一部を失うが、ほぼ完形である。胴部の形状は前二者と同様であるが、胴部最大径は胴部中位よりやや下位にあり、20.6cmを測る。底部は丸味をもった平底であるが、痕跡を残すのみである。口頸部は直線的にまっすぐにのび、口縁がわずかに外反する。外面には縦位のヘラ研磨調整が丁寧に施される。口縁部内面は横ナデ調整、胴上半部内面には規則性のない条線がみられる。器高27.6cm、口縁部径8.0cm。胴部高12.8cm、底部径5.7cmを測る。4は口縁部の一部がわずかに欠けるが、ほぼ定形である。胴下半部に外から打撃を加えた穿孔がみられる。底部はやや丸味をもった平底（径5.6cm）、胴部形状は前三者と同様で、胴部最大径は中位にあり、16.3cmを測る。口頸部はやや外傾しながら直線的にのびる。口頸部外面は縦位のヘラ研磨、胴上半部は刷毛目調整後、横方向のヘラ研磨を丁寧に施す。胴下半は縦位の刷毛目調整後、ヘラ研磨を加え刷毛目を消しているが、刷毛目痕が残っている。口縁部内側は横ナデ調整。胴内面の調整は不明。器高19.8cm、胴部高10.8cmを測る。1～4は胎土に石英、長石の砂粒を多量に含むが良質。焼成は堅緻、色調は1，4が赤褐色、2が黄褐色、3が褐色～白灰色をなす。いずれも胴部に黒斑がある。5はミニチュアーの甕形土器、口縁を欠失する。底部は平底（径2.4cm）、胴部は直線的に外反し、口縁部は段をもって外反するが、形状は不明。外面は縦位の刷毛目調整。内面は指ナデによる調整。頸部外面は指のつまみあげの痕が凹部として残る。胎土には若干の砂粒を混入。焼成は堅緻で色調は赤褐色、胴部から底部にかけて黒斑がみられる。現存高5.6cm。6は壷の底部、丸底に近い平底（径6.0cm)外面は縦位のヘラ研磨、内面は刷毛目調整を加える。胎土には砂粒を含むが良質。焼成は堅緻、赤褐色をなす。7～12は二重口縁をもつ壷形土器である。いずれも破片であるが、9はほぼ完形である。7は袋状口縁の名残りを強く残している。口縁外面は鈍い稜線がはいる。口縁内外面は横ナデ調整。頸部外面は縦位、内面は横位の刷毛目調整。胎土には石英、長石の砂粒を若干含むが良質。焼成は堅緻、赤褐色をなす。復原口径16.1cmを測る。8は口縁外面の稜線は鋭い。口縁端部は平担に仕上げる。胴部と頸部のさかいに断面三角形の突帯一条をめぐらす。口縁部外面は斜位の刷毛目調整。頸部は横位の刷

毛目調整後、下半に縦位の刷毛目調整をやや粗雑に施す。胴上半部は細い縦位の刷毛目調整。内面は、口縁部が横ナデ調整。頸部は下半が指圧調整後、横位の刷毛目調整をやや雑に施す。胎土にはやや多量の砂粒を混入し、やや不良。焼成は堅緻、色調は外面が赤褐色、内面が赤黄色をなす。復原口径20.2 cmを測る。9は胴、口縁の一部を欠損するが、ほぼ完形である。口縁はやや丸味をもち、外側の稜線は明瞭である。胴部と頸部の境に一条、胴中位に一条の断面三角形の突帯をめぐらす。胴はやや長く、胴部最大径はやや上位にある。底部はやや丸味をもつ平底である。外面の調整は、口縁部が斜位の刷毛目調整を施した後、横ナデ調整。頸部は縦位、胴上半部は斜位～縦位の刷毛目調整、下半部は刷毛目調整後、ヘラナデを加え、刷毛目調整を消している。内面は口縁部が横ナデ調整、頸部は縦位～横位の刷毛目調整。胴上半部はナデ調整。下半部は斜位の刷毛目調整がラセン状にめぐらされる。胎土には、やや大きい砂粒を多量に含み不良、焼成は堅緻で、白黄色をなす。胴上半部とそれ相対する底部よりやや上位の二ヶ所に黒斑がみられる。頸部の一部に丹の付着が見られる。口縁部径19.8 cm、頸部径14.0 cm、胴部最大径25.8 cm、底部系7.9 cm、器高39.4 cmを測る。10は復原口径22.8 cm。外面の稜線は明瞭である。外面は斜位～縦位、内面は横位の刷毛目調整。胎土に石英、長石の砂粒を多量に含む。焼成は堅緻、黄褐色をなす。11は復原口径21.6 cm、口唇部は外側に引きのばされ、平担である。口縁部の内外面に縦位の刷毛目調整を施す。破片の下端には粘土接合面が擬口縁として明瞭に残っている。胎土には石英、長石の砂粒を若干含むが精良。焼成は堅緻、赤黄色をなす。12は復原口径21.5 cm。口縁端部は外側に引きのばされ、平担に仕上げる。外側の稜線部は強調され段を形成する。口縁部内外面は横ナデ調整。頸部外面は横位～斜位、内面は横位の刷毛目調整。胎土には砂粒を含むが良質、焼成は堅緻、色調は外面が黄褐色、内面が黒灰色である。13は口縁端部は平担に仕上げられ、外側の稜線は明瞭である。復原口径24.0 cm。外面の調整は、口縁が横位の刷毛目調整後、横ナデ調整を加え、刷毛目痕を消している。頸部は横位～斜位の刷毛目調整を加えた後、下半にさらに縦位の刷毛目を施す。内面は口縁部が横ナデ調整、頸部は横位～斜位の刷毛目調整後、上半部は横ナデ調整を加え、刷毛目痕を消している。頸部下半は指圧痕も残っている。胎土は砂量を混入するが良質、焼成は堅緻で黄白色をなす。14は高杯、脚部を欠失する。杯部は、上半部で強く屈曲し、口縁部は外反する。口縁端部は平担に仕上げる。外面は斜位の刷毛目調整を加えた後、横方向のヘラ研磨を加えて、刷毛目痕を消しているが、外面は保存状態がやや悪く、表面が荒れている。内面も同様に、刷毛目調整後、体部は横方向、内底部は中心に向うヘラ研磨を加えて刷毛目痕を消している。口径28.7 cm、杯部高9.0 cmを測る。胎土には石英、長石、赤色鉱物の砂粒を混入するが良質、焼成は堅緻で、赤黄白色をなす。

（4）第4号竪穴と出土遺物

第4号竪穴（Fig. 10）

A溝と重複関係にあり、北側はかろうじて溝の肩部にかかり、切り込み面が判るが南半部は溝底まで達していて、竪穴の上半部は大きく破壊されている。平面形は現状で東西径115 cm、南北径105 cmの不整円形プランをなす。深さは北側で168 cm、南側は溝の掘削で残存部は98 cmを測る。掘り方の壁はゆるやかなカーブを描き、断面形はスリ鉢状をなす。底部は平担で径28 cmの円形をしている。

埋土は水平堆積をしている。第1層は上半の大半を占める。厚50～120 cm。白色粘土（八女粘土層）の崩落土であるが、上半部は青灰色をなしグライ化している。溝の影響か。中位から下位にかけて弥生式土器が完形に近い姿で出土。第2層は白色粘土（八女粘土）に黒褐色～黒色土が混じる。厚15 cm前後。第3層は灰色～灰褐色砂層、鉄分の沈殿がみられる。厚30 cm前後、基盤層と類似して

おり、比較的短時間で堆積したと考えられる。第2層と第3層の境界に甕形土器1個が横位で出土。

この竪穴も八女粘土を穿ち灰色砂層まで達する深い竪穴で、完形に近い土器が投棄されていることから井戸を考えることができる。しかし、この竪穴にも明確な湧水部分はみられない。

出土遺物（Fig. 11）

4号竪穴に確実に伴う遺物として、ほぼ完形の6個体の土器がある。壷形土器　甕形土器　鉢形土器の三器種である。

1は袋状口縁をもつ壷形土器である。口頸部の一部を欠失する。底部は幅広い平底で安定感がある。胴部はやや長い球形で、胴部最大径は胴中位にある。頸部は短く、すぐ袋状の口縁に移行する。口縁端部は平担に仕上げている。外面は口縁部が横ナデ調整、頸部から胴部にかけては縦位に刷毛目調整後、ヘラナデによって刷毛目痕を消すが不充分である。内面は口縁部から頸部にかけては横ナデ調整。胴上半部には指圧痕がみられる。胎土には石英、長石の砂粒を多量に含む。焼成は良好。黄白色をなす。胴中位と底部付近の相対する二ヶ所に黒斑がみられる。全体に器壁が厚く、重たい土器である。口径10.8㎝、胴部最大径17.8㎝、底部径8.8㎝、器高23.5㎝を測る。2は長頸壷と考えられる壷形土器である。口頸部を欠失する。底部は安定した平底。胴部は球形で、最大径は胴中位にある。胴部と頸部の境に断面三角形の突帯一条をめぐらす。頸部は筒状をなし、まっすぐにたちあがるが上半部を欠失する。外面の調整は頸部から突帯にかけては横ナデ調整。胴部は縦位～斜位の刷毛目調整を施した後、上半部はナデによって消される。内面は頸部にしぼり痕が顕著に残っている。胎土は精選され良質、焼成は堅緻、色調は黄褐色、胴中位から下半にかけた広い範囲に黒斑がある。頸部径7.2㎝、胴部最大径16.1㎝、底部径7.5㎝現存器高18.3

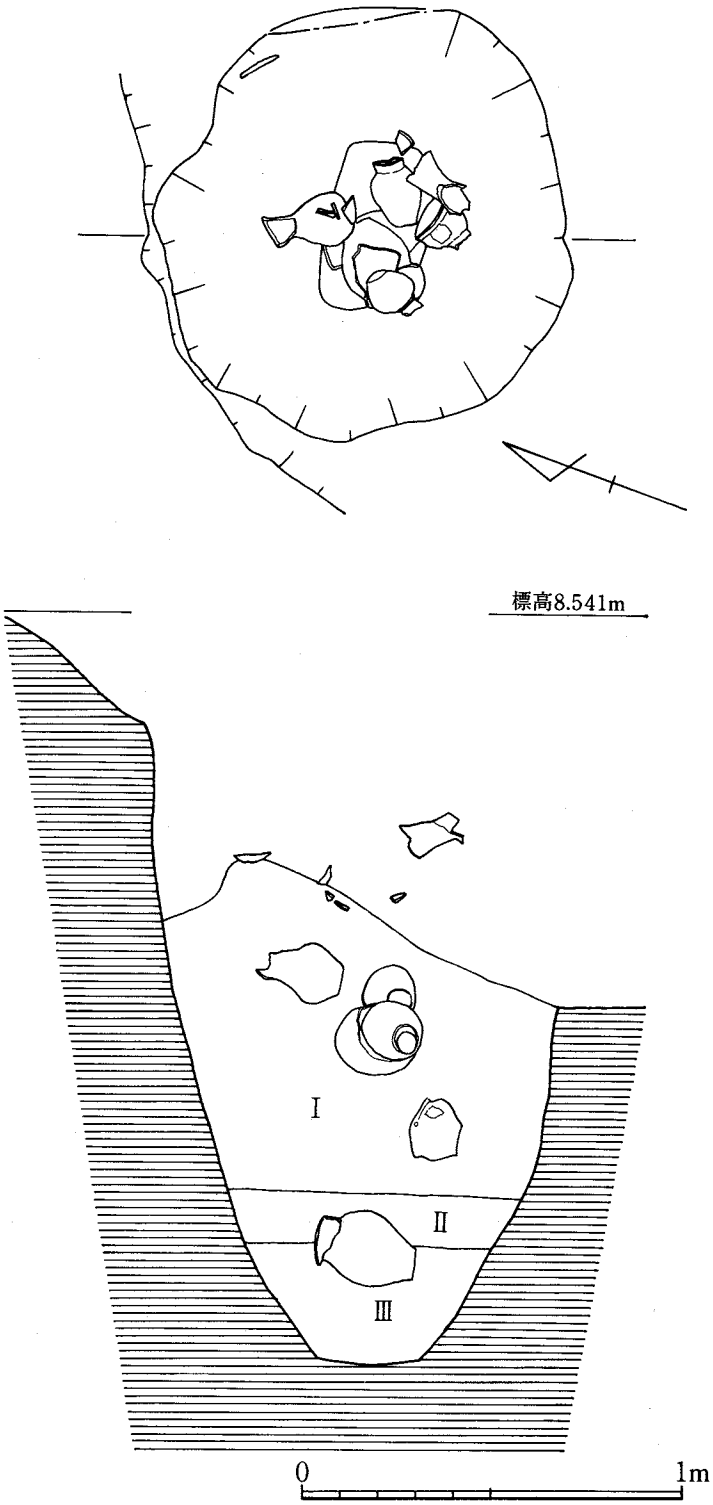


Fig.10　F−5C区　第4号竪穴実測図

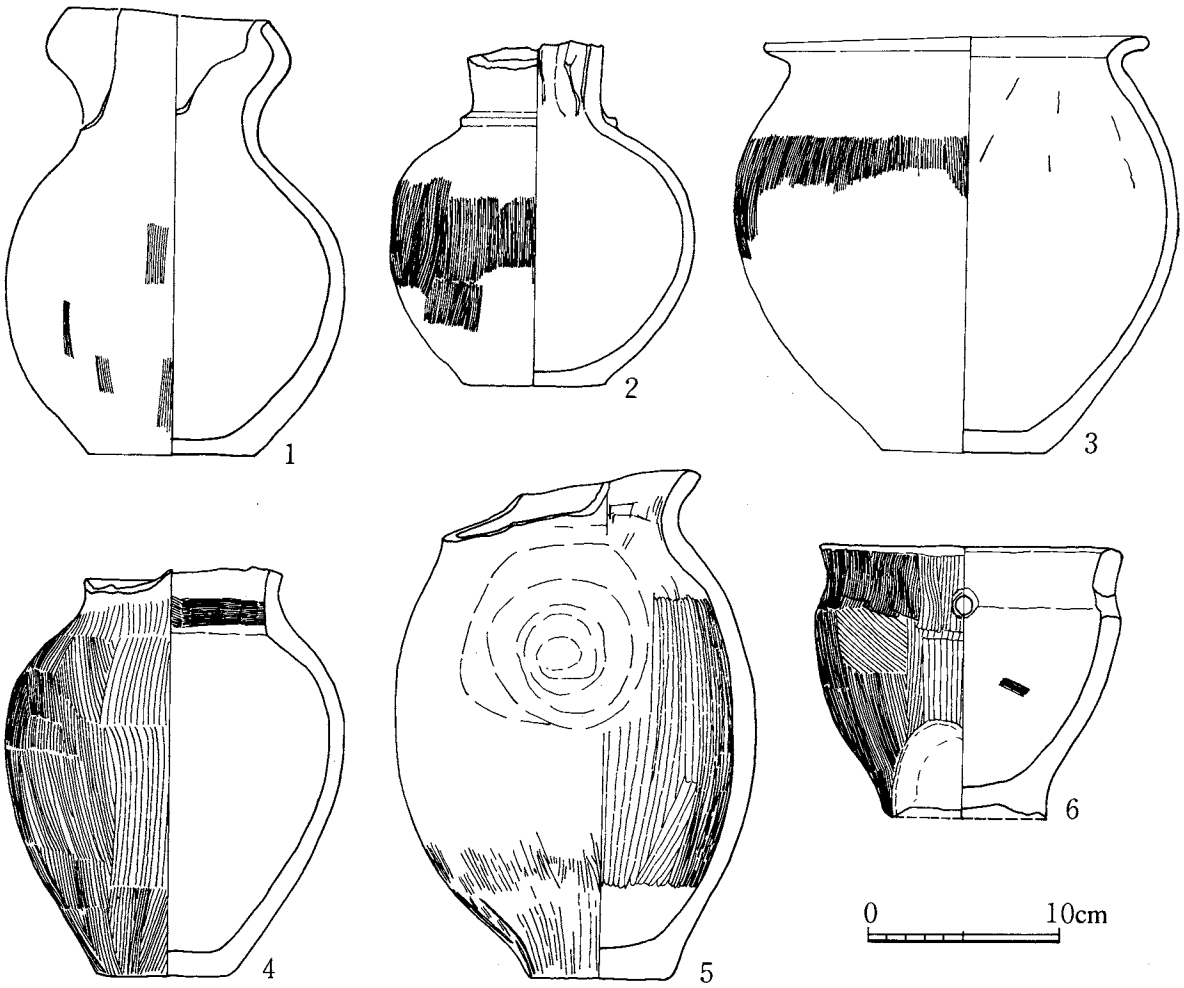


Fig.11　F−5C区　第4号竪穴出土遺物実測図

cmを測る。3は広口の甕形土器である。口縁はくの字形に屈曲し、外反する。口縁端部はやや肥厚し丸くおさめる。底部は安定した平底で、胴部はふくらみ丸味をもつ。口縁部内外面は横ナデ調整。胴外面は縦位の細かい刷毛目調整を施すが、上半部は横ナデ調整を加え、刷毛目痕を消している。下半部は器面が荒れており、調整痕は観察できない。胴内面はヘラによる横方向のナデ調整、胴部下半に黒斑がある。胎土には石英、長石の砂粒を多量に含んでいる。焼成は良好、色調は暗褐色をなす。口径20.4 cm、胴部最大径23.5 cm、底部径8.8 cm、器高22.0 cmを測る。4は甕形土器、口縁部を欠失する。底部は安定した平底、胴部はやや長胴で、最大径は上位にある。頸部はまっすぐたちあがり、口縁部は外反すると考えられる。外面の調整は、縦位の粗い刷毛目調整。頸部内外面は横ナデ調整である。胴上半部内側には指圧痕が残る。胴上半と底部付近の二ヶ所に黒斑がみられる。胎土には石英の砂粒が混入される。焼成は良好、色調は暗褐色〜暗黄褐色をなす。全体に器壁が厚く、重たい土器である。頸部径10.2 cm、胴部最大径17.8 cm、底部径6.8 cm、現存器高21.7 cmを測る。5はくの字形口縁をもつ甕形土器で口縁部の一部を欠失する。底部は安定した平底、胴部は長胴で、胴部最大径は胴中位にある。口縁部はくの字形に屈曲し、外反する。口縁端部は平担に仕上げる。口縁部内外面は横ナデ調整、胴部外面は縦位の刷毛目調整後、ヘラナデ、ナデによって刷毛目痕を消している。胴内面は縦位のヘラナデ調整。なお、胴上半部には同心円状に粘土紐の接合痕が残り、後から補修した痕跡

をとどめている。胎土には石英の砂粒が混入される。焼成は良好で、色調は暗褐色～黄褐色をなす。復原口径15.0㎝前後、胴部最大径19.1㎝、底部径7.3㎝、器高27.0㎝を測る。6は鉢形土器である。完形であるが、胴部、底部の3ヶ所に器壁の剥離がみられる。安定した平底から体部は外湾気味にたちあがり、上半部で屈曲し、段を形成する。口縁部は直線的にたちあがり、口縁端部はやや肥厚する。段部分の相対する2ヶ所に孔が穿たれている。外面は縦位の粗い刷毛目調整。内面はヘラナデで調整される。胎土には石英、長石の砂粒を含むが良質、焼成は堅緻、赤褐色をなす。口径16.1㎝、器高15.4㎝を測る。井戸の水くみ用に使用されたものか。

（5）A溝と出土遺物

A溝（Fig 4，12－1）

調査区の北側において検出した溝である。第4号竪穴と重複関係にあり、第4号竪穴を切っている。鳥栖ローム、八女粘土層を掘り込んでつくられている。溝幅は調査区西壁で2.86 m、東壁で3.66 m、最も狭い中央部で2.48 mを測る。F－5C区内で検出した長さは、11.5 mであるが。東･西壁壁共に調査区外にのびてる。東側はF－5a区の北端部で検出した溝に連なると考えられ、その長さは37 m以上となる。溝の断面形は基本的には浅いu字形をなすが、流れによると考えられる壁の崩落によて、いくぶん変形している。溝は西から東に向かって序々に深さをましている。溝の東側で、B溝と直角に交わる。A溝・B溝は切り合い関係はなく、時間的には差がない。同時併存と考えられる。A溝･B溝の交点の東、すぐに溝を横断するように杭9本が2列に打ち込まれている。杭列の保存状態は良くないが、その構造から見て井堰と考えられる。後述するB溝の西壁が畦畔状に削り残されていることからみて、A溝・B溝共に水田に関連した水路と考えることができる。A溝の埋土の堆積状

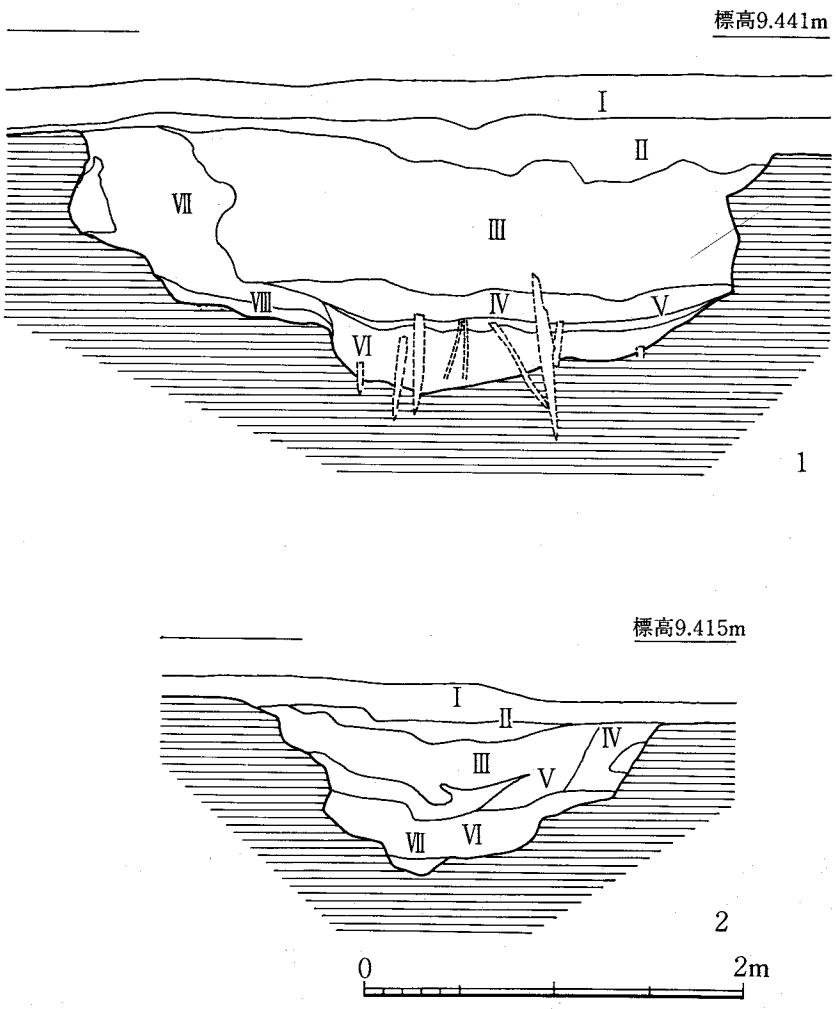


Fig.12　F－5C区　A溝･B溝断面実測図

況は、Fig 12 － 1 に示した東壁断面からみると次のようになる。第 1 層、表土（耕作土）層、灰黒褐色土層、厚約 20 cm。第 2 層、黄褐色土層　南が厚く（30 cm）～北に薄く（5 cm）なる。石灰ｶﾞﾗ、小礫を多く含む。第 3 層以下は溝の埋土である。第 3 層　暗褐色土層、鉄、マンガンの斑点が多くみられる。南に堆積し、北岸部には見られない。厚さ 70 cm前後。第 4 層　灰褐色粘質土層　厚さ 10 ～ 20 cm。第 5 層　灰色粘質土層　厚さ 5 cm前後。第 6 層　灰褐色粘質土層　厚さ 10 ～ 20 cm。　第 7 層　暗黄褐色粘質土層。第 8 層　暗灰褐色粘質土層となっている。第 7，8 層は弥生時代竪穴遺構の埋土である。

出土遺物（Fig. 13，14，17）

土師器、瓦質土器、瓦器、陶磁器、木製品、杭等がある。量的には多いが、いずれも破片である。代表的なもの図示する。Fig. 13 － 1 は染付の皿である。内外面に染付の文様がある。外面は底部と体部の境に 2 条の圏線をめぐらし、その上に蔓草状の文様を描く。内面は見込みの境に 2 条の圏線、見込みの中央部に花文、圏線の上に雲文状の文様を連続的にめぐらす。底部はあげ底状をなす。底部径 5.8 cm。2 は瓦質土器、口縁部は大きく内側に屈曲する。口縁端部は丸く仕上げ、屈曲部上面には沈線一条をめぐらし、その外側にスタンプで円文を連続的に施している。保存状態は良くなく、剥離がみられる。復原口径 6.8 cmの小型品である。3 は青磁器の椀。口縁部が外反し、口縁端部は丸くおさめる。全面に淡い緑色の釉をかける。復原口径 14.2 cm。4 は瓦質の摺鉢、体部は外傾しながら直線的にのび、口縁部はわずかに肥厚する。口縁端部は平担に仕上げる。外面は指圧痕の凹凸が著しいが、部分的に刷毛目調整痕がみられる。内面は平滑に仕上げ、全面に斜位の刷毛目調整痕が丁寧につけられ、6 cm前後の間隔で沈線が縦位に 4 本前後つけられ、摺鉢としている。復原口径 29.3 cm。底部はやや丸味をもった平底になると考えられる。黒灰色をなす。5 ～ 7 は土師器の杯。5・7 は糸切り底、6 はヘラ切りの底部である。他は横ナデ調整。5 は復原底部径 11.2 cm、6 は復原口径 8.8 cm。8 は染付の盤、高台は貼り付けで、小さく断面は三角形をしている。畳付き以外の全面に白釉がかけられる。内面の見込みと体部の境に藍釉によってやや幅広の圏線一条がめぐらされる。外面は高台、体部、外底部に藍釉による細い圏線が各一条めぐらされている。胎土は白色で良質。復原高台径 10.6 cm。9 は染付の小皿。高台をもつが欠失している。体部は丸味をもって立ち上がり、口縁端は尖り気味に丸くおさめる。全体に白釉がかけられるが、見込み部分は無釉。内面の口縁部と見込みと体部の境に藍釉によるやや幅広の圏線を各一条めぐらす。外面も相対応するところに圏線各一条をめぐらしている。復原口径 9.6 cm。10 は瓦器の椀、貼り付け高台は高く外側に張る。体部は丸味をもってたちあがり、口縁端部は平担に仕上げる。体部内外面は横ナデ調整。内底部は多方向のナデ調整である。胎土は良質、焼成良好で、外面の色調は黒色で光沢があり、内面は灰黒色をなしている。復原口径 10.2 cm、高台径 2.4 cm、器高 5.3 cm。11 は陶器の壷の底部である。平底で体部は直線的にたちあがる。内外面共に横ナデ調整。露胎で、現存部分には釉はみられない。底部径 6.0 cm。外底部からは体部下半は露胎のままである。胎土は良質で灰色をなす。底部復原径 6.0 cm。12 は天目の壺、底部は平底で糸切り底である。外底部から体部下半は露胎のままである。体部上半から内面にかけて天目釉がかけられる。胎土は良質で灰色をなす。底部復原径 6.0 cm。13 は青白磁の椀の口縁部　体部は直線的にたちあがり、口縁端部は尖り気味におさめる。外面の口縁直下に二条の細い沈線がめぐる。胎土は良質で白色をなす。内外面共に淡青色釉がかけられる。復原口径 9.8 cm。14 は瓦器の底部破片。貼り付け高台は断面逆台形で高くない。復原底部径 5.6 cm。胎土は良質、焼成は良好、内外面共黒灰色をなす。15 は玉縁をもつ白磁。玉縁は幅広で厚い。16 は瓦質土器につく耳、半円状をなす。胎土は良質、焼成は良好、黒灰色をなす。一部にススが付着している。17、18 は瓦質の鉢。17 は

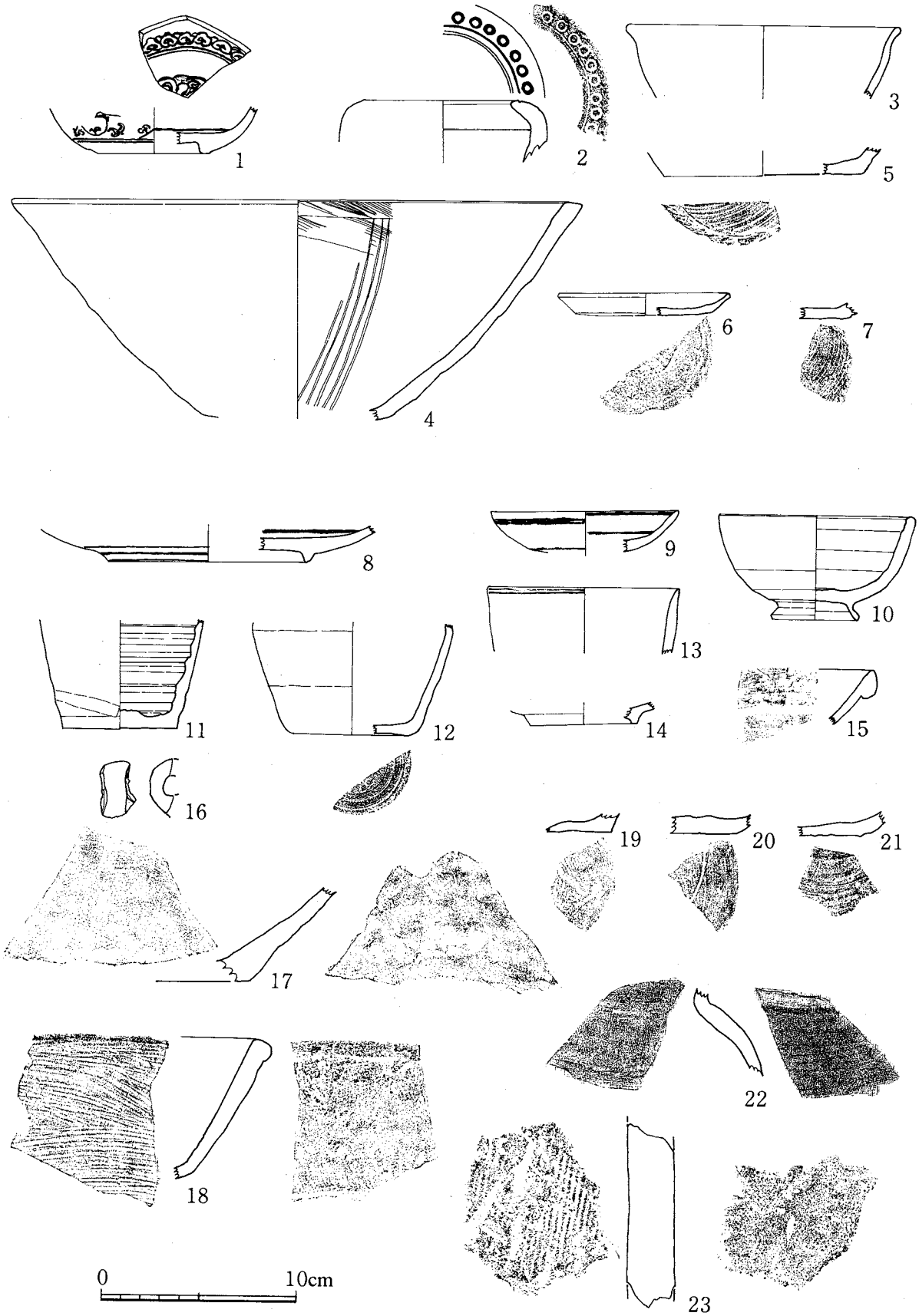


Fig.13　F−5C区　A溝出土遺物実測図Ⅰ

底部破片。平底で体部は外傾しながらたちあがる。外面は指圧痕が残り、凹凸が顕著、一部に刷毛目調整痕がみられる。内面は横方向の刷毛目調整が加えられ、平滑である。使用による磨滅が著しい。胎土には石英、長石の砂粒が若干含まれているが良質。焼成は良く、外面は黒灰色で、内面は白灰色をなす。18は口縁部破片。口縁部は玉縁状に肥厚する。外面には縦位の刷毛目調整が施されるが、粘土紐の痕跡が凹凸で残る。ススの付着が顕著である。内面は横方向の粗い刷毛目調整痕が施され平滑である。胎土は良質　焼成は堅緻　外面は黒色、内面は黒灰色をなす。19～21は土師器皿、いずれも糸切り底である。22は須恵質の壷肩部。口縁部は直立するものであろうか。肩部は張りが大きい。外面は横方向の丁寧なヘラ研摩が施される。内面には指圧痕とヘラによる削り状のナデがある。胎土は精良、焼成は堅緻、外面は黒色、内面は灰黒色をなす。23は瓦の破片。a面には平行線のタタキが施される。b面には布痕があるが磨滅し明瞭ではない。胎土には石英　長石の砂粒が多く含まれる。焼成は良好。Fig. 14は漆器。2点がある。共にA溝の最下層から出土している。1は高台端部と口縁部を欠いているが、ほぼ全形を知ることができる。高台は高く直立したものと考えられる。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は強く内湾する。内外面共に黒漆の上に赤漆を塗っているが、保存状態が悪く、木地の腐敗が激しく、漆の剥落も著しい。外面には上塗り〔赤漆〕後に、黒漆で円文を描き、円文内にさらに文様を描いているが、剥落しているため詳細は不明。全体にいびつである。高台径5.8㎝前後　器高8.0㎝前後である。2も高台端と口縁部を欠くが、ほぼ全形を知ることができる。高台はやや外側にひろがる。体部は丸味をもってたちあがり、口縁はまっすぐにたちあがる。内面は黒漆を地塗りして、赤漆で仕上げている。外面は黒漆のままである。高台径5.5㎝前後、器高6.0㎝前後である。Fig 15－6は高下駄である。保存状態が悪く、約1/3を失う。足をのせる部分は平担で光沢をもっている。先端部中央に紐孔が一孔穿たれている。孔径1.3㎝。裏面は中央部が厚くなり舟底状をなす。歯の挿入部分は長方形の切り込みを入れる。間隔は8.4㎝。歯は高く8.0㎝以上である。Fig 15－1～5，8，9は丸太杭である。7は竹を利用した杭である。井堰状の遺構に使用されたものである、丸太の一端を削り尖らしている。1は現存長69.2㎝、径3㎝前後、2は現存長55.0㎝、径5.5㎝前後、3は現在長34.8㎝、径3.6㎝前後、4は現存長47.0㎝、径3.2㎝前後、5は現存長35.5㎝、径2.5㎝前後、7は現存長17.3㎝、径2.8㎝前後、8は現存長17.3㎝、径3.4㎝前後、9は現存長32.1㎝、径2.1㎝前後である。

石器（Fig. 17）

3点の出土がある。1は玄武岩製の太形蛤刃石斧の破片である。頭部と刃部を欠損しているが、形状からは頭部に近い部分である。打製で整形され、その上に敲打を加え、さらに研磨されたことがうかがえる。現存長9.1㎝、幅8.0㎝、厚さ4.8㎝、断面は楕円形をなす。2は台形石器である。良質の黒曜石を素材としている。黒曜石は風化が進んでいる。縦長剥片を利用し、両側にブランティングを施し、折断している。刃部は剥離のままであるが、他の一辺には細い刃こぼれがみられる。長2.1㎝、幅0.8～1.8㎝、厚さ0.5㎝。3はアズキ色をした擬灰岩を利用した石包丁の破片である。両刃、現在長1.8㎝、幅2.8㎝、厚さ0.5㎝。

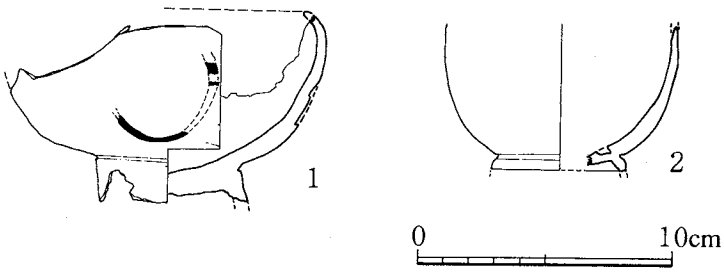


Fig.14　F－5C区　A溝出土遺物実測図Ⅱ

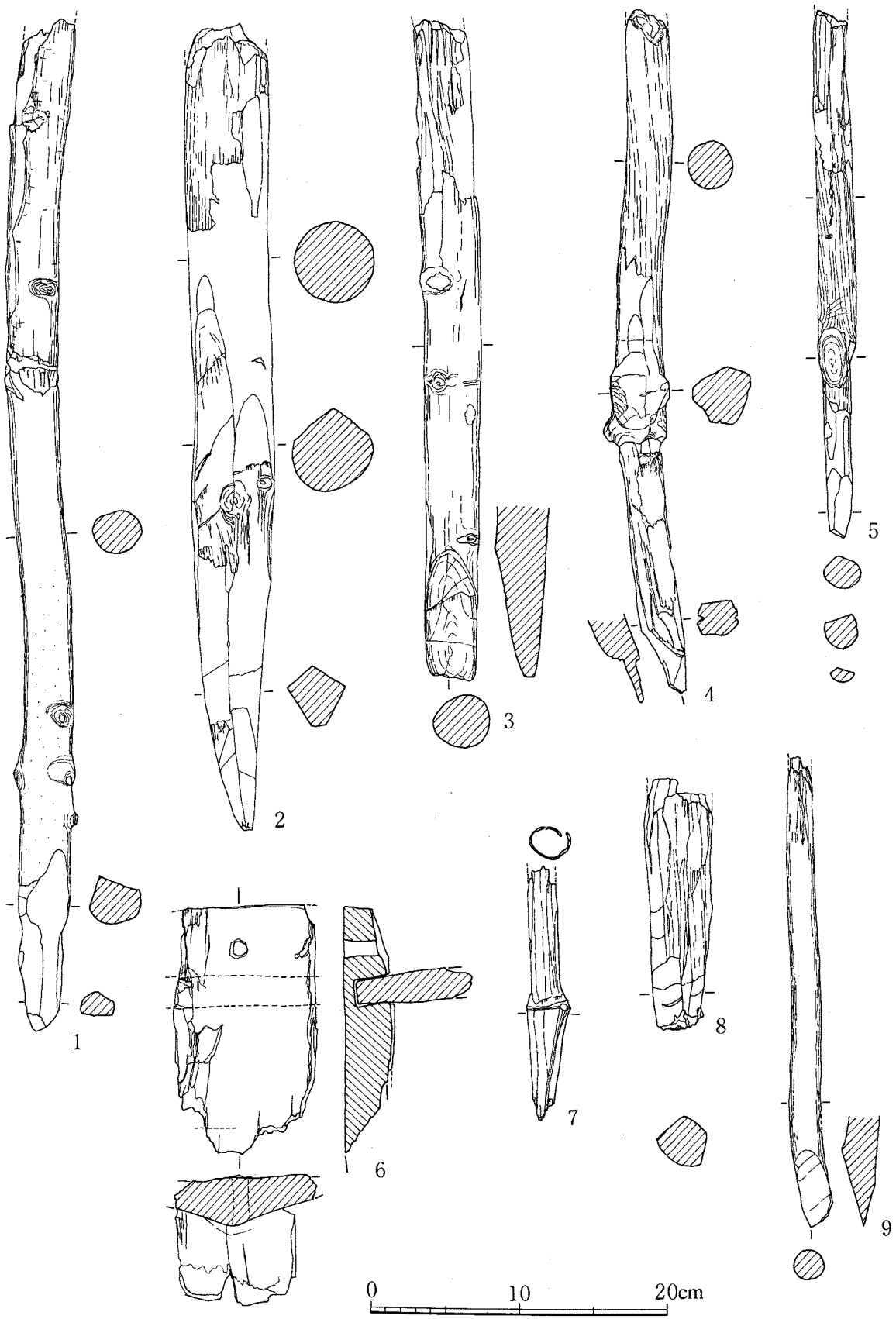


Fig.15　F−5C区　A溝出土遺物実測図Ⅲ

（6）B溝と出土遺物

B溝（Fig. 4 . 12 － 2）

調査区の南半部に検出した溝である。他の遺構との重複関係はみられない。鳥栖ローム層、八女粘土層を掘り込んでつくられているのはA溝と同様である。B溝の北端は調査区東側においてA溝と直角に交わる。溝幅は南側から北側に向かって序々に広くなる。 溝幅は南壁部で 1.88 m、 中央部で 2.20 m、A溝との交点で 2.30 mを測る。調査区内で検出した溝の長さは 17.0 mであるが、南壁側でさらに調査区外にのびてている。溝の断面形は、A溝同様に浅いu字形をなしているが、壁は流れによる侵蝕で、ややいびつになっている。この溝の南壁部は先述したように畦畔状をなしている。この畦畔部は、鳥栖ローム、八女粘土層の地山部分の掘り残しによるものである。幅 80 ～ 100 ㎝、高さ 30 ㎝を測る。この畦畔状の高まりより西側は水平に削平されていて、水田床面下の状況とみられ、A溝の井堰状の遺構やB溝の状態から、これらの溝は水田に伴う遺構とみることができる。中世になり、丘陵部の一部までが水田化されたと考えられる。板付遺跡の変遷を考える上では、重要な所見である。B溝の埋土の堆積状況をFig. 12 － 2 に示した南壁の断面図からみてみよう。第 1 層、表土層（現耕作土層）褐色粘質土層、厚 10 ～ 20 ㎝。第 2 層、ローム･ブロック層、厚さ 10 ㎝前後、溝の中央部の凹みを埋めたような状況を示す。第 3 層、暗褐色土層、厚さ 20 ～ 40 ㎝、溝の中央部を埋める。最も遺物が出土している。第 4 層、褐色～淡灰褐色粘質土層、B溝西壁に沿って部分的にみられる。第 5 層、ローム･ブロック層、厚さ 10 ㎝前後、東より流れ込んだ状況を示している。第 6 層、灰色粘質土層、厚さ 10 ～ 20 ㎝、鉄、マンガンの斑点が顕著にみられる。第 7 層、溝底の堆積、灰褐色粘土層、厚さ 10 ㎝前後となっている。

出土遺物（Fig. 17）

土師器、瓦質土器、陶磁器、混入した弥生式土器等がある。量的に多いが、いずれも小破片である。内容的にはA溝と変わりない。Fig. 16 － 1 は高台付の壷底部、高台は低く、断面形は逆台形をなす。内外面共横ナデ調整。須恵質。高台復原径 7.2 ㎝、 2， 4 ～ 7 は土師器杯および皿、 2 は復原口径 1 1.4 ㎝、 4 ～ 7 はいずれも糸切り底である。 3 は瓦質土器の鉢、口縁部が玉縁状に肥厚する。内外面共に横ナデ調整、外面にはススが付着する。胎土には石英、長石、金雲母の砂粒を多く含む。焼成良好。外面は黒褐色、内面黄白色をなす。 8 は玉縁をもつ白磁口縁部。 9 は棒状の土製品。先端は尖ると考えられる。現存長 4.2 ㎝、断面形は楕円形をなす。厚さ 1.3 ㎝。土器の把手か。 10 は瓦質土器の底部。外面は指圧痕が残り凹凸が著しい。一部ナデと刷毛目調整が加えられる。内面は線状痕が無数についているが平滑である。胎土には若干の砂粒を含むが良質、焼成は堅緻、外面は黒灰色、内面は灰白色をなす。 11 は片口のつく鉢、陶質、口縁部は屈曲して、垂直にたちあがり、三条の凹線をめぐらす。口縁内面に段を有する。胎土は精良、焼成は堅緻、内外面共黒灰色をなす。復原口径 28. 0 ㎝。 12 は土師器の杯、復原口径 13.4 ㎝。 13 は口縁部が肥厚する。外面には斜位の粗い刷毛目調整を施した後、横ナデ調整を加える。内面は横位の刷毛目調整を加えた後、斜位のナデ調整が加えられる。外面にはススの付着が顕著である。胎土には石英、長石、金雲母の砂粒を若干含むが精良。焼成は堅緻、外面は黄褐色、内面は白黄色をなす。 14 は土師器皿、糸切り底である。 15 は瓦器、高台は貼り付けでやや内傾した逆台形をなす。外面は横ナデ調整後、上半部はヘラ研磨、内面はヘラ研磨、胎土は精良、焼成は堅緻、外面は黄白色、内面は黒灰色をなす。高台径 7.2 ㎝。 16 は瓦質土器の鉢、片口がつく。口縁端部は丸くおさめる。外面は指圧痕が顕著で、上に刷毛目調整痕が部分的につく。内面には粗い刷毛目調整痕が深くつけられる。胎土は良質、焼成は良く、黒灰色をなす。 17 は水注の底部付近の破片、内面は凹凸が著しい。内外面にややにごった濃い緑色の釉をかける。胎土

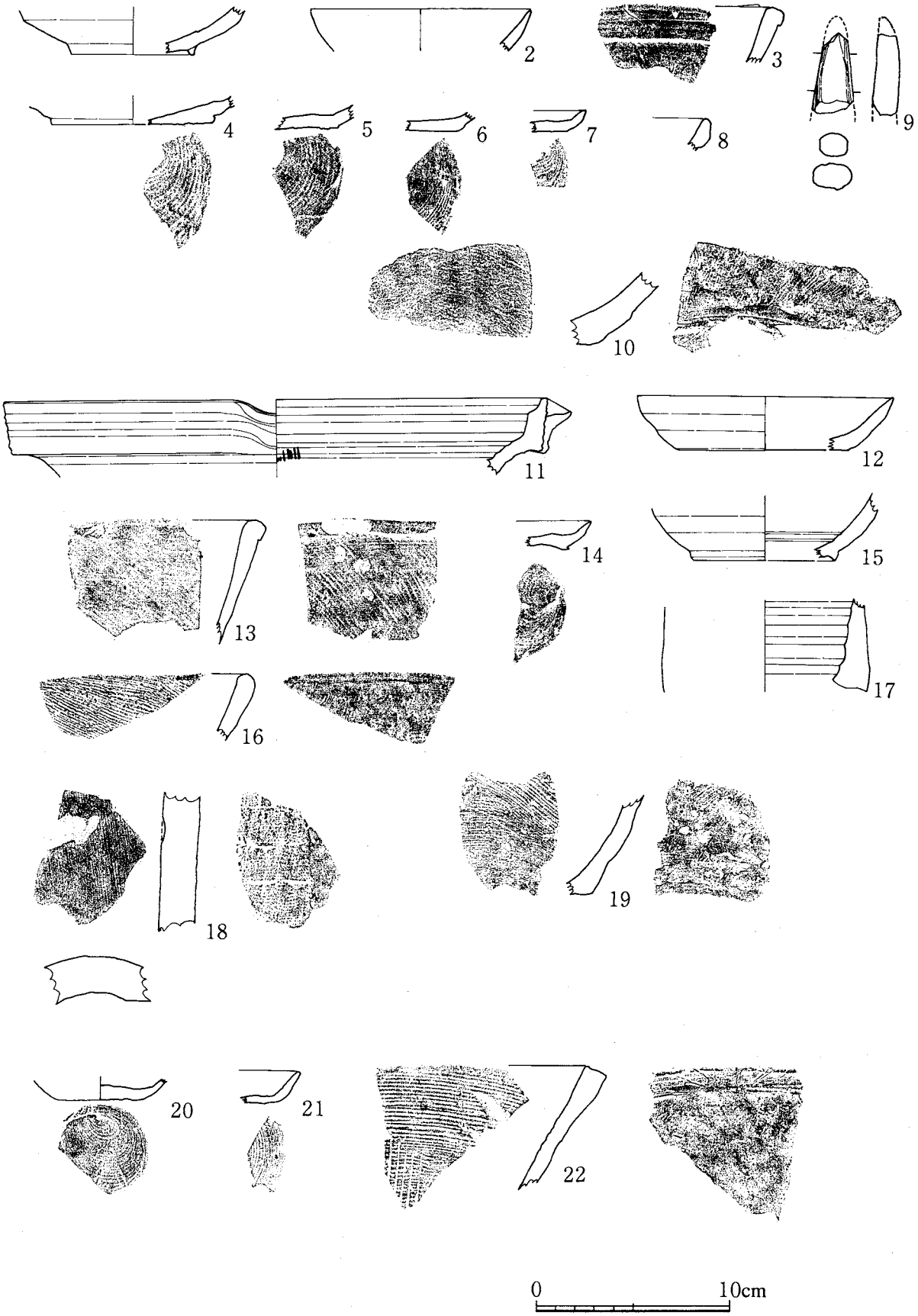


Fig.16　F−5C区　B溝出土遺物実測図

は良質であるが黒灰色をなす。18は布目瓦、丸瓦の破片、a面は板によるタタキ、b面には布痕がつく。19は瓦質土器の底部付近の破片である。底部は平底で、体部は外傾しながらたちあがる鉢形土器である。外面は凹凸が著しい。一部刷毛目調整が加えられるが雑である。内面には斜位～横位の刷毛目調整が加えられ、平滑に仕上げる。胎土は良質、焼成はややあまい。内外面共黒灰色をなす。20、21は土師器皿、共に糸切り底である。21は底径4.5㎝。22は瓦質土器のスリ鉢。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。口縁部は肥厚する。口縁端部は平担に仕上げる。外面は指調整の上に刷毛目調整を加えるが凹凸が著しい。内面は横方向のやや粗い刷毛目調整を丁寧に施し、下半に縦の沈線を入れる。胎土は良質、焼成はややあまい。外面は黒灰色、内面は白灰色をなす。

石器（Fig. 17 － 4）

1点がある。あずき色をした凝灰岩を利用した石包丁の破片。紐孔一孔が残る。孔径0.5㎝、孔の部分は半折後、折断面に研磨を加えている。両面は斜位の粗い研磨痕が残る。背は両面から研磨が加えられ、中央部に稜線がはいる。現存長4.5㎝、現存幅3.1㎝、厚0.7㎝。

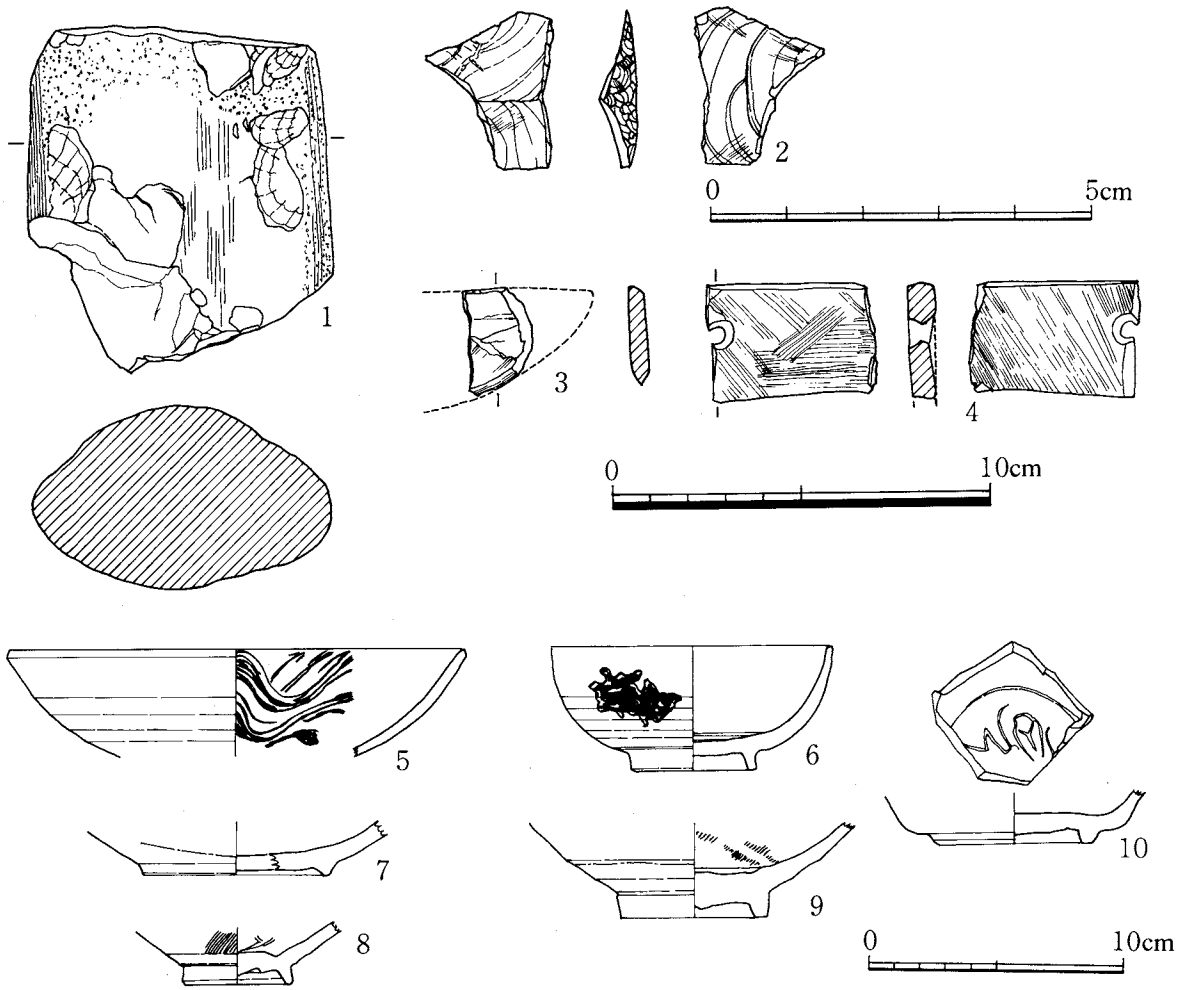


Fig.17　F－5C区　出土遺物実測図Ⅰ

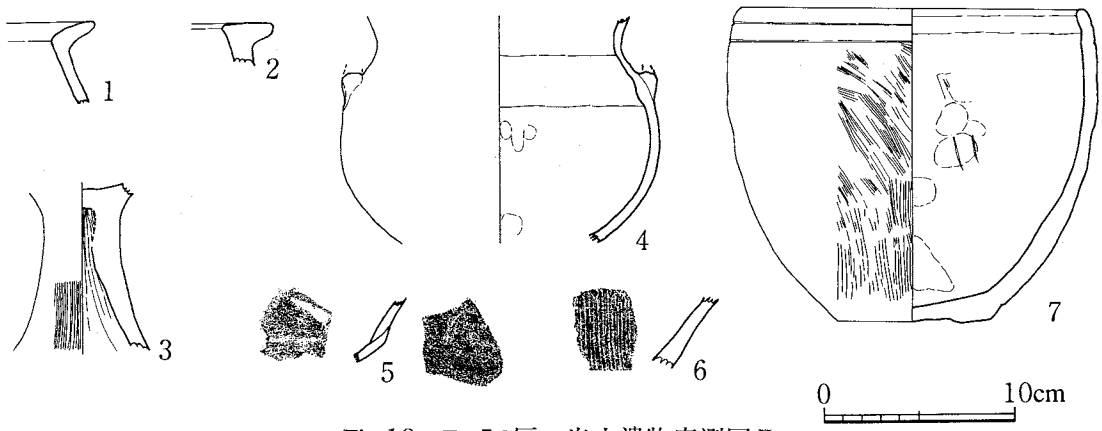


Fig.18　F−5C区　出土遺物実測図Ⅱ

（7）F−5c区出土遺物（Fig. 17，18）

表土層、その他から出土した遺物を一括して説明する。Fig. 17 − 5、近世陶器の鉢、内外面に淡い褐色釉をかけ、内面には白釉による波状文が入れられる、胎土は良質、黄褐色をなす。復原口径18.0 cm、6は染付の椀、高台はやや細い。体部は丸味をもってたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。内外面に淡い青白釉をかけるが、見込み部は重ね焼きのため環状に無釉、外面には高台と体部の境、それよりやや上に各一条の圏線、体部4ヶ所に花文がつけられているが、花文は判然としない、口径15.2 cm、器高4.9 cm、7は瓦器椀の底部、高台は低く丸味をもつ。体部は外傾しながらたちあがる。内外面共にヘラ研摩調整が加えられるが、丁寧でない。胎土は良質、焼成はややあまい。外面は黒灰色、内面は灰白色をなす。復原高台径7.2 cm。8は青磁椀、高台は小さくやや高い。外面は底部付近は露胎のままで上半部から内面にかけて、くすんだ緑釉がかけられる。見込みに圏線一条がめぐらされ、体部に花文が描かれるが上半部を欠き詳細は不明。外面には斜位の沈線が単位をもって数ヶ所に配される。胎土は良質で灰白色をなす。同安窯系の青磁である。底部径4.2 cm。9は青磁椀、高台は高く、断面は長方形、体部は外傾しながら直線的にのびる。外面の上半から内面にかけて、にごった緑釉を施す。底部から外面下半は露胎のままである。見込みに沈線一条がめぐる。体部には櫛描きによる稲妻状の文様が配される。胎土は良質で黄赤色をなす。焼成はややあまい、高台径5.8 cm。10は青磁椀、高台は低く、断面方形、外面から内面にかけて淡い緑色釉がかけられるが、外底部は露胎のままである。体部に焼けぶくれが認められる。見込みと体部の境に沈線一条をめぐらす。見込みには花文が描かれる。胎土は良質で白色をなす。Fig. 18は調査区から出土した弥生式土器の一部である。破片は非常に多い。1は口縁部がくの字形に屈曲する。口縁部はやや肥厚し、端部は丸くおさめる。内外面は器面が荒れているため調整痕等は不明。胎土には石英の砂粒を含む。焼成は良好、内外面共褐色をなす。2は口縁部破片、逆L字形をなす。内外面共横ナデ調整、胎土には多量の石英砂粒を含み不良、焼成は普通、色調は黄褐色～赤褐色をなす。3は高杯脚部。筒部から裾部にラッパ状に開く器形と思われる。器面が荒れていて判然としないが、外面は縦位の刷毛目調整が丁寧に施される。内面にはしぼりの痕跡が明瞭に残っている。下半はヘラによる調整がみられる。胎土は杯部と脚部で差がある。杯部では石英、長石の砂粒が多量にふくまれているのに対し、脚部に砂粒の混入は少なく、良質である。焼成は良好、脚部は黄白色、杯部は赤黄色をなす。筒部径4.0 cm。4は壷形土器、胴部は球形をなす。外面はヘラ状工具によって縦方向に整形される。内面は粘土の接合痕が明瞭に残る。指による調整後、一部、ヘラによる削り状の調整が加えられているが凹凸が著しい。把手がつけられている。把手は断面円形で、器壁に穴をあけ挿入して接合している。横耳か縦耳かの判別はつかない。胎土は石英、長石の砂粒を多く含み良くない。焼成は良好、外面は赤黄色～黄白色、内面

は黒灰色をなす。頸部復原径 13.2 ㎝、胴部最大径 16.9 ㎝を測る。5は高杯の杯部破片か。屈曲部がある。磨滅が著しく、器面の調整痕等は判然としない。胎土には石英砂粒を多量に混入する。焼成は良好、外面は赤褐色、内面は暗褐色をなす。6は甕形土器の底部付近の破片、外面には縦位の刷毛目調整痕が明瞭に残る。胎土には石英等の砂粒の混入が多い。焼成はあまい。外面は暗褐色、内面は黄褐色をなす。7は鉢形土器、ほぼ全形を知ることができる。底部は安定した平底、体部は外傾しながらたちあがり、口縁部は内湾する。口縁部には浅い沈線が2条めぐり、それより以下には斜位～縦位の刷毛目調整が、ややあらっぽく施される。内面はヘラナデ調整、胎土には石英の砂粒をやや多く含む。焼成は良好、内外面共に赤黄色をなす。口径 18.2 ㎝、底部径 8.0 ㎝、器高 16.5 ㎝を測る。

第３章　Ｆ－７a区の調査

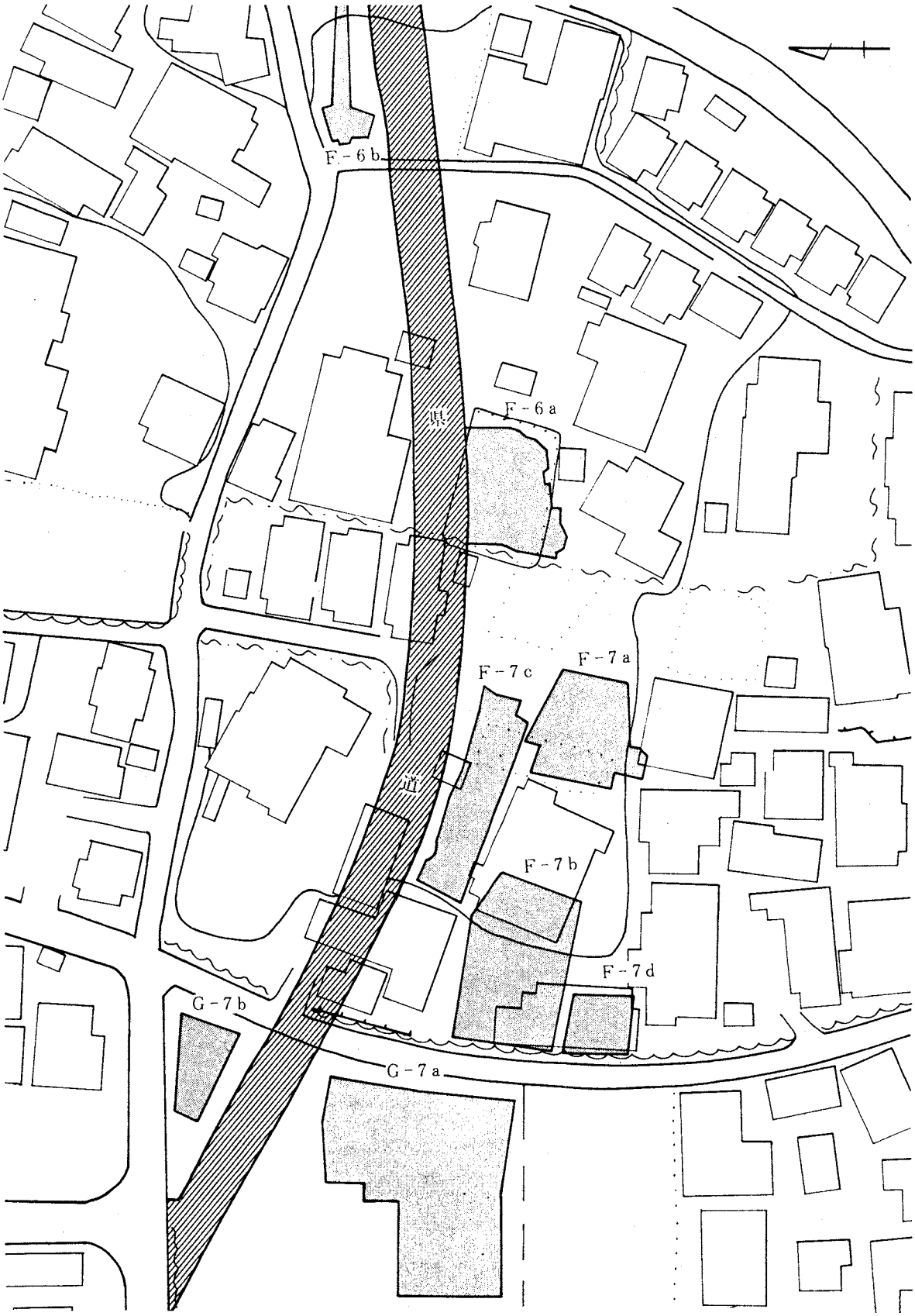


Fig.19　F—6a.b　7a～d　G—7a.b調査区の位置

1．調査区の位置

本調査区は板付５丁目３-26に所在する。板付遺跡の指定地のすぐ南を走る県道505号線の南側に位置する。環濠が所在する中央台地の南端近くを占地し、この調査区のすぐ南側は宅地のため削平され、約１mの段差をもって低くなっている。環濠南端から南に約35 m離れた地区で、県道505線が介在している。畑地として利用されていたが、新たに住宅が建設されることになり、緊急調査を実施した。耕作土の直下はすでに遺物包含層はなく、鳥栖ローム層が直接存在する。遺構は鳥栖ローム層を切り込んでつくられているが、台地の削平が著しく、遺存状態は良好ではない。

検出した遺構は、弥生時代前期の袋状竪穴２基、中世の地下式横穴２基、昭和19年につくられた防空濠１基、時期不明の溝２条、土坑、ピット等がある。これらの遺構分布の概略をみてみよう。調

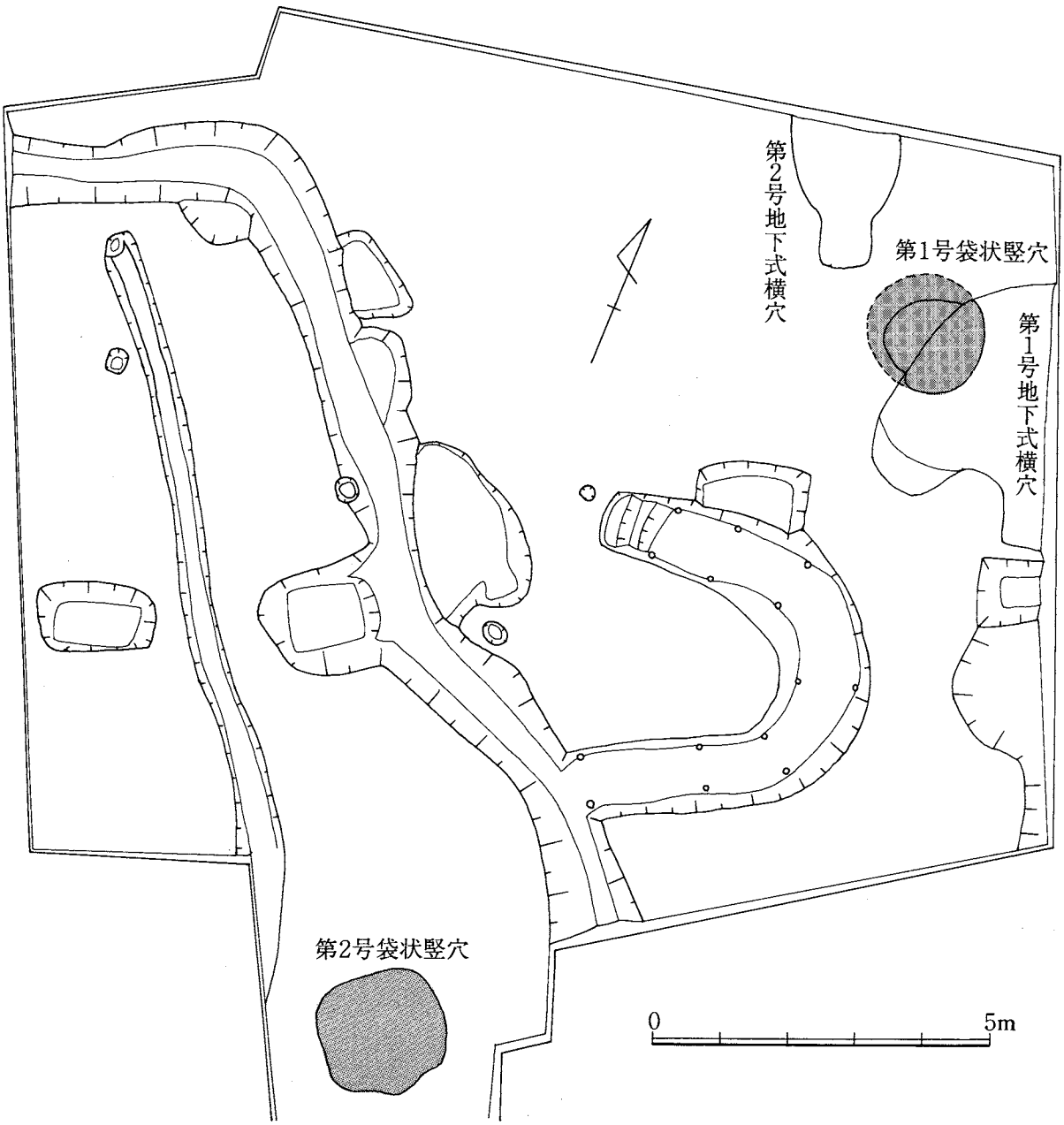


Fig.20　F−7a区 全体図

査区のほぼ中央に時期は定かではないが、幅1.2 m、深さ0.8 m、断面逆台形の溝が北西方向に延び、調査区の北端近くで屈曲し、西に延びるが延長は発掘区外にのびている。この溝は、同様の時期不明土坑5基と重複している。他の時期不明の溝は、前記溝の区画内西側にあり、南から北に延び、先の溝の手前で終わっている。防空濠は調査区の中央部で検出した。一部が時期不明の溝と重複している。昭和19年につくられたものである。幅1.2 ～ 1.3 m、壁はほぼ垂直で、現状の深さは約80 cm、床面は平担である。平面形はコの字形をなす。全長は約9 mを測る。出入口は二段の階段を付設しているが南側の出入口は溝のよって破壊されている。このことから溝は少なくとも昭和19年以降に掘削されたものである。内部の壁にそって等間隔に柱穴がならび、上部の構築を行ったことが知られる。当時、この防空濠を掘り削した中牟田勝昌氏からの聞書きによると、柱穴に柱をたて、それに横木をわたし、屋根をふき、さらにその上に土をかけ、草木でかくしたものであったという。地下式横穴は調査区の東側に2基確認した。いずれも、調査区に一部が確認され、その大部分は調査区外にあり、形状からかろうじて地下式横穴と確認した。第1号地下式横穴は東壁に、第2号地下式横穴は北壁外にのびている。袋状竪穴も2基確認した。調査区の北東コーナー付近と西南コーナー付近に各1基が在り、北東コーナー付近の第1号袋状竪穴は第1号地下式横穴と重複関係にあり、約半分が底部近くまで破壊されている。

2．遺構と遺物

（1）第1号袋状竪穴と出土遺物

第1号袋状竪穴（Fig. 21）

第1号地下式横穴と重複関係にあり、約半分が削平、破壊されているが、床面が残っていたので、ほぼ全形を復原できる。検出面では約半分が残り、長径133 cm、短径65 + α cmの不整半円形プランをなす。壁面は袋状となり、底面は東西径156 cm、南北径203 cmの楕円形プランをなす。床面は中央部がやや深くなるが、ほぼ平坦である。

袋状竪穴の埋土は、流れ込みによる堆積とみられるが、ほぼ水平の堆積になる。上より、第1層、鳥栖ローム層の剥離土。第2層、鳥栖ロームのブロック。第1層、第2層共に北壁に接し部分的にみられ、竪穴壁の崩落土とみられる。第3層、黒色土層。次の第4層に比較し、粘性が弱い。厚さ20 ～ 30 cm前後。第4層、暗褐色土層で焼土の粒子を含む。第5層に比較し粘性が弱い。厚さ10 ～ 30 cm。第3層と第4層の間の北側に小さな鳥栖ロームのブロック層がみられる。第5層黒褐色粘質土層、厚さ10 ～ 25 cm、層は南側が厚く、北側に薄く、北壁部まで及んでいない。第4層と第5層の間にも小さな鳥栖ロームのブロック層がある。第6層　南壁部に薄く部分的に存在する。鳥栖ローム混入黒色粘質土層、厚さ1 ～ 2 cm。第7層　黒色粘質土層、厚さ2 ～ 8 cm、床面に接した土層で、第5層同様

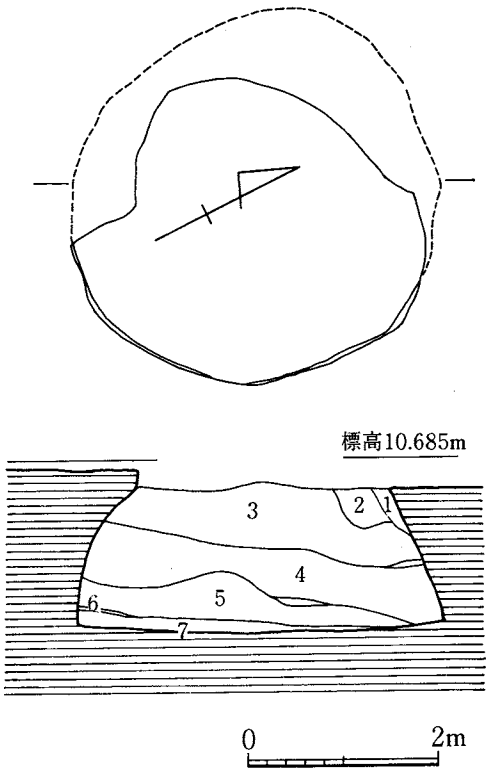


Fig.21　F−7a区　第1号袋状竪穴実測図

に南壁側が厚く、北壁側が薄くなり、北壁部に及んでいない。第4層上面も南から北に向かって傾斜しており、この竪穴の堆積土は南側より流れ込んだと考えることができる。

出土遺物（Fig. 22 , 23 ）

袋状竪穴から出土した遺物には土器、石器、石片等があり、総数465点が出土している。土器の大部分は小破片となり、図示できるものは極めて少ない。代表的なもの11点を図示した。石器は柱状片刃石斧の破片がある。

1～3は小型壷の破片である。1は同一個体とみられる個体であるが、胴部は小破片となり接合不可能であったため図上復原を行った。器形は、ややあげ底状になった円盤貼り付けの底部から、体部は強く外傾しながらたちあがり、肩部がやや張る球形の胴部となる。胴部最大径は胴上位に位置している。肩部と頸部の境には明瞭な段が形成される。外面の段はヘラ研磨により凹線状に仕上げられ非常にはっきりしている。内側の粘土接合の段はヘラで研磨され、ゆるやかになっており、やや不明瞭である。頸部は内傾しながらたちあがり、口縁部は屈曲し外反する。口端部は丸くおさめる。口縁部は粘土貼り付けによる肥厚はみられず、口縁部と頸部の境は屈曲する以外不明瞭である。器面は横方向のヘラ研磨が丁寧に加えられる。全体的な器形、肩部と頸部の境の段、円盤貼り付け状の底部などは、板付Ⅰ式土器の小壷の特徴を良く残しているが、口縁部の段が不明瞭になり、肩部の肩が強調され、内面の粘土接合部の不明瞭さ、底部の高さが高くなるなど、後出の要素も強い。胎土は精選された良質の粘土が使用され、焼成は良好、色調は黒褐色をなす。この種の土器は彩文されたものが多いが、遺存部の観察からは彩文は認められない。復原口径10.4 cm、胴部最大径16.4 cm、底径5.8 cm、推定器高18.0 cmを測る。2は口縁部破片、口縁端部は肥厚するが、下端の段は明瞭でない。口縁端部は丸くおさめる。胎土は精選され精良、焼成は堅緻。黄白色をなす。復原口径9.2 cm。3は底部破

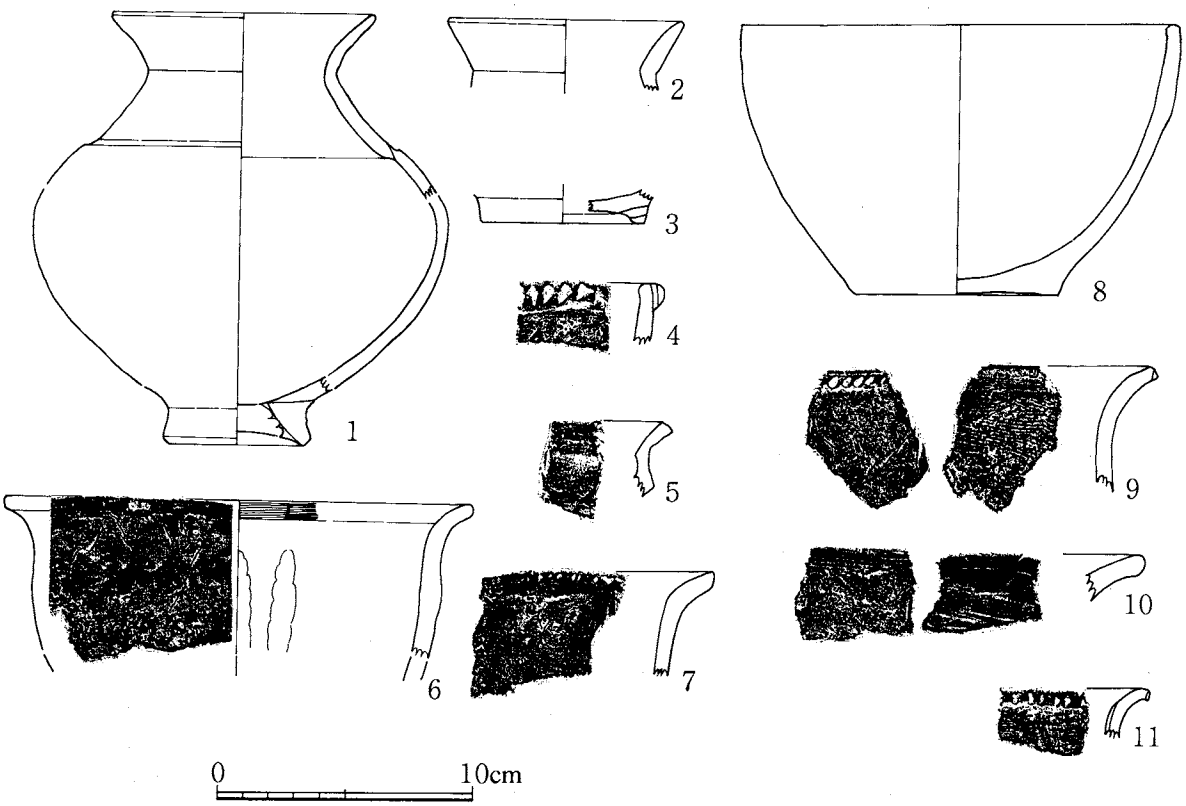


Fig.22　F−7a区　第1号袋状竪穴出土遺物実測図Ⅰ

片。円盤状の底部であるがあげ底をなす。底部側壁から外底部にかけて径0.2㎝の孔が穿たれている。完形品の例からすれば、相対する位置にも穿孔されていると考えられる。壷自体を提げるためか、壷の固定のためにあけられた孔であろう。胎土は前二者同様精良で、焼成は良好、黒褐色をなす。復原底径は6.6㎝を測る。4は刻目突帯文の甕形土器である。突帯は口縁端部に直接接合される。突帯はややいびつで一定していない。刻目はヘラで刻み込まれたものである。器面の調整は器面が荒れているので詳細は不明。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好、外面は黄褐色、内面は黒褐色をなす。5は浅鉢形土器の口縁部破片、体部上半で屈曲し、内傾しながらたちあがり、口縁上半でさらに屈曲し大きく外反する。口縁端部は平担に仕上げる。器面が荒れているので、調整の詳細は不明。胎土には多量の砂粒を含み良質でない。焼成は良好。内外は黒褐色～赤褐色をなす。6、7は甕形土器の口縁部破片。口縁は如意形になり、口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面は横ナデ調整、下半はヘラナデを縦位に施す。口縁部内側には横方向の刷毛目調整。胴上半部は指による調整後、ナデ調整を加える。胎土には多量の砂粒を混入し、不良。焼成は良好である。色調は外面が褐色、内面が赤褐色をなす。復原口径は18.4㎝。7は口縁は大きく外反しない。口縁端部は丸くおさめ、その上にヘラによる小さな刻みがつけられる。口縁部内外面は横ナデ調整。外面にはススの付着が顕著である。胴内面はヘラナデ調整、胎土には石英、長石、金雲母の砂粒を多量に含む。焼成は良好。外面は褐色、内面は赤褐色をなす。8は鉢形土器。底部は安定した平底、体部は外傾しながら丸味をもってたちあがる。内面は横位のヘラ研磨調整、口縁端部は平坦に仕上げる。底部外面はヘラ削り状のヘラナデ調整。体部外面は横位～斜位のヘラ研磨調整。内面は、横位のヘラ研磨調整。口縁部径17.1㎝、底部径8.0㎝、器高11.6㎝、胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良好。外面は褐色、内面は黄褐色をなす。9は如意形の口縁をもつ甕形土器。口縁は大きく外反し、口縁端部は平坦に仕上げ、その下半に刷毛目工具によって刻目を入れる。外面は縦位、内面は横位の刷毛目調整。口縁部内外面はさらに横ナデ調整を加える。胎土に砂粒を多量に混入、焼成は良好。内外面は赤褐色をなす。10は壷形土器の口縁部破片。外面は横位の刷毛目調整後、ヘラ研磨調整、内面は横ナデ調整。胎土には多量の砂粒を混入、焼成は良好、色調は内外面共に赤黄色をなす。11は如意形口縁の甕形土器。口縁端部は丸くおさめ、端部全面にヘラによる刻目を施す。外面は縦位の刷毛目調整。胎土には砂粒を含む。焼成は良好。色調は赤褐色。

石器（Fig. 23）

頁岩を利用した抉入柱状片刃石斧の破片である。節理面から剥離したもので、全形を知ることはできない。周辺から剥離を加えて整形し、その上に研磨を加える。現存長10.0㎝、幅2.4～4.4㎝、現存厚0.9㎝、製品はこれより一まわり大きくしたものであろう。

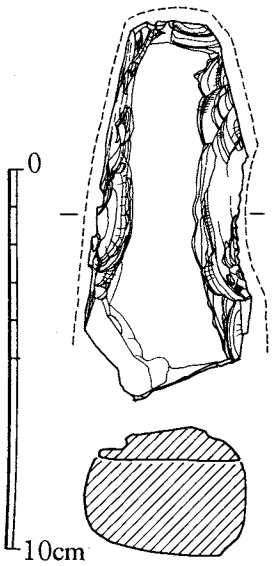


Fig.23　F−7a区
第1号袋状竪穴出土遺物実測図Ⅱ

（2）第2号袋状竪穴と出土遺物

第2号袋状竪穴

調査区の南端部に独立して検出した袋状竪穴である。平面プランは1辺約2mの隅丸方形をなすが、南側の一部が張り出している。壁は一部を除いて袋状をしている。現存の深さは約60㎝と浅く、1号袋状竪穴同様に、上部はかなり削平されたことがわかる。出土遺物には土器、石器があり、上層では獣骨も出土している。袋状竪穴の使用が終

了し、穴を放棄した以後は、凹みをゴミ捨て場として利用したものであろう。この袋状竪穴より南側は一段低くなり、環濠南側に分布する袋状竪穴群の南限にあたると考えられる。

出土遺物（Fig. 24，25）

本袋状竪穴から出土した遺物には土器、石器、石片、獣骨等があり、総数約500点が出土したが、いずれも小破片が多く、全形を知ることができるのは極めて少ない。

Fig. 24 －1は壷形土器の口縁部破片、胴部はややふくらみをもち、頸部で屈曲し、口縁は外反する。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。口縁の内外面は横ナデ調整。胎土は精選され良質。焼成は良好、外面は褐色。内面は黄白色をなす。復原口径13.6㎝。2～4は小型の壷形土器の頸部破片。2，3は頸部と胴部の境に段が形成され、4は細沈線をめぐらす。内面の粘土接合部の段は2，3はやや不明瞭。4は明瞭に残る。3点共に外面は横方向のヘラ研磨調整。内面は2がへら削り状の調整。3は横ナデ調整、4はヘラナデ調整である。共に胎土は精選された良質のもので、焼成は2がややあまいが、他は良好。色調は2が外面黄白色、内面灰黒色、3が内外共赤褐色、4が外面が黒色～黄白色、内面が黒灰色である。5は刻目突帯文土器の甕形土器口縁部小片。突帯は口縁部に直接貼り付けられる。刻目は刷毛目原体によってつけられている。刻目内に刷毛状の平行沈線が明瞭に残る。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良く、色調は外面が赤褐色、内面は黄赤色である。6は大型壷の頸部破片。頸部の境に三本の細沈線をめぐらし、肩部に同様の細沈線で文様を描くが、文様は端部のみで明らかではない。胎土には砂粒を多く混入する。焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面が赤褐色をなす。7は大型壷の口縁部、大きく外反し、端部はやや肥厚し、平坦に仕上げる。口唇部の両端にヘラによる刻目を入れる。口縁部内外面はヨコナデ調整。胎土には石英、長石の砂粒が多く含まれる。焼成良好。内外面共に黄白色をなす。8は如意形口縁をもつ甕形土器。8は口縁端部がやや肥厚し、平坦に仕上げる。外面は縦位の刷毛目調整で、口縁部は横ナデ調整を加える。口唇部から内面にかけては横方向の刷毛目調整。9は鉢形土器の口縁部、口縁は如意形に外反し、端部は平坦に仕上げる。外面は横方向のヘラ研磨調整。内面は横ナデ調整。10は甕形土器。口縁部は如意形に外反する。口唇部の下半に棒状工具による刻目が入れられる。口縁部内外面は横ナデ調整。胴部外面は粗い縦位の刷毛目調整。内面には指圧調整痕が残る。8～10の胎土は多量の砂粒が混入される。共に焼成は良好、色調は、8の外面が黒褐色、内面が黄褐色、9の外面が黒色、内面が黄褐色。10は内外面共に赤褐色である。11は如意形の口縁をもつが甕形土器か鉢形土器かは明らかでない。口縁端部は丸くおさめる。内外面は横ナデ調整。胎土には砂粒を若干含む。焼成は良く、黄褐色をなす。12は甕形土器の口縁部、口唇部全面にヘラによる刻目が入れられる。口縁面に指圧調整痕が残る。内外面共に横ナデ調整。胎土には多量の砂粒を含む。焼成は堅緻、内外面共赤褐色をなす。13は甕形土器であるが、胴上半部で屈曲するタイプ。屈曲部に沈線がめぐる。口唇部外側にヘラによる刻目が入れられる。刻目にススが付着する。内外面共に横ナデ調整。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良く、黄褐色をなす。14は刻目突帯文土器　突帯は口唇部に貼り付けられ、高い。突帯にはヘラで浅い刻目が施される。外面に縦位、内面の横位の刷毛目調整がみられる。胎土には多量の砂粒を混入、焼成は良く、外面は褐色、内面は黒褐色をなす。15は如意形の口縁をもつ甕形土器、口唇部下半に棒状工具によって刻目がつけられる。外面は縦位、内面は斜位の刷毛目調整後、横ナデ調整を加える。胎土には砂粒を多く含む。焼成は堅緻で内外面共に赤黄色をなす。16、17は大型の壷形土器である。16は口縁部がわずかに肥厚し、大きく外反する。口縁端部は丸くおさめる。頸部と胴部の境に沈線二条をめぐらし、さらに下方に一条の沈線をめぐらし、その間に沈線を入れ八字形文の文様を入れる。肩部の張りは強い。外面から口頸部内面にかけては横方向のヘラ研磨調整。口径20.0㎝胴部最大径33.0㎝を測る。

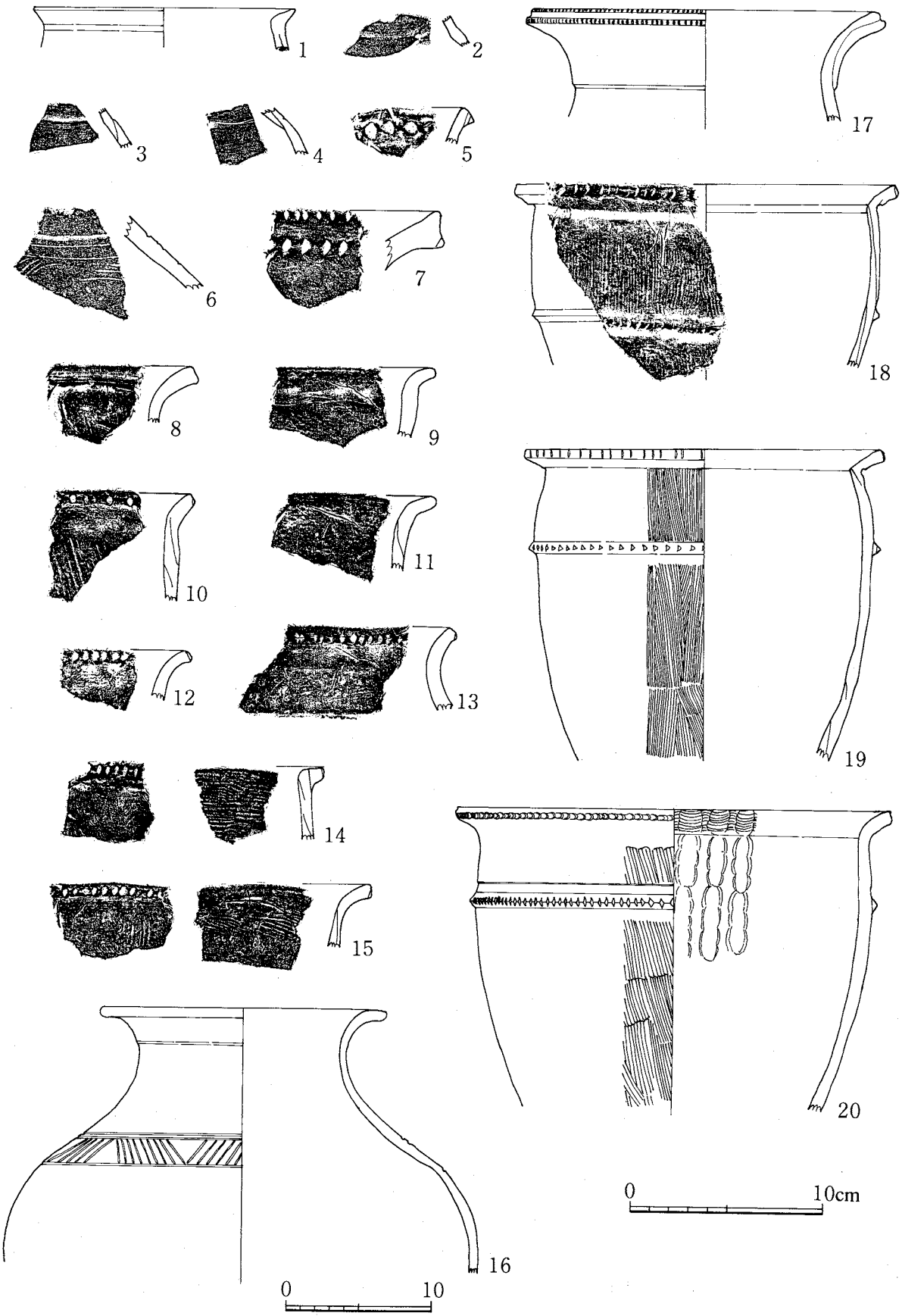


Fig.24　F−7a区　第2号袋状竪穴出土遺物実測図Ⅰ

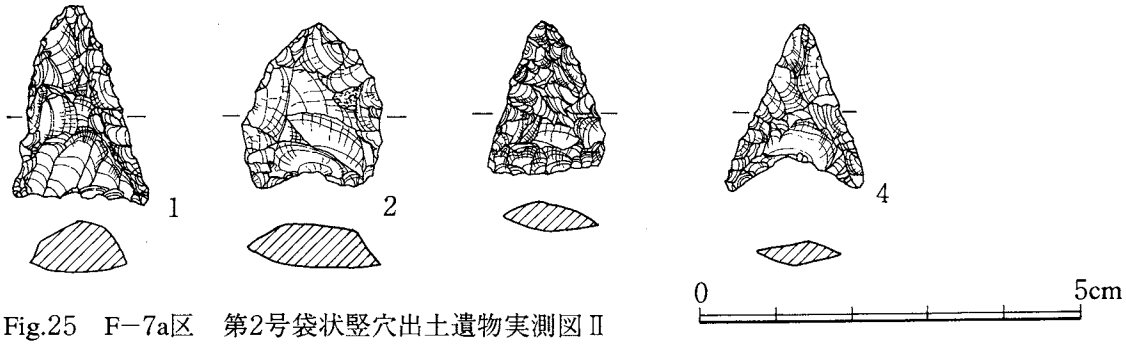


Fig.25　F−7a区　第2号袋状竪穴出土遺物実測図Ⅱ

17は口縁部に粘土帯を貼り付け肥厚させ、下端に段を形成する。口縁端部は平坦に仕上げ、その両端にヘラによる小さな刻目を入れる。内外面はヘラ研磨調整。共に胎土には多量の砂粒を混入し、不良、焼成は良好。16は内外面共に黄褐色、17は黄白色をなす。17は復原口径18.0㎝。18～20は同形の甕形土器で、ほぼ全形を知ることができる。口縁部は如意形に屈曲し、胴部に断面三角形の突帯をめぐらす。18、19は胴部と口縁の境に凹線一条をめぐらし、口縁部は肥厚する。20は胴部の突帯上位に幅広い沈線をめぐらし段をつくる。口唇部と突帯の刻目は18、19はヘラ状工具で施し、ほぼ口唇部全面に刻む。20は棒状工具で、口唇部下半に施している。共に外面は縦位の刷毛目調整。20は胴部上半から口縁部にかけての内面に指圧調整痕が明瞭に残り、口縁部はその上に刷毛目調整を施す。18は復原口径19.9㎝、19は18.8㎝。20は口径22.8㎝を測る。18～20はに共に胎土には多量の砂粒を混入する。焼成は良好で、色調は18，19が外面は黒褐色、内面は赤褐色、20は外面が黄灰色、内面が黄褐色をなす。18、19は器形や製作技法が非常に類似し、同一人の製作とみられる。

石器（Fig. 25）

石鏃4点がある。1，3が黒曜石、2，4が安山岩を素材としている。1，3は二等辺三角形。2，4は抉りがわずかにつく。共に丁寧なつくりである。1は長さ2.5㎝、幅1.8㎝、厚0.7㎝。2は長さ2.1㎝、幅1.9㎝、厚0.6㎝。3は長さ2.0㎝、幅1.6㎝、厚0.4㎝。4は長さ2.1㎝、幅1.8㎝、厚0.3㎝を測る。

（3）第1号地下式横穴と出土遺物

調査区の東端部に検出したが、大部分は発掘外にあるため全形を知ることができない。また、調査区は削平が著しく、地下式横穴の上半部は遺存せず、下半部のみが残っているにすぎない。未掘部分があるので、竪坑から割り出した主軸線の左右対称形として復原的にみていこう。竪坑は1辺長約80㎝の隅丸長形、玄室は不整楕円で推定幅5m、長さ約3m。玄室西側には一段高い屍床状の遺構が付設される。東側にも同様の遺構が存在する可能性がある。屍床状の遺構から性格不明の鉄器1点が出土している。

（4）第2号地下式横穴と出土遺物

調査区の北端部に検出した。玄室の一部が発掘区北壁外にのび、完掘していない。しかし、その全形は推測することができる。玄室は縦長の不整楕円プランになるとみられる。推定長約2.5m、幅約1.7m、竪坑は1辺約80㎝の方形をなす。第1号地下式横穴に比較し小型である。内部より糸切り底の土師器Ⅲ1点が出土した。また、玄室西側に炭化物の分布がみられる。なお、この周辺からかって砂岩製の板碑が採集されている。

第４章　Ｆ－７b区の調査

１．調査区の位置

本調査区は板付五丁目に所在する。板付遺跡の指定地域のすぐ南を走る県道505号線の南側に位置する。環濠が存在する中央台地の南西部に占地する。先のＦ－７a区とは家を界した西側に位置し、次のＦ－７c区はこの調査区と県道の間に位置している。Ｆ－７d調査区は、この調査区の南側に隣接

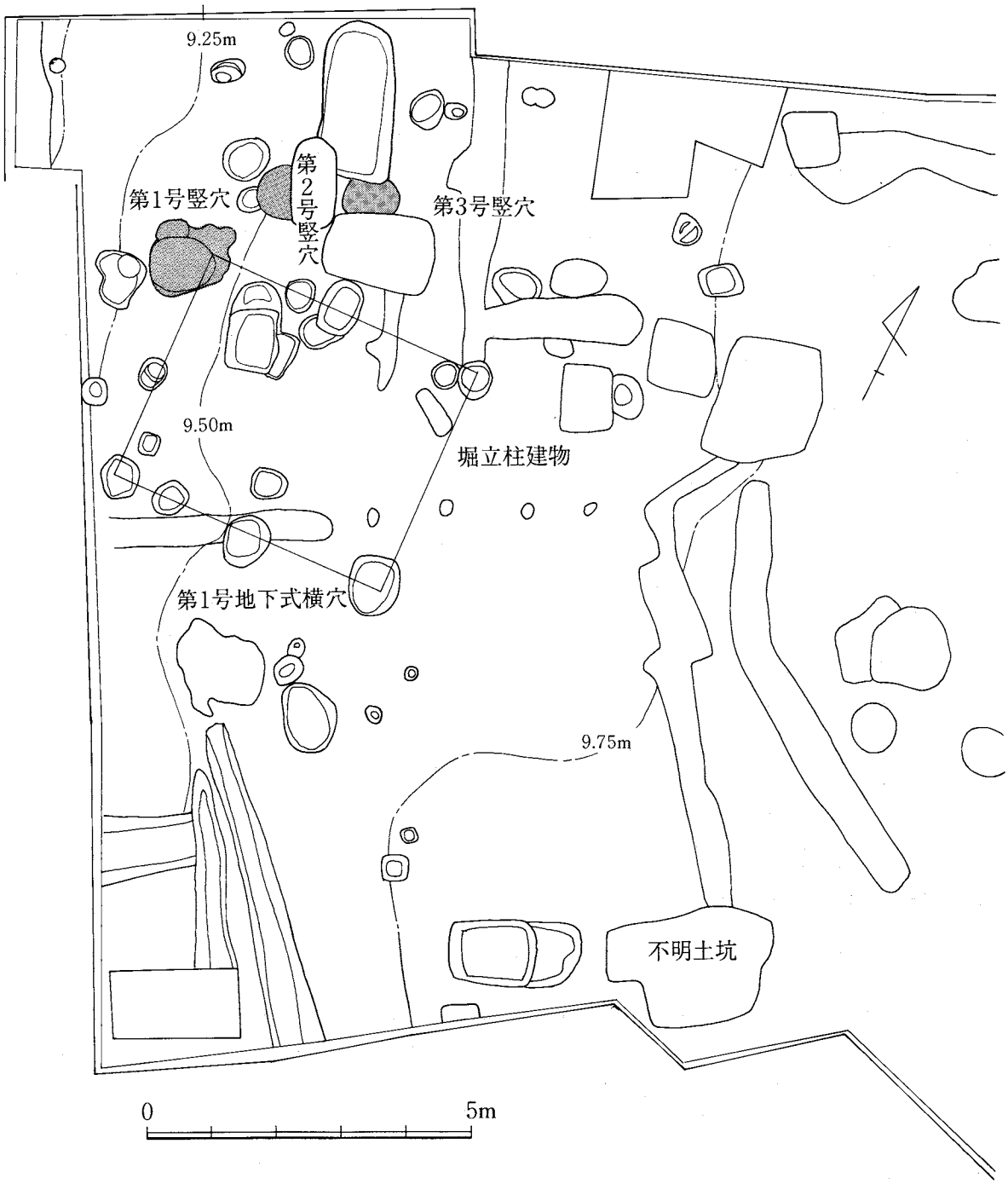


Fig.26　F−7b区全体図

している。この調査区の西端部は、板付中央台地の西側の台地際となっており、沖積地と洪積台地の状況を知るには重要な地域である。F－7b区の西側沖積地には、刻目突帯文土器単純期の水田が発見されて著名になったG－7a区が広がっている。

こ調査区は宅地・畑地と利用されていたが、住宅の改築にともない緊急調査を実施した。表土層（一部・耕作土）の直下は、すぐ鳥栖ローム層となり、遺物包含層はすでに削平され消滅しているが、西側の台地落ち際には部分的に遺物包含層が残っている部分がある。遺構は鳥栖ローム層を切り込んでつくられているが、台地上の削平が著しく、また、住宅地となっていたため、ゴミ穴等の後世の撹乱がいたる所に存在し、遺存状態は良好ではない。

検出した遺構は調査区の西北部に集中している。弥生時代の竪穴3基と小竪穴群、古代末～中世の竪穴2基、時期不明の土坑墓1基がある。弥生時代の竪穴2基は井戸で、近接して存在する。他の1基の竪穴の性格は不明。小竪穴群は井戸の南側に検出した。1間×2間の掘立柱建物遺構を復原できるが、さらなる検討が必要である。古代末～中世の竪穴は調査区南西部に位置する。崩落が著しく、原形を明らかにすることは困難である。概報では井戸の可能性を示唆したが、地下式横穴の可能性が強い。

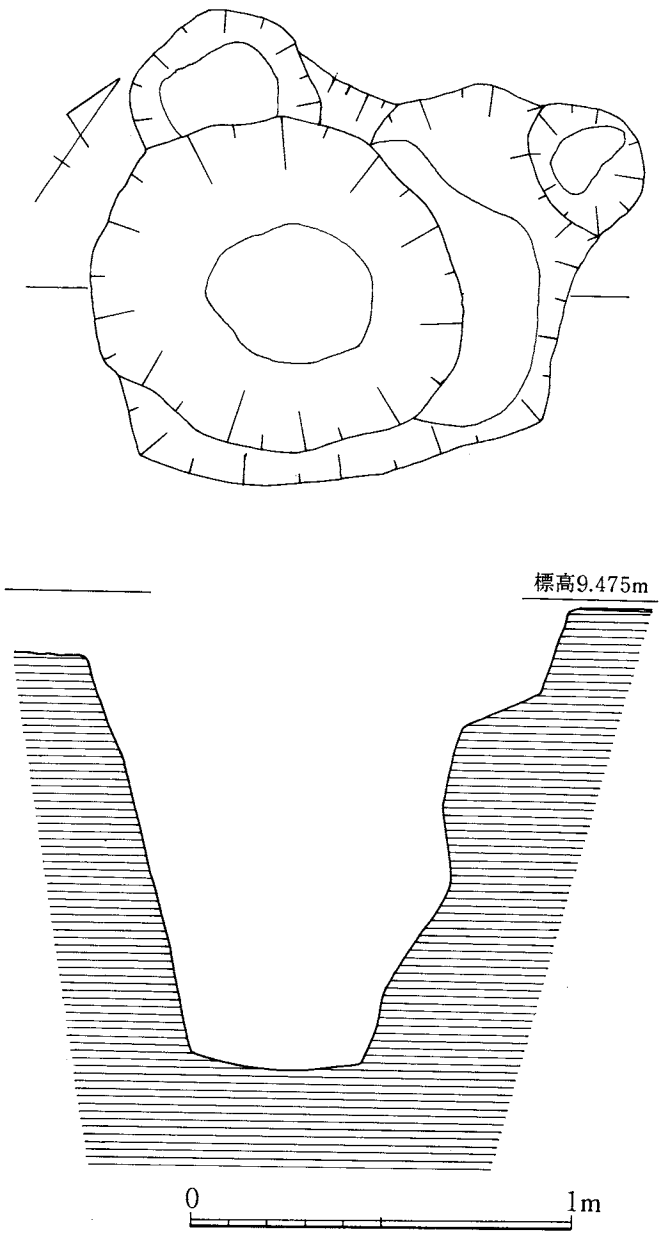


Fig.27　F−7b区　第1号竪穴実測図

2．遺構と遺物

（1）第1号竪穴と出土遺物

第1号竪穴（Fig.27）

調査区の西端部、中央よりやや北寄りに検出した竪穴である。掘立柱建物の北西隅の柱穴と切り合い関係にあるが、その先後関係は不明。2号竪穴と約1m、3号竪穴とは約2.2m離れている。

竪穴は2個以上のピットと重複しているが、その先後関係は明らかでない。中央部の竪穴は東西径99㎝、南北径87㎝の円形プラン。深さ108㎝、壁面はかなりの傾斜をもって掘り込まれる。湧水点がみられず井戸とは考え難い。掘立柱建物の北西コーナーの柱穴部にあたるが、柱穴とした場合、他の柱穴とあまりに大きさが違いすぎる。現時点ではその性格は明らかにできない。

出土遺物

弥生式土器の小片が出土しているが、いずれも図化できるものはない。

（2）第2号竪穴と出土遺物

第2号竪穴（Fig. 28）

調査区の北西部に確認した竪穴遺構である。3号竪穴は約0.5 m離れた東側に位置する。後世の撹乱坑のよって約$\frac{1}{3}$が破壊されるが、ほぼ全形を知ることができる。

平面形は東西径74＋α cm、南北径84 cmの円形プラン。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。深157 cmで、底面は平坦でなく、中央部が凹み丸くなっている。鳥栖ローム層と八女粘土層の境が湧水点となり、その部分が崩壊し、かなり拡がっている。板付遺跡で通常認められる井戸は、さらに八女粘土

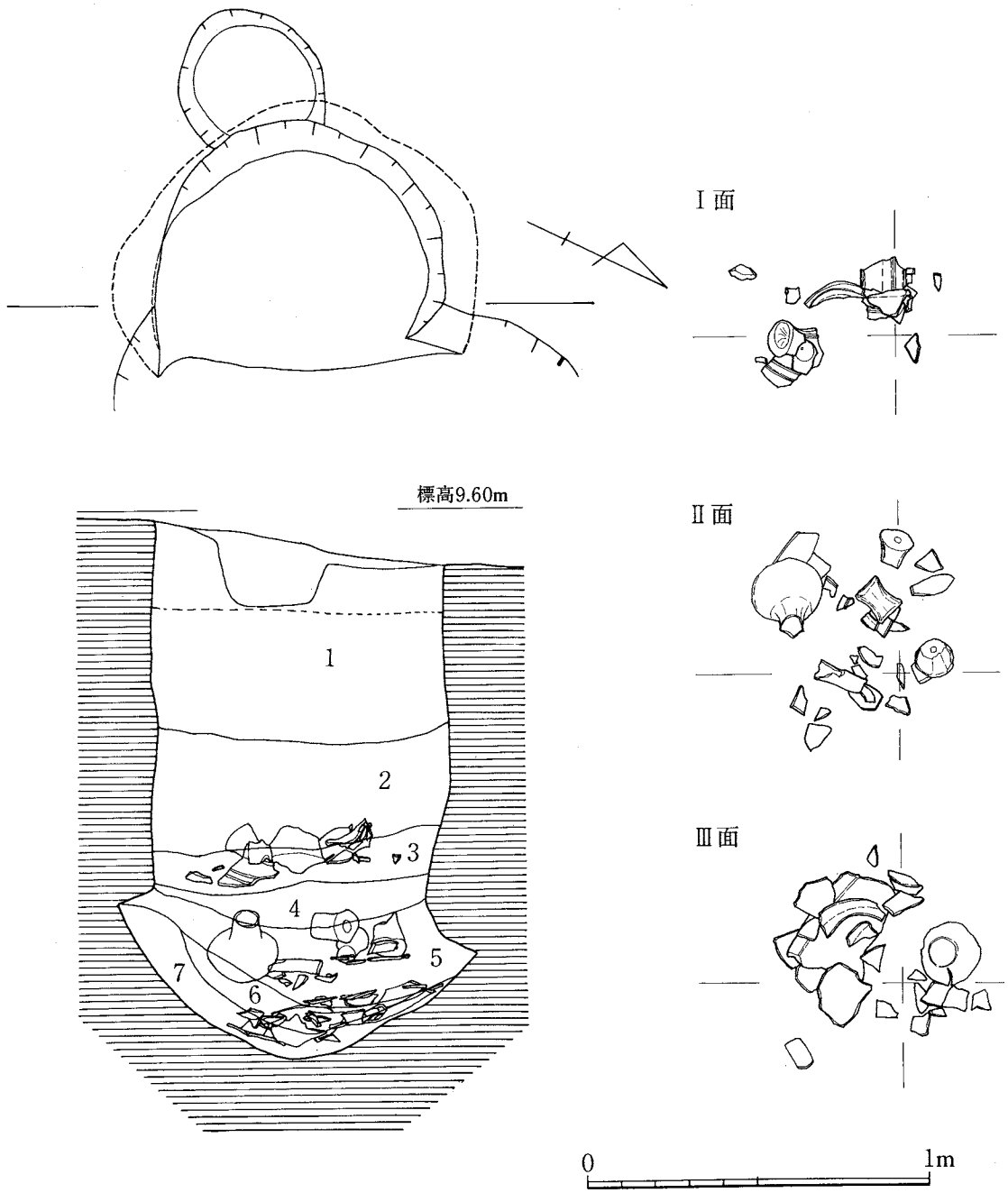


Fig.28　F−7b区　第2号竪穴実測図

層を突き抜け砂礫層まで達しているが、本例のような浅い井戸は極めて珍しい。

埋土は、ほぼ水平に堆積している。上より第1層、茶褐色土層（ロームおよび灰白色粘土を混入）厚さ約60㎝。第2層、暗茶褐色粘質土（ロームおよび灰白色粘土を含む）厚さ25～35㎝。第3層灰褐色粘質土層（灰白色粘土を含む）厚さ10㎝前後。第4層　暗灰褐色粘質土層　厚さ5～15㎝。第5層　黒褐色粘質土層　厚さ15～25㎝。第6層　暗黒褐色粘質土層（炭が混入する）厚さ10㎝前後となっている。

竪穴内からは多量の土器と木材片が出土している。埋土の上層はいずれも小破片であるが、下層は人為的に投げ込まれた状態である。大きく三つの集中部分がみられる。最下層には、カメ棺に使用される大型甕が敷きつめられたような状態であり、やや間隔をおいた上層には丹塗りの袋状口縁壷や器台が集中し、さらに同様の間隔をおいて、瓢形土器・器台が集中している。いずれも井戸祭祀に使用されたものであろう。

出土遺物（Fig. 29 . 30）

出土遺物は井戸祭祀に利用された土器類のみである。壷形土器・甕形土器・高杯形土器・器台・瓢形土器等がある。丹塗り土器が大部分を占めることは、これらの土器が祭祀用であることを有弁に語っている。

1～4は袋状口縁をもつ壷形土器である。1、3、4は丹塗り磨研された土器である。1は口縁部を欠失する。安定した平底にやや扁平な球状の胴部がつき、胴部と頸部の境は不明瞭で、ゆるやかなカーブをもって頸部に移行する。頸部はやや長く、口縁部は袋状をなすものである。胴中位に外側から打撃を加えて穿った楕円形の孔（4㎝×2㎝）がある。外面にはやや粗い縦位～斜位の刷毛目調整が丁寧に施される。頸部内面にはしぼりの痕跡が顕著に認められる。胎土は精選されて良質、焼成は良好。丹塗りの下の地肌は黄白色をなす。頸部径8.5㎝、胴部最大径21.7㎝、底部径9.2㎝、現存器高22.5㎝を測る。2は口縁部破片、袋状をなし、口縁端部は丸くおさめる。復原口径12.6㎝、口縁部内外面は横ナデ調整。頸部外面に斜位の刷毛目調整が施されるが、ヘラ磨きによって消される。胎土には石英の砂粒を多量に含む。焼成は良好、色調は淡赤白色をなす。3は頸部から胴部にかけての破片。器形は1と同様である。外面は縦位の刷毛目調整が施されるが、胴部上半から頸部にかけては研磨によって刷毛目痕が消されている。内面は頸部にしぼりの痕跡が明瞭に残る。胴上半部は指による調整で、指圧痕が残る。下半部は斜位の刷毛目調整を施す。胎土には石英、長石の砂粒を混入するが良質。焼成は堅緻、丹塗りの下の地肌は赤褐色をなす。頸部復原径7.2㎝、胴部最大径22.2㎝を測る。4は底部。安定した平底から、体部は外傾しながらたちあがる。器形は1と同様と考えられる。外面は縦位～斜位の刷毛目調整。内面は指による調整で、指圧痕が残っている。胎土には石英、長石の砂粒がわずかに混入するが精良。焼成は堅緻で、色調は外面が丹塗り下の地肌が黄白色、内面が暗灰色をなす。胴部最大径19.6㎝、底部径8.0㎝を測る。5、10は高杯。いずれも丹塗り磨研されている。5は杯部。鋤先口縁をなし、口縁端部に一条の凹線をめぐらしている。内外面共に横ナデ調整。復原口径26.6㎝。胎土は精選され良質、焼成は良好、丹塗り下の地肌は黄白色をなす。10は脚部破片。筒部を残し、脚端部を失う。器面が荒れて表面の丹が落ちている部分が多い。脚部と杯部の境にM字突帯一条がめぐっていたとみられ、貼り付けの痕跡が明瞭に残っている。脚部外面は縦位の刷毛目調整、丹塗りし、ヘラ研磨される。内面は粘土のしぼり痕が明瞭に残り、凹凸が著しい。胎土は精選され良質。焼成は良好、黄白色をなす。筒部径5.0㎝を測る。6～9は器台。6は完形品。両端部はあまり広がらず、筒状をなす。指で調整しているため、器面の凹凸が著しい。上部は二次的に火を受けて黒く変色している。口径7.9㎝、底径9.3㎝、器高12.0㎝を測る。7～9は上半部を欠失する。

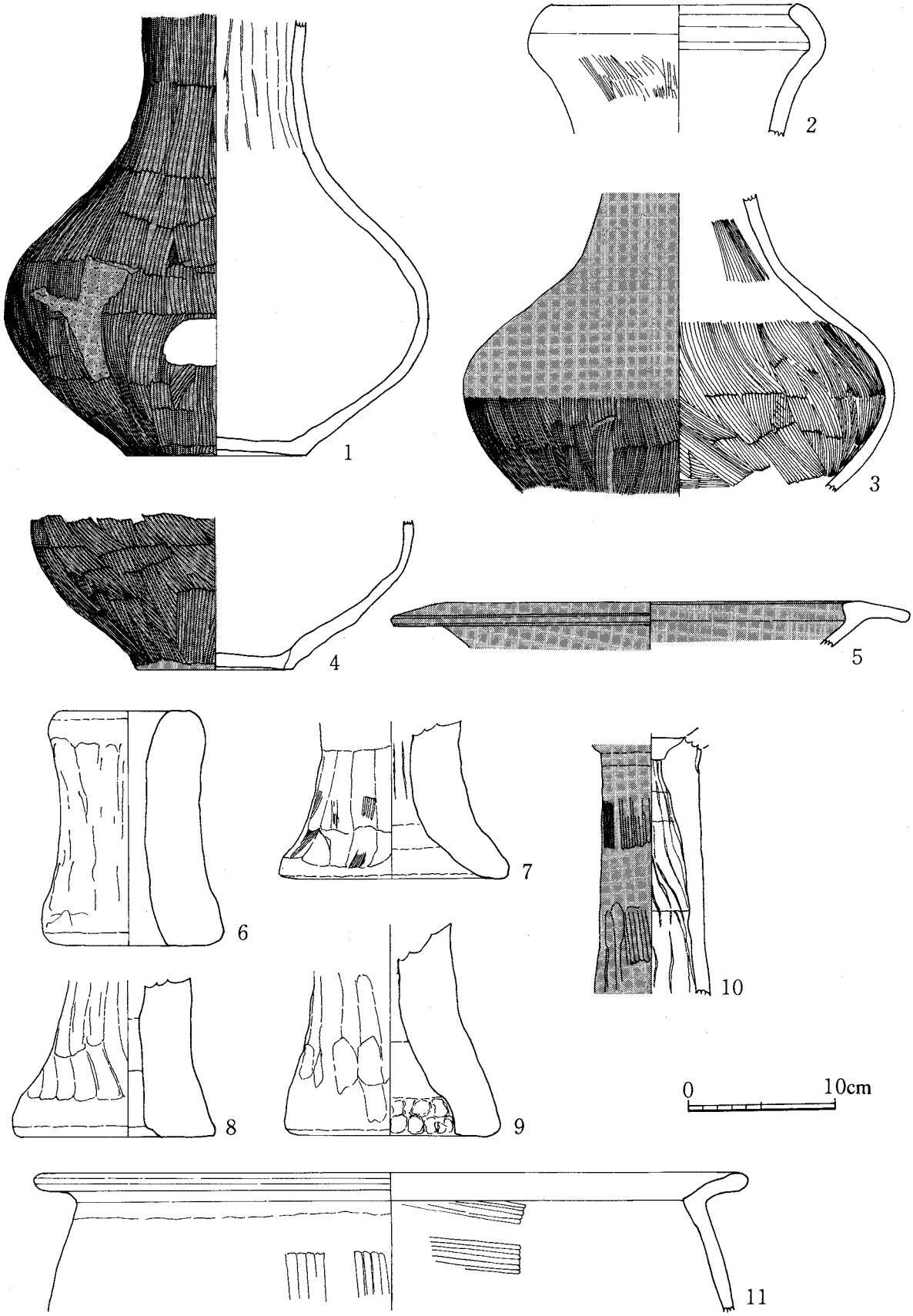


Fig.29　F−7b区　第2号竪穴出土遺物実測図Ⅰ

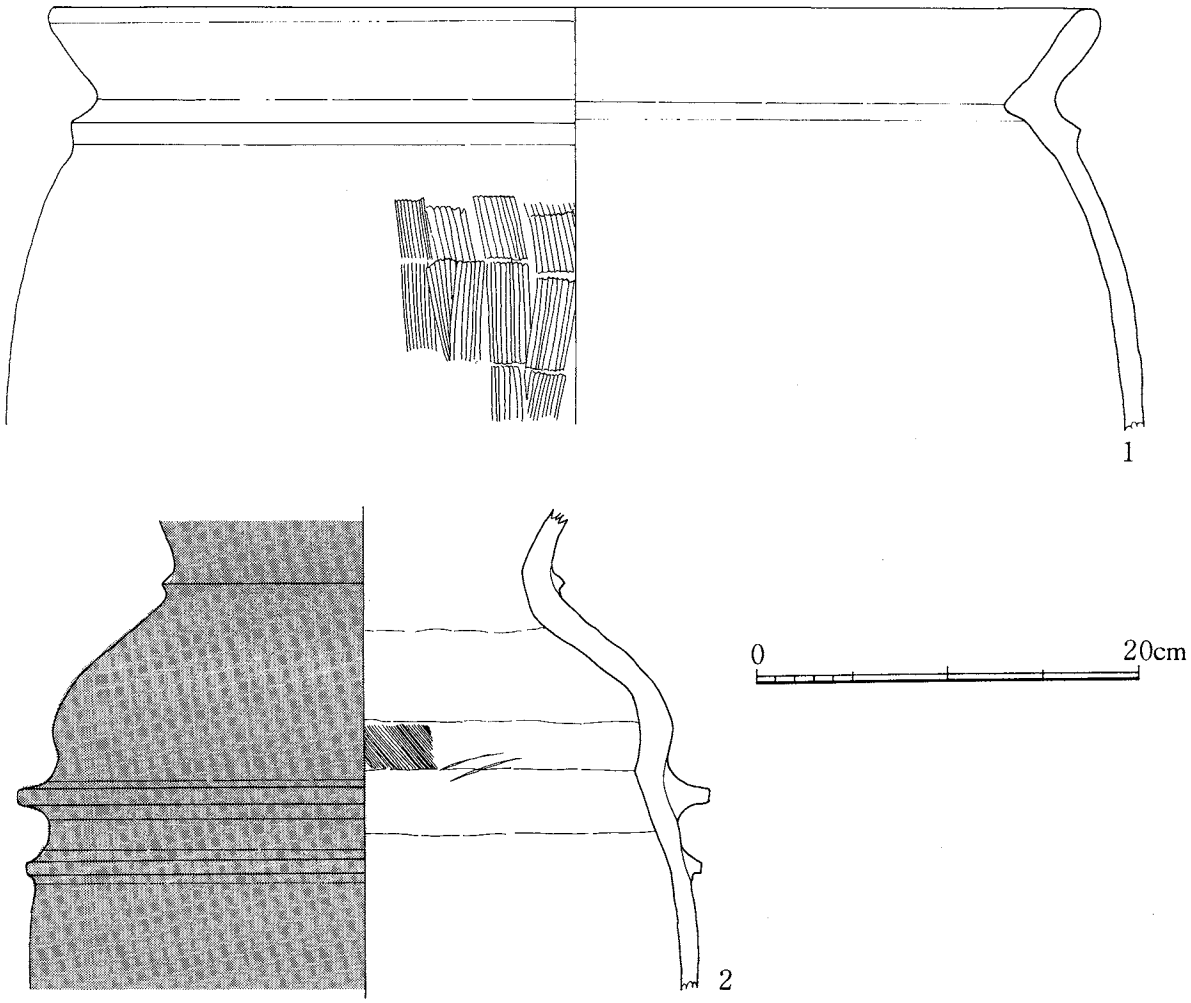


Fig.30　F−7b区　第2号竪穴出土遺物実測図Ⅱ

7は脚端部がやや拡がる。外面は指、ヘラによる調整で器面は凹凸が著しい。一部細い刷毛目痕が残るところがある。脚端径11.8㎝、8は脚端部がやや拡がるが、形状やつくりは6と同様で脚部は平坦である。脚端部径10.5㎝。9は脚端部がやや拡がる。形状的には6に近いが　指によって脚内側を拡げているので、6と7の中間の形状をなしている。脚端部径11.1㎝。いずれも器壁が厚く重たい。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を混入する。焼成は良好で6、9は黄灰色、7は黄白色、8は黒褐色をなす。11は甕形土器の口縁部である。口縁は屈曲し、くの字形をなす。口縁端部はやや肥厚し、丸くおさめる。口縁部内外面は横ナデ調整。胴部外面は縦位の粗い刷毛目調整。内面は横位の刷毛目調整が施される、胎土には石英、長石、赤色鉱物の砂粒を含むが良質、焼成は良好、黄褐色をなす。復原口径36.6㎝、Fig.30－1は大型の甕形土器の口縁部である。口縁部は屈曲し、外方に直線的のび、くの字形をなす。口縁端部はやや肥厚し、丸くおさめる。口縁直下に、断面三角形の突帯一条をめぐらす。口縁部内外面は横ナデ調整。外面の突帯以下は縦方向の刷毛目調整。口縁直下にススが付着している。胎土には石英、長石の砂粒を多量に含む。焼成良好。色調は外面が黒褐色、内面が赤褐色をなす。復原口径41.5㎝を測る。2は瓢形の土器である。口縁部と胴部下半を失う。頸部は外反しながらたちあがる。頸部と肩部の境に断面三角形の突帯一条をめぐらす。肩部の張りは小さく、本来の壺の姿をかろうじてとどめている。胴部上位に、断面形長方形のやや張り出した突帯とや

や小さい断面方形の突帯各一条をめぐらしている。上の大きい突帯が甕の口縁部となるところである。外面は丁寧な横ナデ調整で、丹塗りされている。内面は指による調整で指圧痕が残る。肩部はヘラナデ調整、胴部は横ナデ調整を加えている。胎土には石英、長石の砂粒を含んでいるが精良、焼成は良好、地肌は黄褐色をなす。復原頸部径 13.0 cmを測る。

（3） 3号竪穴と出土遺物

3号竪穴（Fig. 3 1）

調査区の北西部に確認した竪穴遺構である。西に 0.5 m離れて第2号竪穴がある。極めて近接しており、両者の間には有機的関連性が考えられる。同時併存は無理があり、非常に近い前後関係を考えることができる。南側がゴミ穴によって破壊され、西側も遺構の下半がゴミ穴によって破壊されているが、ほぼ全形を知ることができる。

東西径 83 cm、南北径 80 + α cmの不整楕円形プランをなす。壁は垂直に掘削され、深さは約 170 cm。鳥栖ローム層と八女粘土層の境が湧水点となり、その部分が大きく崩落している。崩落部は東西径 170 + α cm、南北径 173 cmの円形に拡大している。底はやや凹凸があるが、ほぼ平坦である。

底面に接して土器、木片が出土している。いずれも祭祀に使用されたものと考えられるが、その数は少ない。

出土遺物（Fig. 32）

壷形土器 7 個体がある。1 個体はほぼ完形であるが、他はいずれも破片である。6 は口縁部を欠失するので形状は明らかでないが他はいずれも袋状口縁をもつ。

1 は復原口径 10.2 cm。口縁部は丸味をもつ。口縁端部は平坦で、凹線一条がめぐる。口縁部内外面は横ナデ調整。外面と口唇部は丹塗りされている。2 は復原口径 10.6

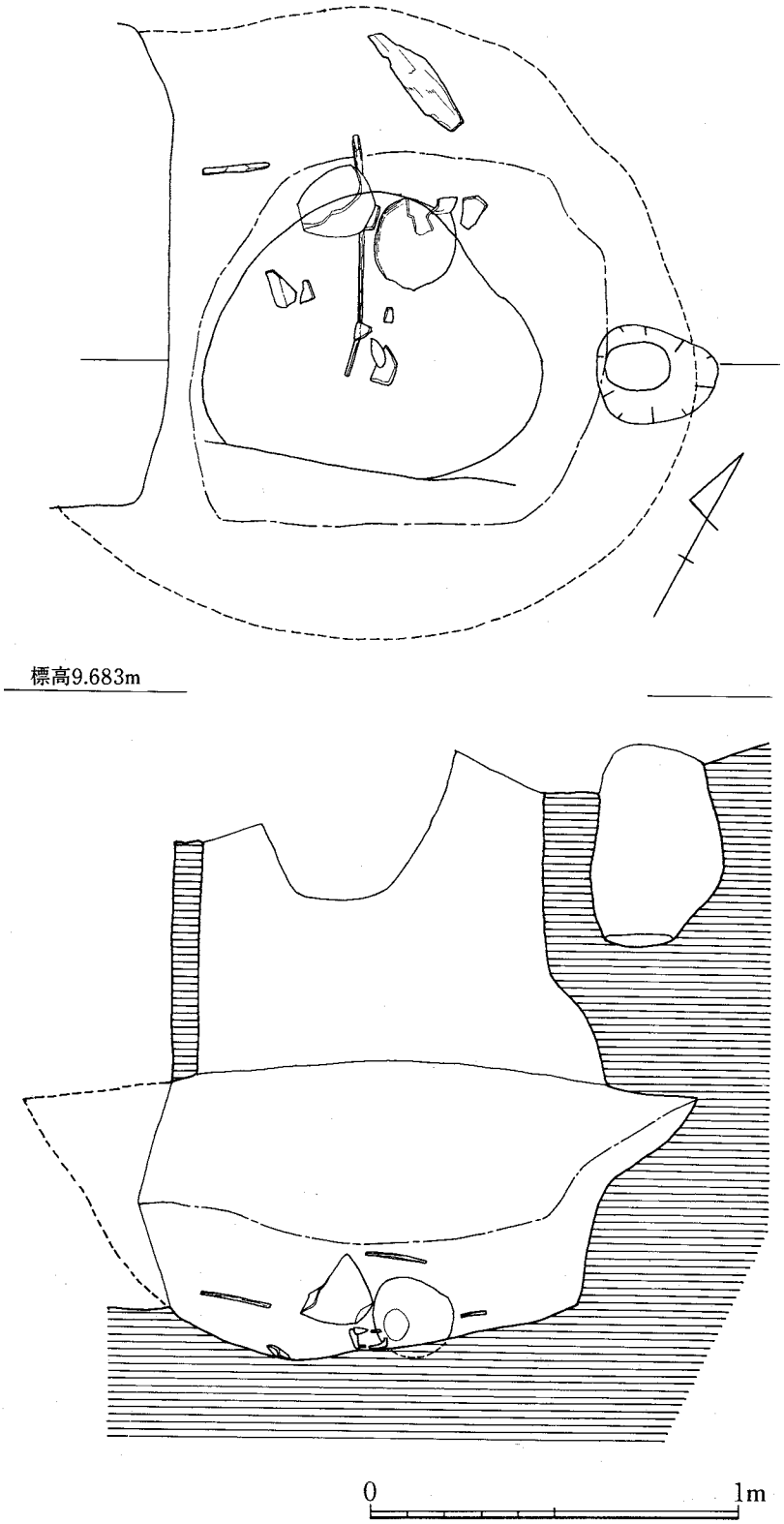


Fig.31　F−7b区　第3号竪穴実測図

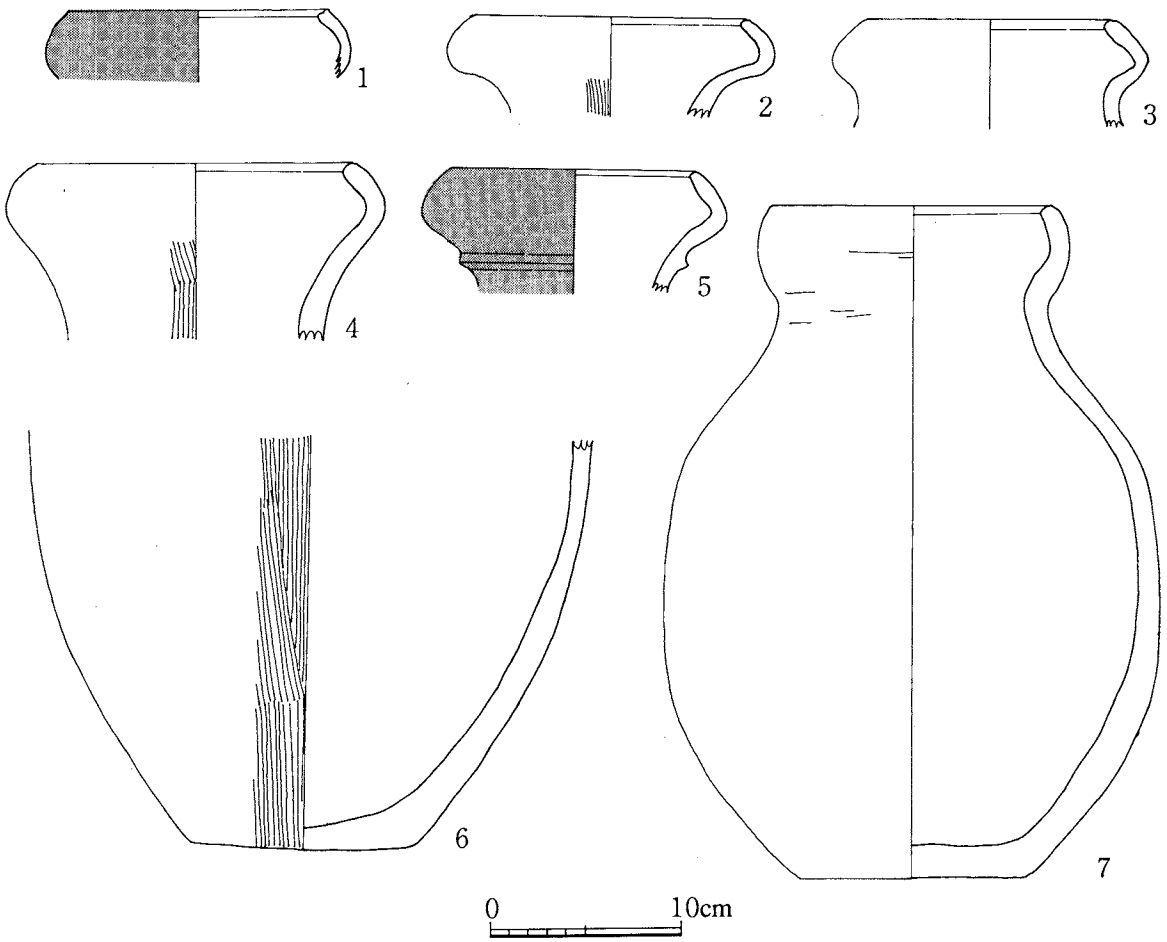


Fig.32　F−7b区　第3号竪穴出土遺物実測図

cm。袋状部は丸味をもつが、頸部で急にしぼまる。口縁端部は丸味をもつ。外面頸部には粗い刷毛目調整が縦位に施される。他は横ナデ調整。3は復原口径9.8cm、袋状部がやや丸味を失う、頸部はしぼまらず径が大きい。内外面共横ナデ調整である。4は復原口径12.6cm、口縁部は丸味をもつが、頸部と口縁部の境は不明瞭。口縁端部は丸くおさめている。頸部外面は粗い刷毛目調整が縦位〜斜位に施される。口縁内外面は横ナデ調整。頸部内側はナデ調整である。5は復原口径9.4cm。口縁端部は平坦に仕上げる。口縁直下に断面三角形の突帯一条をめぐらす。頸部はしぼまる。内外面共に横ナデ調整。外面は丹塗り磨研される。6は胴上半部より上を欠失する。安定した平底から体部はゆるやかにカーブを描き、たちあがる。上半部を欠失するため壷か甕かは即断できないが、一応、壷として取り扱う。外面には粗い刷毛目調整を斜位〜縦位に施す。内面は指とヘラナデによる調整。底部は丸味をもつ平底。底部径8.8cm、胴部最大径22.2cmを測る。1〜6は胎土に石英、長石の砂粒を混入する。1、5の胎土は他と比較して良質である。焼成はいずれも良好である。色調は1、2、4、5が淡褐色、3が灰褐色、6は外面が暗褐色、内面が黄褐色をなす。7は口頸部の一部を欠失するが、ほぼ完形である。安定した大きな平底で、体部はあまり張りのない長胴、頸部は内傾しながらすぼまり、ゆるやかな袋状口縁に移行する。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内外面は横ナデ調整。胴部外面は縦位のヘラナデによって調整している。内面はナデ調整である。胎土には石英、長石の砂粒が混入される。焼成は堅緻、黄褐色をなす。復原口径11.0cm、頸部径10.6cm、胴部最大径19.4cm、底部径8.8cm、器高26.5cmを測る。

（4）第1号地下式横穴と出土遺物

第1号地下式横穴（Fig. 33 － 1）

調査の西端中央部に検出した遺構である。掘立柱建物の南1.5 mのところに位置している。台地の周縁部であるため、F － 7 a区の地下式横穴に比較し残存状態は良好である。

竪穴は南北径105 cm、東西径は一部、天井部が崩落しているので定かではないが、80 cm前後と推測できる。平面プランは隅丸長方形になる。深さは125 cm。壁は本来垂直に掘削されているが、崩落によって凹凸が著しい。竪坑の埋土の状況は以下の如くである。第1層、暗褐色粘土層、部分的に鳥栖ロームのブロックを含む。厚さ約70 cm。第2層、淡い灰褐色粘質土層、軟質である。厚さ10～20 cm。第3層、黄～白色粘土層、厚さ5～10 cm。第4層、軟質の褐色粘土層、厚さ8～15 cm。第5層、黄色をおびた灰褐色粘土層、部分的に鳥栖ロームのブロックを含む。厚さ20～30 cm。いずれの層も水平に近い堆積である。玄室は竪坑よりさらに20 cm深くなり、竪坑と玄室の間には段が形成される。玄室の平面プランは不整の半月形をしている。竪坑側は2.17 m、ややゆがみがある。幅約1 m、竪坑側の逆の部分は円弧を描く。床面は平坦。奥壁はゆるやかな傾斜をもってたちあがり、床面より45 cmのところで直角にまがり、天井部にむかう。高さは約1.1 mを測る。

出土遺物（Fig. 33 － 2 ～ 4）

埋土中から出土した遺物の大部分は弥生式土器で、いずれも磨滅していて、流れ込みであることを示している。弥生式土器には中期～後期のものが含まれているが、いずれも小破片となっている。1点を図化した。この遺構を示すものとして、中国産の白磁器2個体がある。

2は後期の壷形土器口縁部である。二重口縁をなす。口唇部は平坦に仕上げる。屈曲部には棒状工

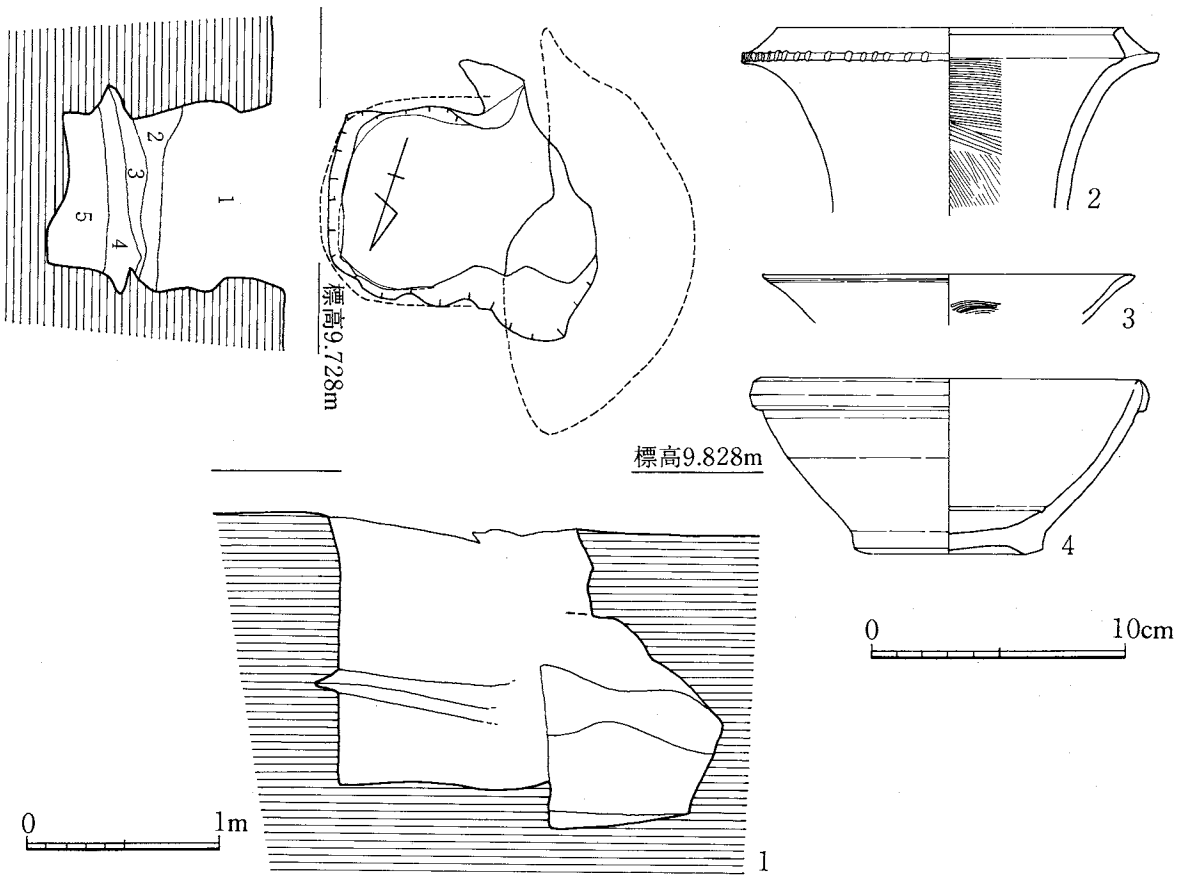


Fig.33　F－7b区　第1号地下式横穴・出土遺物実測図

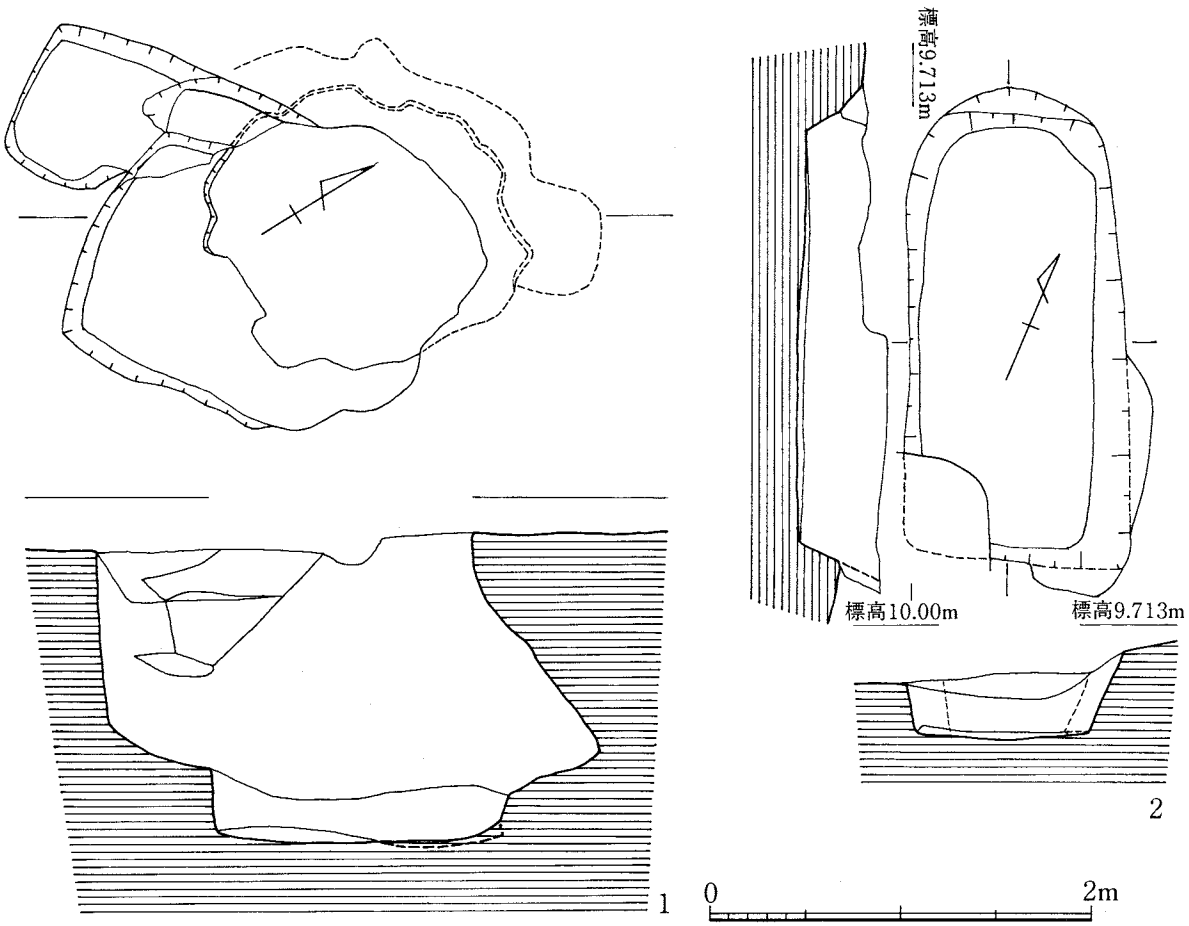


Fig.34　F−7b区　不明土坑･第1号土坑墓実測図

具によって刻目が付される。口縁部内外面は横ナデ調整。外面は器面が荒れていて調整痕は不明。内面には細い刷毛目調整を横位～斜位に施す。胎土は砂粒を混入するが良質。焼成はややあまく、保存状態も良くない。外面が黄白色、内面が赤褐色をなす。復原口径 13.6 ㎝を測る。3 は皿形品の口縁部破片。口縁端部は外反し、尖り気味におさめる。内側に櫛描きの文様がみられる。胎土は白色、全面に強い緑色の釉がかかる。復原口径 14.8 ㎝。4 は玉縁をもつ椀形品。底部は幅広い低い高台、体部はゆるやかに内湾しながらたちあがり、口縁部は肥厚し、幅広の玉縁をなす。見込みには沈線一条がめぐる。内面と外面の上半に灰色の釉がかけられ、底部は露胎である。口径 15.8 ㎝、底径 7.6 ㎝、器高 7.9 ㎝を測る。

（5）不明土坑（Fig. 34 − 1）

調査区の南側中央部に確認した遺構である。大型の遺構であり、一部がえぐり込んだようになっていて地下式横穴の天井部が崩落した可能性もあるが平面形からは地下式横穴とは認めがたく不明土坑とした。平面プランは 2.3 m× 1.6 mの不整楕円形。深さ 1.15 m、床面が一段深くなり、その部分は径約 1.5 mの不整円形で、約 35 ㎝深くなる。

（6）第 1 号土坑墓（Fig. 34 − 2）

調査区北側に確認した。3 号竪穴と重複関係にあり、3 号竪穴を切っている。長さ 2.5 m、幅 1.15 m掘の長方形プラン。深さ 30 ㎝、形状規模から土坑墓とした。時期不明。

（7）掘立柱建物

調査区西端中央部に確認した。1 間× 2 間の掘立柱建物。柱穴からは弥生式土器が出土している。

第５章　Ｆ－７c区の調査

１．調査区の位置

本調査区は板付５丁目３－26に所在する。板付遺跡の指定地域に南接して走る県道505号線調査区のＡ３、４区に南接した地域である。環濠より南に約30ｍ離れた所に位置する。調査区東側の南にＦ－７a区、西側の南にＦ－７b区が存在する。Ｆ－７c区は畑として利用されていたが、住宅の新築に伴い緊急調査を実施した。本調査区は袋状竪穴の残存状態からみてかなりの削平を受けている。表土（耕作土）の直下は鳥栖ローム層となっている。畑に利用されていたためか、うねの痕跡が溝状に残っている。

遺構は調査区の東西にまとまり、中央部には江戸時代以降の井戸１基と若干のピットに限られる。東側の遺構は弥生時代前期と中期の円形の袋状竪穴各１基が存在し、また、江戸時代の甕棺墓４基と時期不明の土坑１基がある。西側の遺構は竪穴住居址１棟と近世の井戸１基、若干のピットが存在する。竪穴住居址は削平のため、中央部のピットと周辺の柱穴が残るのみであるが、規模の想定は可能である。

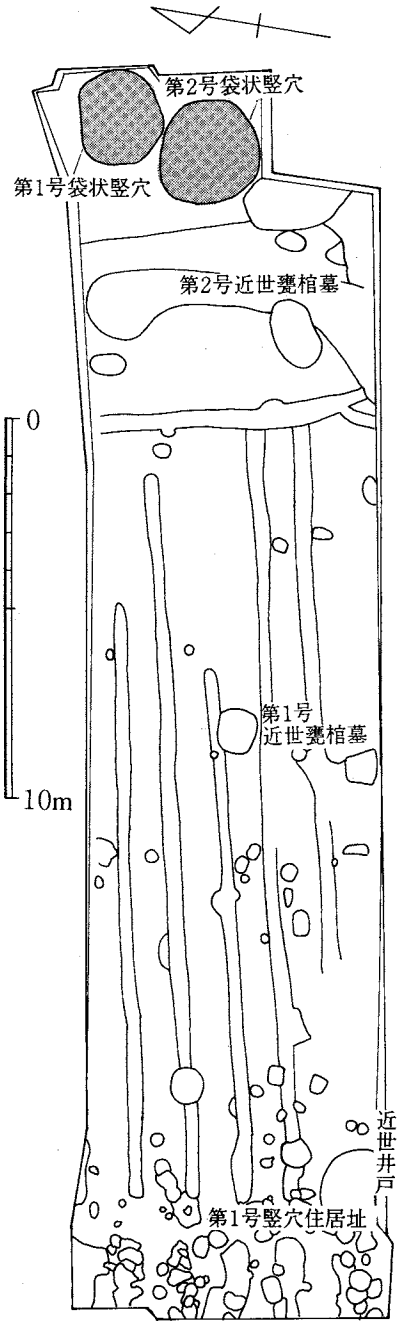


Fig.35　F−7c区全体図

２．遺構と遺物

（１）第１号袋状竪穴と出土遺物

第１号袋状竪穴（Fig. 36）

調査区の東端部において確認した袋状竪穴である。第２号袋状竪穴と約10㎝離れて南北に並列し、第１号袋状竪穴は北に位置している。袋状竪穴は削平され、かなり浅くなっていて、現状では110㎝を測るが、元来はさらに深いものであったと考えられる。検出面の平面プランは、東西径244㎝、南北径221㎝の不整円形である。壁は垂直あるいは若干袋状に掘り込まれる。底面は東側がやや深くなるが、ほぼ平坦である。床面は東西径247㎝、南北径230㎝の不整円形をなす。床面のほぼ東西南北の四隅に柱穴が掘り込まれている。東北部の柱穴は53㎝×28㎝の楕円形、深さ30㎝、東南部の柱穴は20㎝×23㎝の円形、深さ16㎝、西南部の柱穴は35㎝×23㎝の楕円形、深さ58㎝、西北部の柱穴は33㎝×18㎝の楕円形、深さ15㎝である。この袋状竪穴の上には小屋がけがおこなわれたことがわかる。この袋状竪穴の埋土は西側から

の流れ込みによる堆積土である。上から、第1層、褐色粘土層、厚さ10㎝前後、東壁側に部分的に堆積する。第2層、黒褐色粘質土層、厚さ5～10㎝。第3層、褐色粘質土層、厚さ5㎝前後。第2、3層は西半分に堆積する。第4層、暗褐色粘質土層、厚さ5～10㎝。第5層、黒色粘質土層、厚さ1～8㎝、部分によっては非常に薄い。第6層、黄褐色粘質土層、厚さ4～15㎝。第7層、黄褐色粘土層、厚さ6～15㎝。第8層、黒褐色粘質土層、部分的に鳥栖ロームのブロックを含んでいる。厚さ5㎝。第9層、暗褐色粘質土層、厚さ10㎝前後。第10層、黄褐色粘質土層、厚さ10㎝前後。第11層、褐色粘土層のブロックで厚さ10㎝前後。第4、7～11層は東半部に、第5、6層が西半部に堆積している。第12層は茶褐色粘質土層、厚さ10～30㎝、全面に堆積した土層である。第13層、暗褐色粘質土層、厚さ5～15㎝、第14層、暗褐色粘土層のブロック、厚さ10㎝前後。第13、14層は中央部に部分的に堆積している。第15層、黄褐色粘質土層、厚さ5㎝前後、西半部に堆積している。第16層、褐色粘土層、厚さ10～20㎝、全面に堆積する。第17層、中央部に薄く（1～3㎝）堆積する黒色粘質土層となっている。

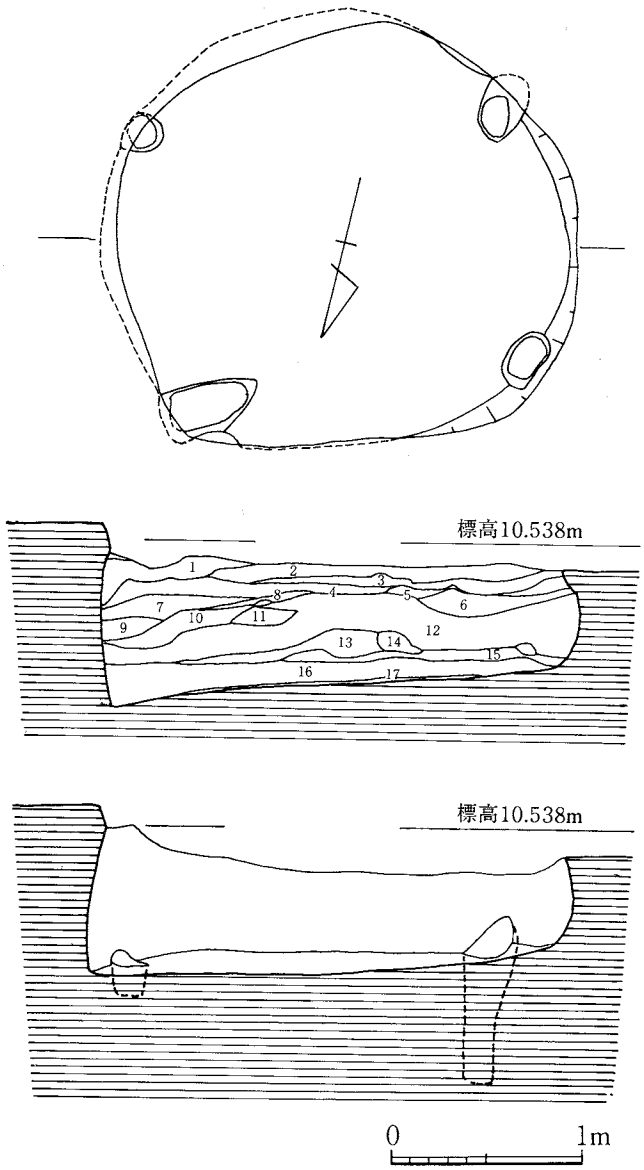


Fig.36　F−7c区　第1号袋状竪穴実測図

出土遺物（Fig. 37，38）

袋状竪穴から出土した遺物には土器、石器、石片、焼土等があり、総数654点が出土している。土器の大部分は小破片で図化できるものは少ない。石器には穿孔研磨具、石鏃がある。Fig. 37－1，2は小壺の口頸部破片である。復原口径10.2㎝、口縁部は肥厚し、ラッパ状に開き、口縁端部は丸くおさめる。口縁部と頸部の境は明瞭でない。保存状態が良好でないため器面調整は不明。胎土に砂粒を若干含むが良質、ただし、小壺の通常の胎土と比較するとややおちる。焼成は良好、赤褐色をなす。2は復原口径8.8㎝前後。口縁部と頸部の境は不明瞭、口縁部は肥厚しない。頸部と胴部の境の内側には粘土接合痕が段として残る。外面は横方向の刷毛目調整後、横方向のヘラ研磨調整。口縁内側も同様の調整である。頸部内側は指圧痕が残る。胎土は精撰され良質、焼成は良好、色調は内外面共赤褐色～黒褐色をなす。3～5は大型壺の破片、3は頸部～胴部の破片で、頸部と胴部の境に三本の沈線をめぐらす。外面はヘラ研磨調整、内面は指圧痕が縦位に残る。胎土に砂粒を多量に含む。焼成は良好、内外面共黒褐色をなす。4は胴部破片。細い沈線で無軸羽状文が描かれる。外面はヘラ研

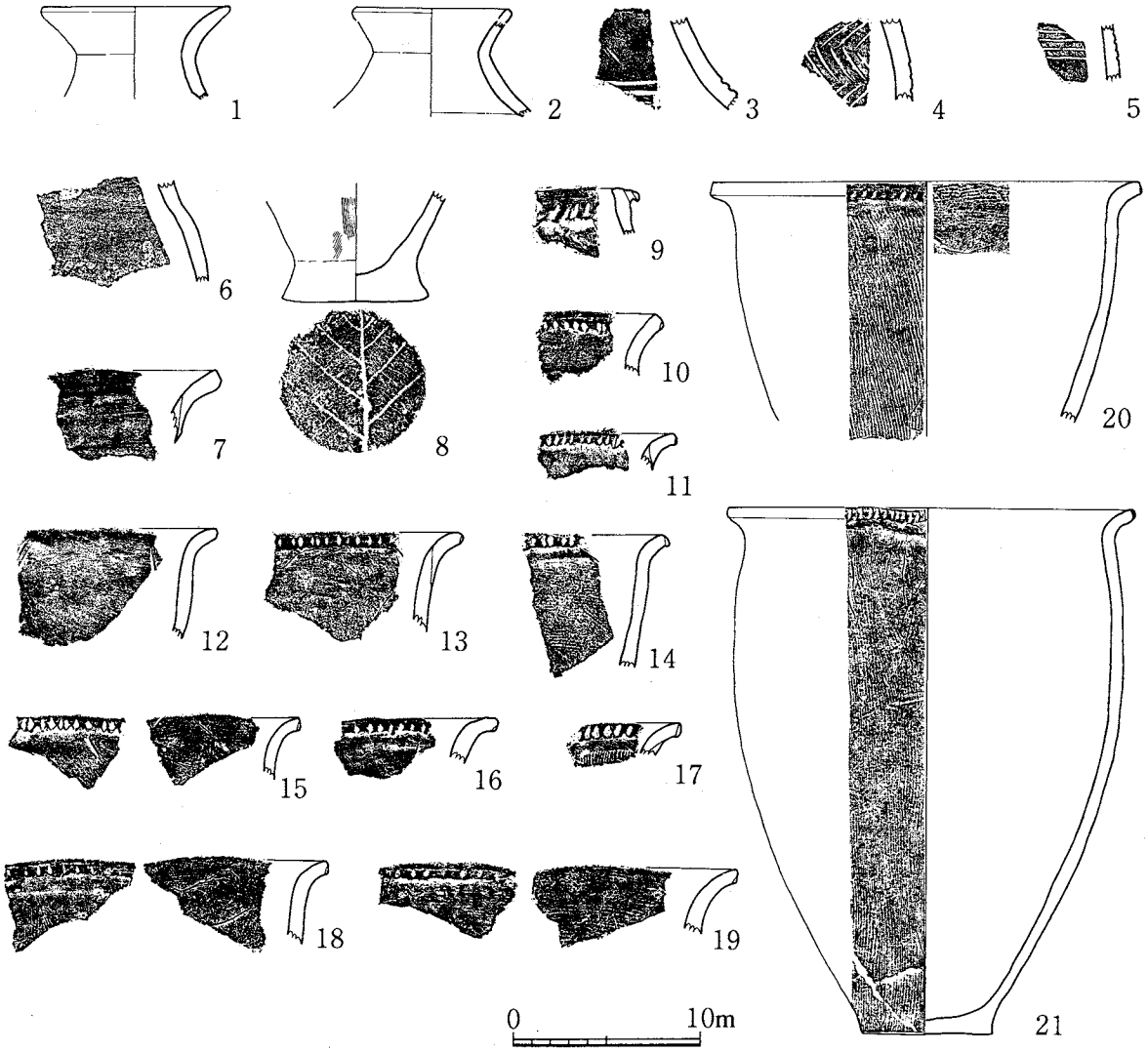


Fig.37　F−7c区　第1号袋状竪穴出土遺物実測図Ⅰ

磨、内面はヘラナデ調整。5も胴部破片、細い沈線で四本の平行線を入れる。内外面の調整は4と同様である。4，5共に胎土に若干の砂粒が含まれる。焼成良好。色調は4が赤黄色、5が白黄色である。6は夜臼式土器の壷形土器、頸部と胴部の境にわずかな段が形成される。外面は丹塗り磨研、内側はヘラナデ調整、胎土は砂粒を含むが良質、焼成は堅緻 、内面は黄褐色。7は黒色磨研の鉢形土器、胴上半で屈曲し、口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさめる。内外面共に横方向のヘラ研磨調整、胎土には多量の砂粒を含む。焼成は堅緻、内外面共黒褐色。8は突帯文土器の 甕形土器の底部、胴部は縦方向の刷毛目調整、底部は裾部が張り出し、台形状をなす。外底部には木葉痕が明瞭に残っている。底部径8.0㎝。胎土には砂粒を多量に含む、焼成は良好、色調は外面が赤褐色、内面は黒褐色。9は刻目突帯文土器、突帯は口唇部に貼り付けられる。ヘラ状工具で刻目が入れられる。内外面共に横ナデ調整、胎土にやや大き目の砂粒を多く含む。焼成は堅緻、内外面共に赤褐色。10、11は甕形土器、10は口縁部がわずかに外反する。口唇部は平坦に仕上げる。口唇部の外面に棒状工具によって刻目を入れる。内外面は横ナデ調整。胎土には多量の砂粒を含む。焼成は堅緻、外面は黒褐色、内面は赤褐色。11は如意形の口縁をなす口唇部全面にヘラによる刻目が施される。内外面共に横ナデ調整、胎土に多量の砂粒を含む。焼成は堅緻、外面は黒褐色、内面は赤褐色をなす。12は鉢形土器、口縁は大きく外反する。口縁端部は丸くおさめる。口縁直下に指圧痕が残る。内外面共にヘラナ

デ調整、胎土には砂粒を含む。焼成は堅緻、色調は二次加熱のため赤変し、外面は赤色、内面は赤～赤黄色をなす。13～21は如意形の口縁をもった甕形土器。13は口唇部は丸くおさめる。口唇部中央にヘラによる刻目を施す。口縁部内外面は横ナデ調整。外面には縦位の刷毛目調整、内面には指圧痕が残る。胎土には多量の砂粒を含む。焼成はややあまい。内外両面共黄白色をなす。14は口唇部は平坦で、口唇部いっぱいにヘラによる刻目が入れられる。外面は横方向の細い刷毛目調整、胎土は砂粒を多く含む。焼成良好、外面は褐色、内面は黄褐色、15は口唇部は平坦、下半にヘラによる刻目を入れる。口縁内外面は横ナデ調整、内側には指圧痕が残る。外面にはススが付着する。16は口唇部下半にヘラ状工具によって刻目を入れる。外面は縦位の刷毛目調整を施した後、横ナデ調整を加える。内面は横ナデ調整。17は口唇部全面に刷毛目原体で刻目が入れられる。外面には縦位の刷毛目調整、内面は斜位の刷毛目調整。18は口唇部は平担、口唇下半にヘラによる刻目を入れる。口縁内外面は横方向の細い刷毛目調整。胴部外面を縦位の細い刷毛目調整。19は口唇下半に棒状工具によって刻目をいれる。口縁部内外面は横ナデ調整、外面は保存状態が悪く調整痕は不明、内面は横方向の刷毛目調整。15～19は、胎土に多量の砂粒を含む。焼成は良好、色調は15が外面は黒褐色、内面は赤褐色、16が外面黄白色、内面赤褐色、17が外面黒褐色、内面黄褐色、18は内外面共に黄白色、19は外面赤褐色、内面赤褐色～褐色をなす。20は復原口径23.2㎝。口唇部は平坦、口唇部下半に棒状工具で斜位に刻目をつける。外面にはやや細い刷毛目調整が縦位に施される。内面は口縁部に横位の刷毛目調整を施し、胴部はヘラ研磨を施す。胎土には砂粒を含む、焼成は良好、色調は外面が褐色～黄白色、内面は灰白色をなす。21はほぼ全形を知ることができる。口唇部は平坦、口唇いっぱいにヘラで刻目を密に入れる。外面は縦位の細い刷毛目調整、内面は口縁部に横位の刷毛目調整、胴部は縦位のヘラナデ調整。口径22.2㎝、胴はあまり張らず、胴部最大径21.2㎝、底部径7.4㎝、器高28.6㎝を測る。胎土に砂粒を多く含む。焼成は堅緻、色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色をなす。

石器（Fig. 38）

2点がある。1は砂岩製の穿孔研磨具である。二次的に火を受け赤変している。頭部の一部を欠損するが、ほぼ完形である。体部は八角形の面とりがおこなわれている珍しい例である。穿孔具を回転棒に固定するための配慮と考えることができる。刃部には回転研磨痕が顕著に認められる。全長4.2㎝、体部長2.3㎝、刃部長1.9㎝、断面は体部が径1.9㎝の八角形、刃部が径1.4㎝の円形をなす。2は黒曜石製の打製石鏃、三角形をなし、丁寧に剥離を加えている。長さ1.3㎝、幅1.7㎝、厚さ0.4㎝を測る。

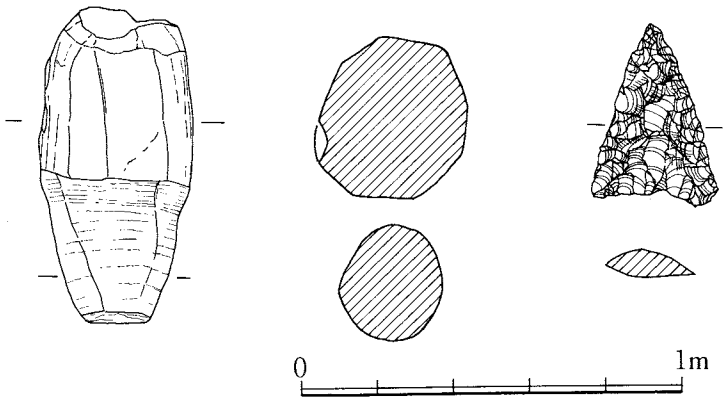


Fig.38　F−7c区　第1号袋状竪穴出土遺物実測図Ⅱ

（2）第2号袋状竪穴と出土遺物

第2号袋状竪穴（Fig. 39）

第1号袋状竪穴同様、調査区の東端部に確認した袋状竪穴である。第1号袋状竪穴の南側10㎝のところに位置している。袋状竪穴は削平され、浅くなり、現状で60㎝を測るにすぎない。検出面で

の平面形は、東西径276㎝、南北径253㎝の円形をなす。壁はほぼ垂直で、わずかに袋状をなす。底面は中央部がわずかに凹むが、ほぼ平坦である。床面は東西径282㎝で、南北径262㎝で、検出面より一まわり大きい相似形の円形プランをなす。

袋状竪穴の埋土は　北側からの流れ込みによる堆積土である。Fig. 39に示した土層断面図をみてみよう。上から、第1層、褐色粘質土層、厚さ7～20㎝、全面に堆積するが、南壁側が厚い。第2層、黄褐色砂質土層、厚さ10～15㎝。層の凹凸が著しい。第3層、茶褐色粘質土層、厚さ10～15㎝、北壁側に部分的に堆積。第4層、茶褐色粘質土器、厚さ5～20㎝。南壁側に傾斜し、南壁側に厚く堆積する。第5層、褐色粘質土層、厚さ5㎝前後、南壁側に部分的に堆積。第6層、黄褐色粘質土層、厚さ5㎝前後。第7層、黒色粘質土層、厚さ3～10㎝、第8層、茶褐色粘質土層、厚さ13㎝前後。第9層、暗褐色粘質土層、厚さ7～10㎝。第6～9層は北から南に傾斜し、北壁側に部分的に堆積する。第10層、黒褐色粘質土層、厚さ1～15㎝。全面に堆積するが、特に北壁側に厚く堆積する。以上の土層断面は、明らかに埋土の大部分が北壁から流れ込んだことを示している。

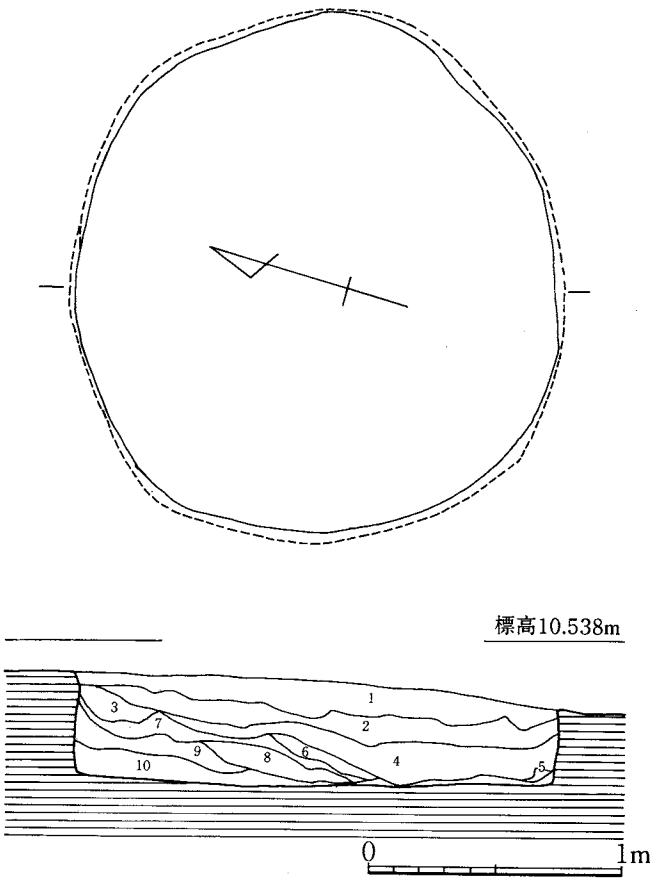


Fig.39　F−7c区　第2号袋状竪穴実測図

出土遺物（Fig. 40）

袋状竪穴から出土した遺物には土器、石器、石片等があり。総数958点が出土している。土器は器形がわかるものを図示した。石器には石鏃がある。 Fig. 40 − 1は壷形土器である。やや扁平な球形の胴部、頸部は強く屈曲したちあがり、口縁は大きく外反する。口縁端部は平坦に仕上げ、凹線一条をめぐらす。外面から口縁部内面は横方向のヘラ研磨調整。復原口径14.2㎝、頸部径10.1㎝、胴部最大径17.0㎝を測る。胎土には石英、長石等の砂粒を多量に含む。焼成は良好で黄白色をなす。2は大型の広口壷の口縁～頸部の破片。口縁部は鋤先形口縁をなす。口縁端部は平坦に仕上げ、凹部一条をめぐらす。口縁部内外面は横ナデ調整、頸部外面は縦位のヘラナデ調整。頸部内面は横位のヘラ研磨調整。胎土には砂粒を混入するが良質、焼成は堅緻で赤黄白色をなす。復原口径28.2㎝を測る。3は逆L字形口縁の甕形土器である。口縁端部は丸くおさめられる。胴上半部に断面三角形の突帯一条をめぐらす。口縁部上面はヘラ研磨調整、ススが付着している。外面は横位のヘラナデ調整とみられるが判然としない。胎土には多量の砂粒を混入。焼成は堅緻、色調は、強い二次加熱を受け全体の内外面は赤色、紫色、桃色に変色している。器壁も剥離が目立つ。復原口径18.2㎝を測る。4～7も逆L字形口縁をもった甕形土器である。口縁形態はそれぞれ若干の差異をみせるが口縁端部を丸く仕上げるのは共通している。4は口縁部は横ナデ調整、胴外面は縦位の刷毛目調整が丁寧に施される。器面が荒れており詳細は不明。胎土には小さな砂粒を多量に混入、焼成は良好、色調は内外面

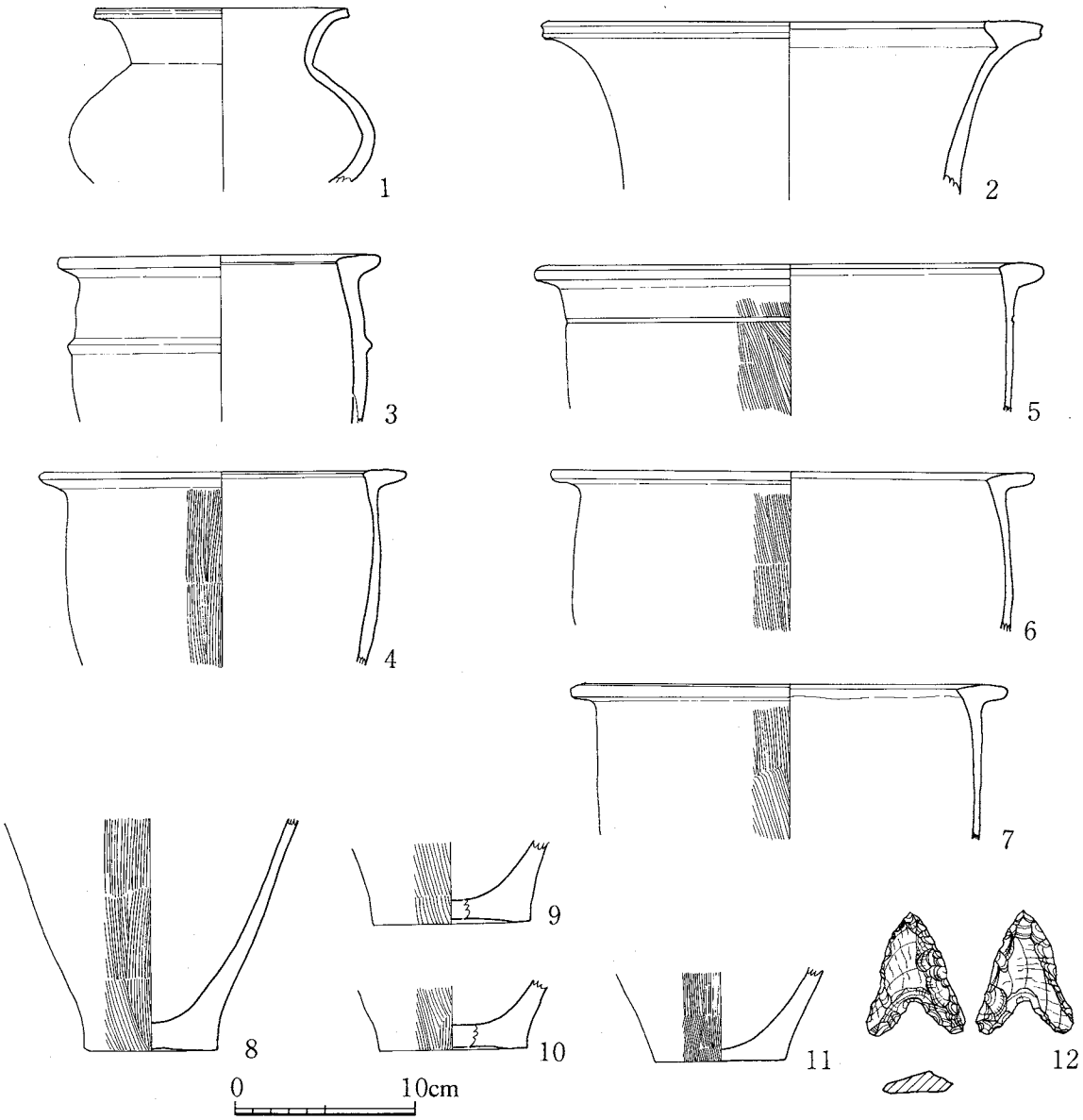


Fig.40　F−7c区　第2号袋状竪穴出土遺物実測図(12は実大)

共に白灰色をなし、一部に黒斑がみられる。復原口径20.6 cm。5は口縁端部を平坦に仕上げようとしており、やや他と異なる。口縁下に沈線一条をめぐらす。口縁部は横ナデ調整、外面は縦位〜斜位の刷毛目調整痕、内面には指圧痕が残る。胎土には細い砂粒を多量に含む。焼成は良好、内外面共に赤褐色をなす。復原口径28.4 cmを測る。6は外面に縦位のやや粗い刷毛目調整を加えた後、胴上半からは口縁部にかけて横ナデ調整を加えて、刷毛目痕を消している。胎土には細い砂粒を多量に混入しているが良質、焼成は堅緻、内外面共に黄白をなすが、内面の一部は黒く変色し、その周辺部が赤変している。復原口径27.2 cmを測る。7は外面に縦位のやや粗い刷毛目調整を加える。口縁部内外面は横ナデ調整。口縁下の内面には指圧痕が残る。胎土には若干砂粒を含む、焼成は堅緻、外面は黒灰色、内面は黒褐色をなす。復原口径24.4 cmを測る。8〜10は底部破片である。底部はいずれもわずかにあげ底状になるが、ほとんど平坦である。8は底径7.6 cm、体部は外傾しながらたちあがるが、大きく張らない。外面にはやや粗い刷毛目調整が縦位に施される。胎土には砂粒を含む。焼成は堅緻、

色調は強い二次加熱のため桃色、黄色、紫色に変色している。先の3と同様であり、後で使用目的等について検討を加える。9は外面に粗い刷毛調整を縦位に施す。内面は二次加熱のため変色。復原底部径8.9㎝。外面は赤黄色、内面は赤桃色、10はやや粗い刷毛目調整を縦～斜位に施す。内外面共赤褐色をなす。復原底部径8.3㎝。11は底部径7.4㎝、外面には細い刷毛目調整を縦位に施す。外面は黄褐色、内面は黒褐色、9～11は共に胎土に多量の砂粒を含む。焼成良好。石器は石鏃1点がある。古胴輝石安山岩製の打製石鏃、基部の抉りはやや深い。長1.7㎝、幅1.4㎝、厚0.3㎝を測る。

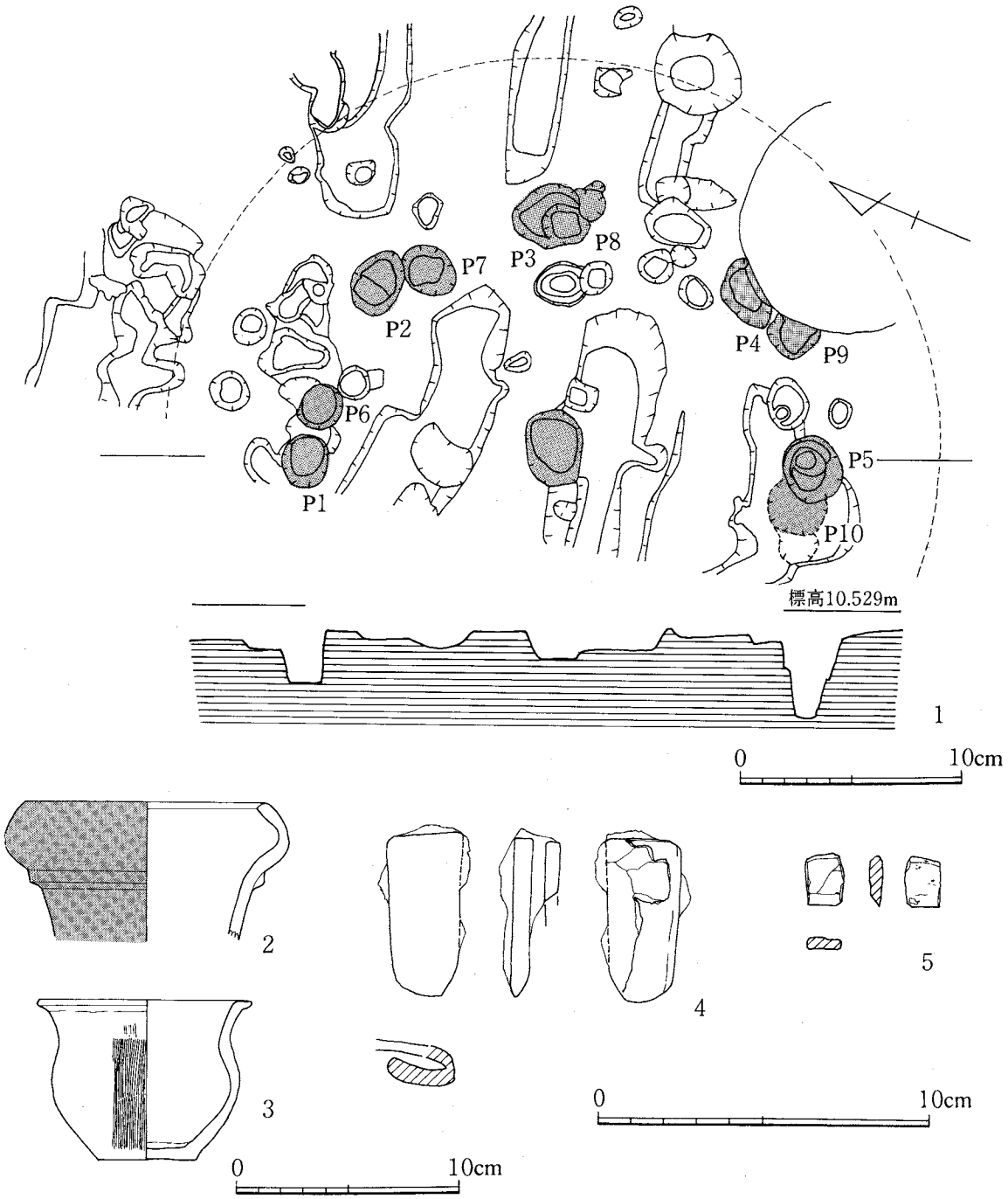


Fig.41　F−7c区　第1号竪穴住居址・出土実測図

（3）第1号竪穴住居址と出土遺物

第1号竪穴住居址 (Fig. 41)

調査区の西端に確認した住居址である。削平が著しいために、すでに竪穴は失われ、柱穴の存在によってかろうじて竪穴住居址の存在が確認できる。それも、台地の落ち際の斜面に位置しているために、削平が比較的少なかったことによって残ったものである。住居址として遺存している遺構は中央ピットとそれを囲む5個の柱穴である。中央ピットは70 cm×52 cmの楕円形プランで、深さ20 cm、柱穴は北西端からP1、P2としていくと、P1は径40 cm、深さ38.5 cm、P2は径48 cm、深さ57.5 cm、P3は径58 cm、深さ42 cm、P4は径54 cm、深さ54 cm、P5は径57 cm、深さ34 cmを測る。また、これら柱穴と重複しながら、P6～P10が存在する。P6は径38 cm、深さ45.5 cm、P7は径45 cm、深さ38.5 cm、P8は径30 cm、深さ68.5 cm、P9は径45 cm、深さ55.5 cm、P10は径55 cm、深さ48.5 cmを測る。重複関係ではP1～P5がP6～P10を切っている。柱穴の状態からすると、この住居址は二回の建替えが考えられる。壁は完全に削平されているが、柱穴等の配置からすれば、径7.0 m前後の円形プランの竪穴住居址が想定できる。

出土遺物 (Fig. 41－2～5)

竪穴住居址に伴う遺物は中央ピット、柱穴から出土した土器、鉄器、石器がある。点数はきわめて少ないが、鉄器と石器の組み合わせなど重要な問題を提供している。土器はピット5の掘り方埋土から出土し、1点は完形品であり、意識的に柱の脇に埋納したものである。また、鉄器と石器は中央ピットの埋土中より出土した。

Fig. 41－2は袋状口縁の壷形土器。頸部から口縁にかけての破片である。口縁は袋状をなし、口縁端部は平坦に仕上げる。口縁直下に断面三角形の突帯一条をめぐらす。外面は丹塗り磨研、内面にも丹塗りが認められる。復原口径10.8 cm。胎土には砂を混入、焼成は良好、丹塗りの下の地は褐色をなす。3は小型の広口壷である。口縁の一部を欠くがほぼ完形である。安定した平底で、胴部はあまり膨らみをもたない。胴部と頸部の境は明瞭でない。頸部は外傾気味にたちあがり、口縁は大きく外反する。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。全体に指による調整が加えられ、凹凸が著しい。胴部外面には縦位～斜位の刷毛目調整が加えられる。口縁径9.7 cm、頸部径7.8 cm、胴部最径8.5 cm、底部径4.5 cm、器高7.2 cmを測る。胎土には小さな砂粒を含むが良好。焼成は良く、色調は淡茶褐色をなす。3は鉄器の破片である。破損しており全形を知ることはできない。折り曲げた部分が観察できるので鉄斧あるいは鋤先ではないかとみられる。現存長5.0 cm、幅2.4 cm、厚さ0.5 cm、5は超小型の扁平片刃石斧である。白色の粘板岩を素材として全体に丁寧な研磨を加えて整形している。長1.6 cm、幅1.1 cm、厚さ0.4 cmを測る。

（4）近世井戸 (Fig. 42－1)

調査区の西端部近くの南側において検出した遺構である。一部、弥生時代の竪穴住居址と重複関係にあり、竪穴住居址の柱穴を切っている。遺構は掘り方と井筒部に分かれている。掘り方は東西径2.24 m、南北径1.90＋αmの円形プランをなすが、南側は一部調査区外にのびている。掘り方の壁は傾斜をもって掘り込まれているが、地表下約1mまで発掘したにすぎない。井筒は掘り方のほぼ中央に構築されている。瓦を積みあげてつくられた井筒で、確認面では径70 cmの円形、下方にいくに従い径は小さくなる。4段目（約1m）まで確認したが危険のため調査を中断した。4段目の径は約60 cmを測る。

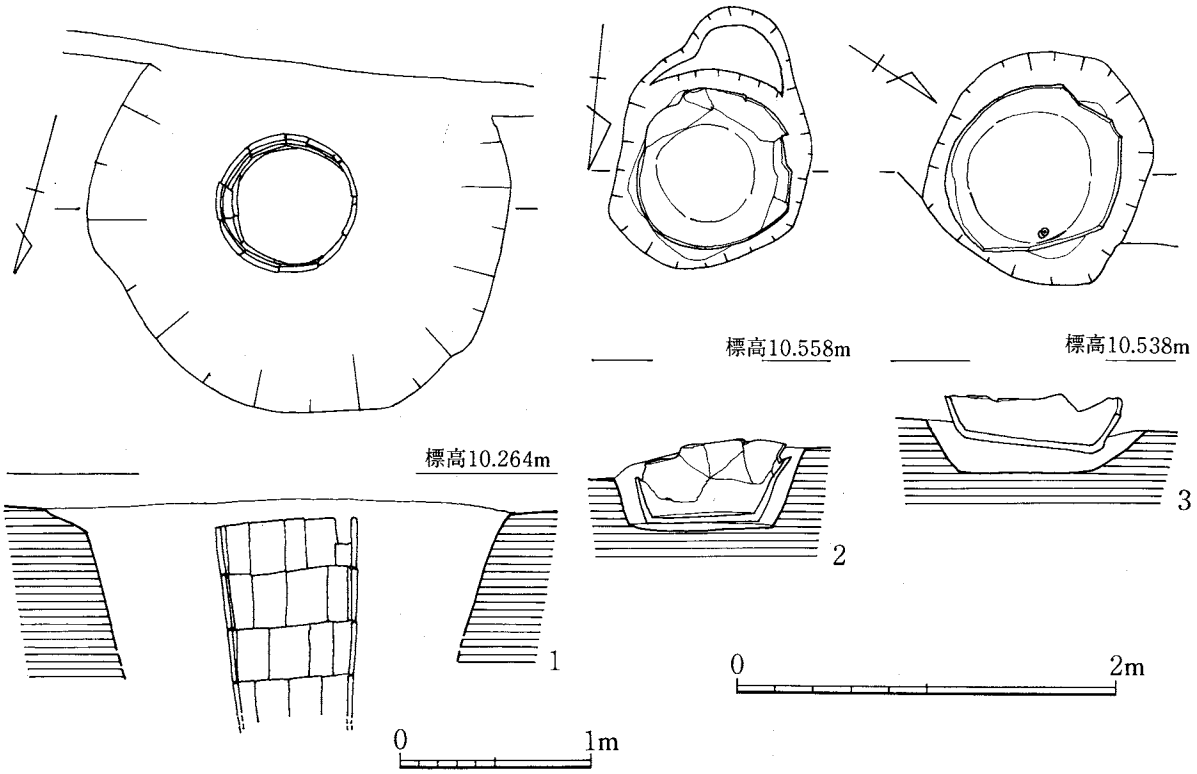


Fig.42　F−7c区　近世井戸･近世甕棺墓実測図

（5）近世甕棺墓

調査区の東半部に確認した。4基を確認したが、いずれも残存状態が悪い。2基を図示する。第1号近世甕棺墓は調査区の中央部において確認した。東西径62㎝、南北径56㎝の不整円形プランの墓坑で、深さ14㎝、甕棺は直立した状態で埋置してある。削平が著しく、底部を残すのみである。これらの甕棺によって、調査区の削平が近世以降におこなわれたことがわかる。甕棺は瓦質の土器、底部径36㎝の安定した平底をなす。内底部には寛永通宝1枚と数枚の鉄銭が重なりあって出土した。六文銭の一部と思われる。第2号近世甕棺墓は調査区の北半部、南側に確認した。第1号近世甕棺墓と約9m離れている。墓址は東西径50㎝、南北径72㎝の不整楕円形プランをなし、二段に掘り込まれている。深さ22㎝。甕棺は墓坑いっぱいに直立して埋置されている。甕棺は瓦質の土器で、径30㎝の安定した平底をなす。削平が著しいのは第1号近世甕棺墓同様である。この他、2基の甕棺墓を確認したが、いずれも、その存在がわかるだけで原形をとどめない状態まで破壊されている。

第6章　若干のまとめ

本報告書に収録した調査区は、F－5c区、F－7a区、F－7b区、F－7c区の4ヶ所である。いづれの調査区も、板付中央台地の史跡指定地に隣接した地域である。F－5c区は北側、他は南側に接した位置を占める。板付遺跡の主要部分を構成する重要な地域である。以下、調査成果にもとづき、若干の問題点を提起し、まとめにかえたい。

1．袋状竪穴について

弥生時代の貯蔵穴である袋状竪穴は、今回は5基を調査した。時期別の内訳は前期3基、中期2基である。いずれも円形プランに近く、明確に方形ないし長方形プランを示すものはない。F－7c区検出の前期の1基には、竪穴内に四箇のピットが掘り込まれ、貯蔵穴上に構築物があったことがわかる。今回検出した貯蔵穴は、環濠外の南側に拡がる貯蔵穴群の南限、西限をはっきりさせる成果を得ることができた。その意味は大きい。板付遺跡における日常的な活動は環濠内はもちろんであるが、環濠外の南側でおこなわれたことを知ることができた。出土遺物にも注目されるものがある。前期の袋状竪穴から出土した土器の一群は、板付Ⅰ式土器の伝統を強く残した小壺が伴ない、板付Ⅰ式土器以降の小壺の展開を知る上で重要である。また、中期の袋状竪穴から出土した強い二次加熱を受けて変色した甕形土器の存在は、その使用目的が注目される。同時に炉壁状のものも出土している。土器の状態からすれば、製塩に使用された可能性があるが、この問題については今後の検討が必要である。稿を改めて論考する。

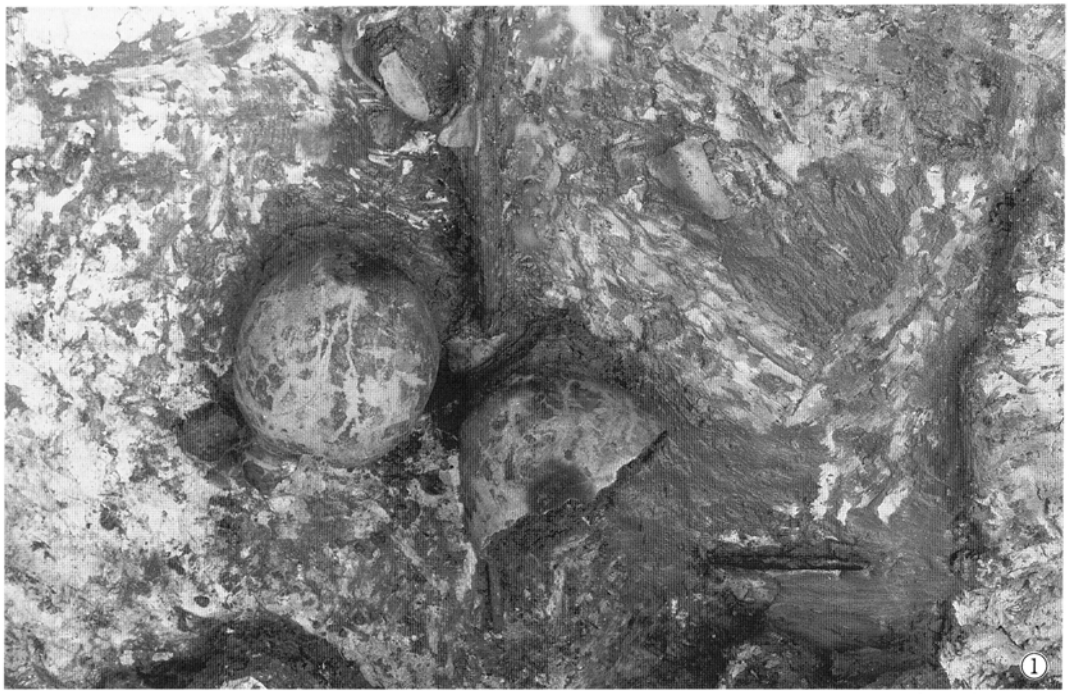
2．井戸について

弥生時代の井戸は、今回は5基を調査した。時期別の内訳は中期後半2基、後期3基である。これまで、板付遺跡においては10数基の井戸が調査されている。今回の調査で注目されるのは後期の井戸である。後期の井戸は今回調査した3基とF－5a区で検出した1基の計4基が確認されている。いずれも環濠北側に検出したものである。指定地内の井戸については完掘したものは少なく、実態は明らかではないが、少なくとも後期段階にはこれまで集落のみられなかった板付中央台地北側まで集落が拡大していたことを示していると理解される。また、今回検出した井戸の構造も注目される。板付遺跡で検出したこれまでの井戸は、通常の場合、湧水点が鳥栖ローム層と八女粘土層の境と八女粘土層を抜いた砂礫層の二点であり、鳥栖ローム層と八女粘土層は湧水のために大きく崩落し、層の境界付近は大きく拡大している。これに対し、今回検出した後期の井戸には鳥栖ロームと八女粘土層の間の崩落は認められず、壁は整然としている。これが何を意味しているかは今後の検討が必要であるが、少なくとも天候の状況を反映しているとみることができるし、また、その使用期間の長短に関係するとみることができる。もし、天候が関係しているとすると、その変換時期は同じ後期でも、F－5a区検出の井戸と今回検出の井戸との間にもとめることができる。弥生時代の井戸は那珂・比恵でも多数検出されており、同様の現象が他地域で認められるかは今後の検討課題としておく。

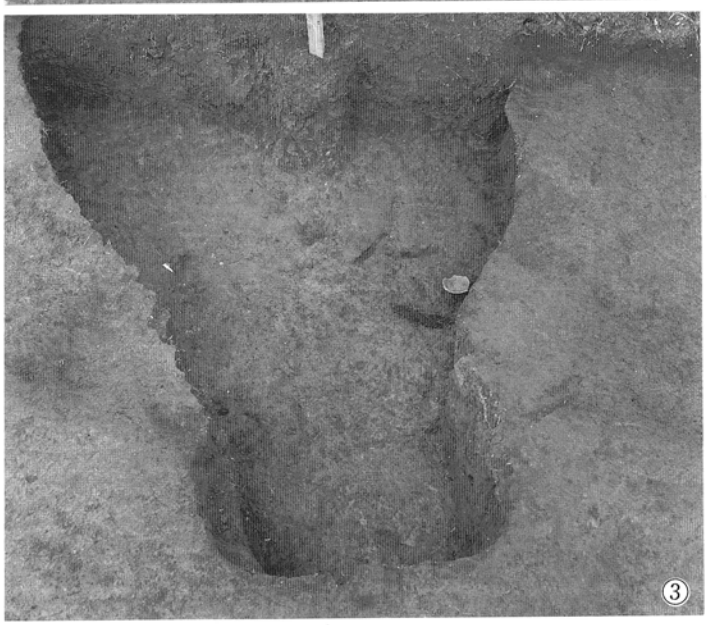
図　版

PLATES

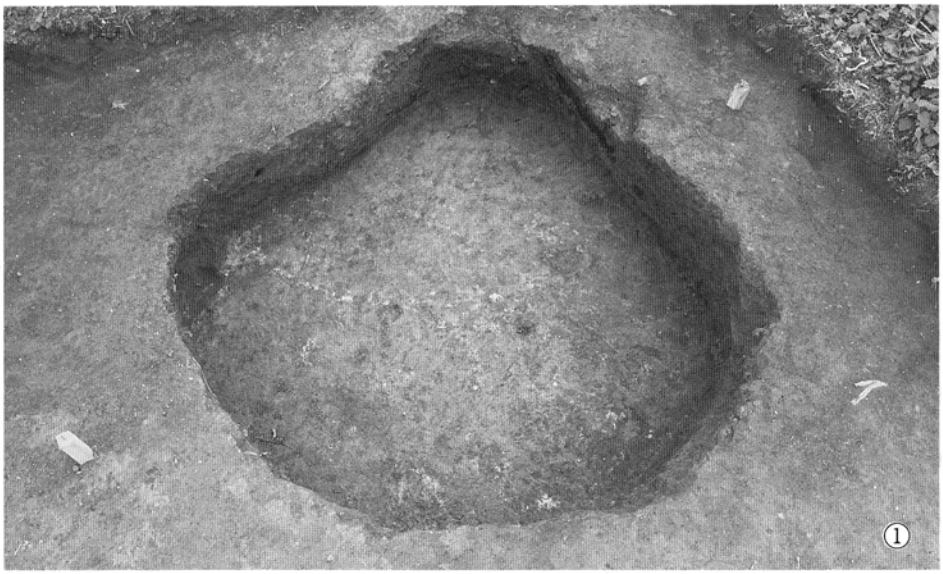
① F−5c区　全景
② F−5c区　A溝
③ F−5c 区　A溝下駄出土状況



① F−5c区　1号竪穴遺物出土状況
② F−5c区　3号竪穴遺物出土状況
③ F−7b区　3号竪穴遺物出土状況



① F−7a区　全景
② F−7a区　第1号地下式横穴
③ F−7a区　第2号地下式横穴



① F−7a区
第2号袋状竪穴

② F−7a区
第2号袋状竪穴断面

③ F−7a区
第1号袋状竪穴

① F−7b区全景(西から)
② F−7b区(南から)
③ F−7b区　第1号地下式横穴

① F−5c区　第4号竪穴遺物出土状況
② F−7b区　第2号竪穴遺物出土状況（Ⅰ面）
③ F−7b区　第2号竪穴遺物出土状況（Ⅱ面）

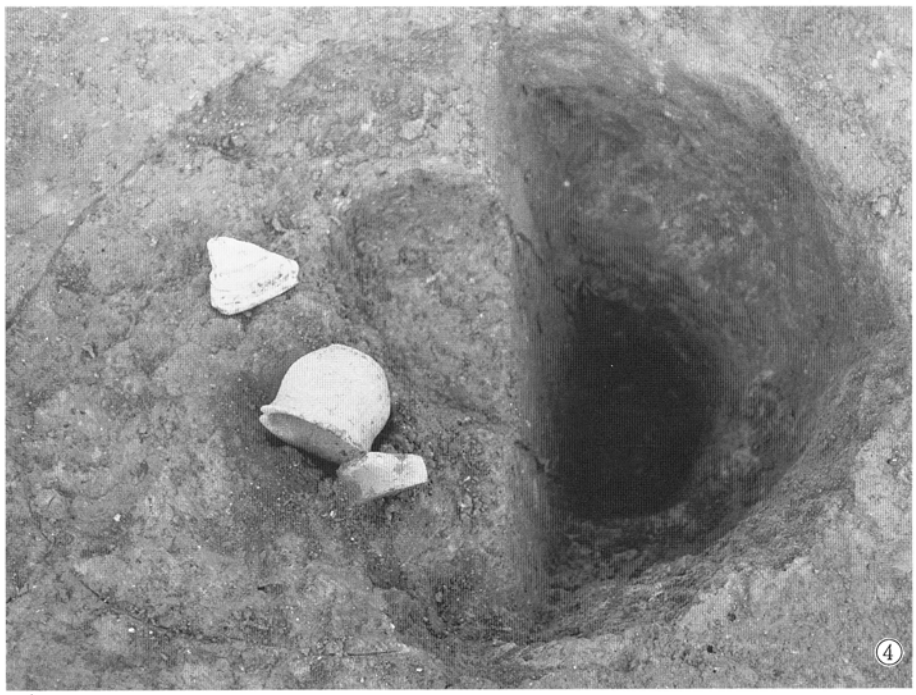
① F−7c区全景

② F−7c区　第1号竪穴住居址

① F−7c区
第1号竪穴住居址

② F−7c区
第1号竪穴住居址中央
ピット遺物出土状況
(扁平片刃石斧)

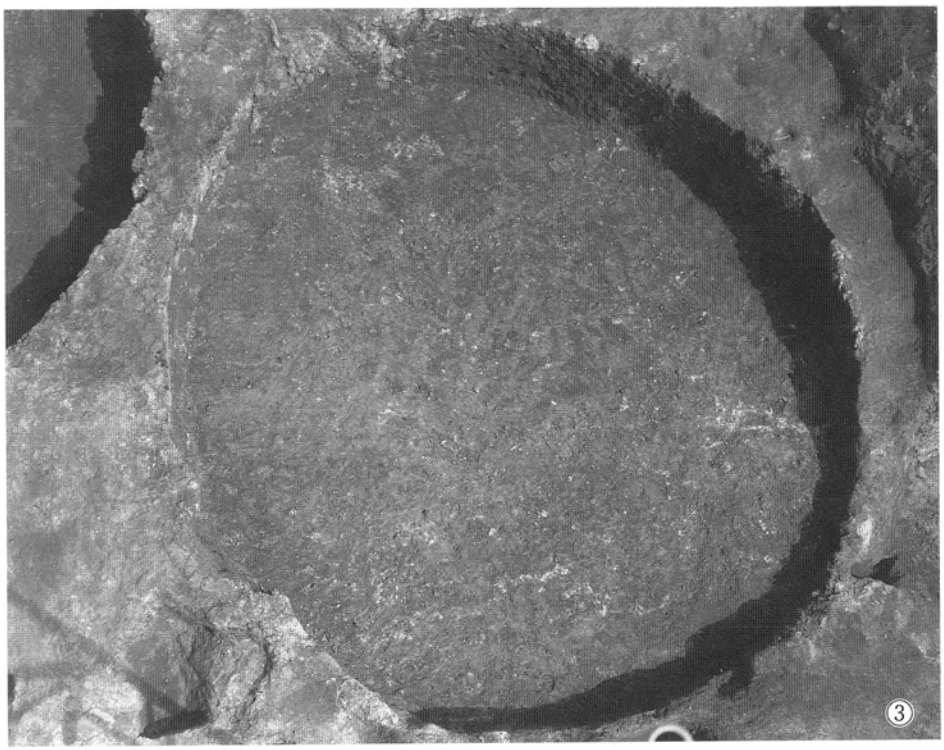
③ F−7c区
第1号竪穴住居址中央
ピット遺物出土状況(鉄斧)



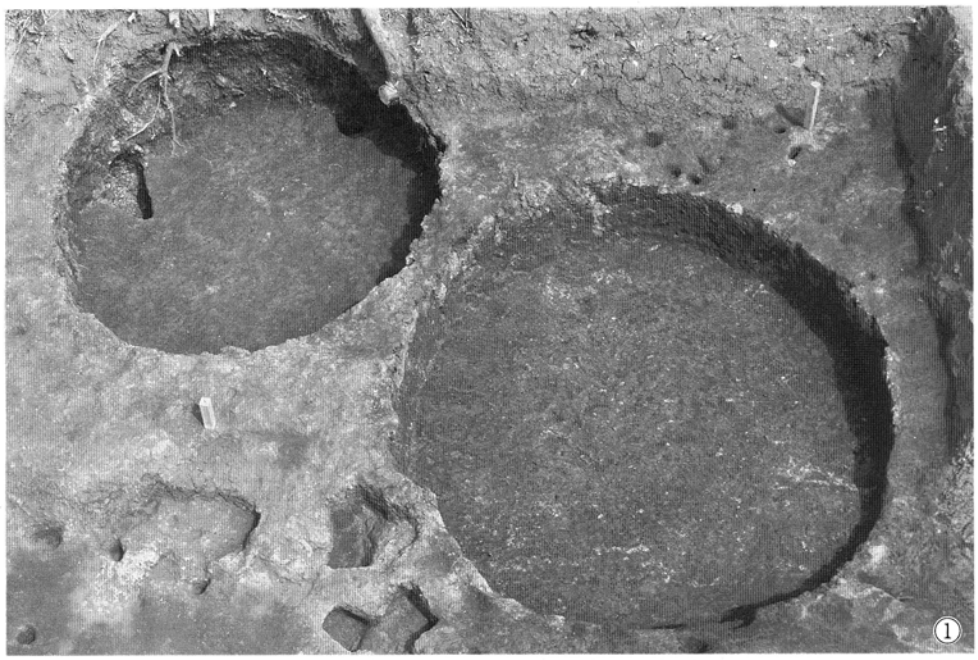
④ F−7c区
第1号竪穴住居址柱穴
遺物出土状況

① F−7c区
第1·2号袋状竪穴

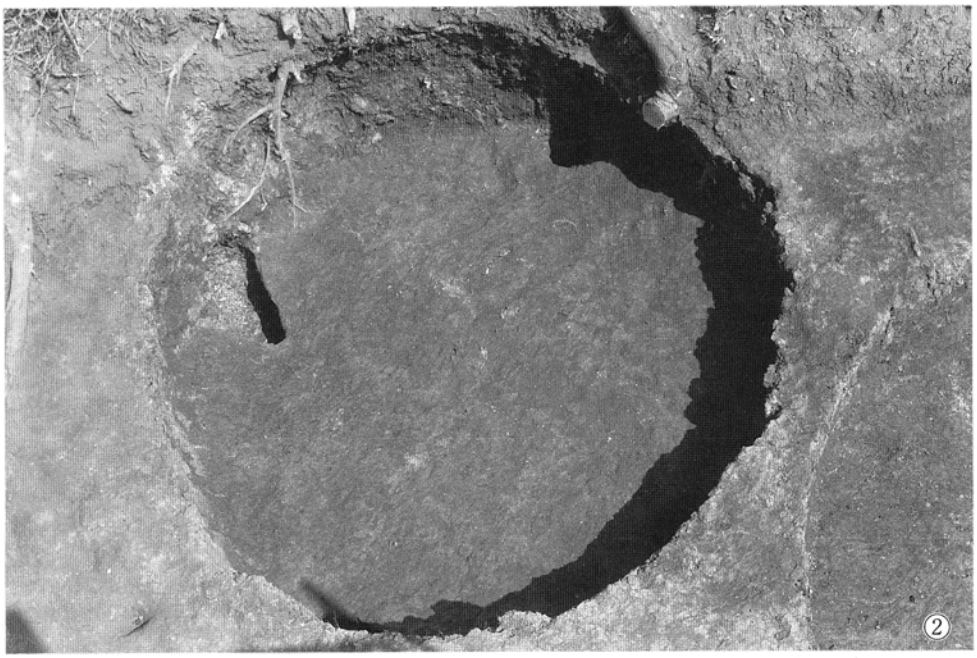
② F−7c区
第2号袋状竪穴断面



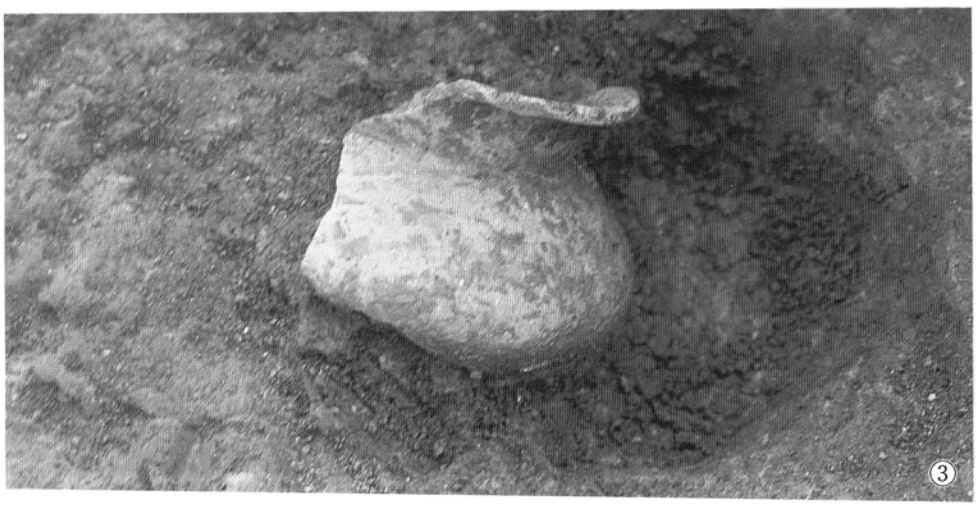
③ F−7c区
第2号袋状竪穴



① F−7c区
第1·2号袋状竪穴



② F−7c区
第1号袋状竪穴



③ F−7c区
第2号袋状竪穴
遺物出土状況

板付周辺遺跡調査報告書第19集
福岡市埋蔵文化財調査報告書第567集

1998年(平成10年)　3月31日発行

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷　三栄印刷株式会社